

リス王はこの工夫を非常に褒めた。そしてペリルスに次のやうに言つた：「お前の作品は實に前代未聞の珍品である。お前は我れ以上に残酷であるから、先づ誰れよりも先きにその犠牲者にならなくてはならぬ」

かのキデイウスが言つた如く、殺す方法を工夫した技師は、先づ己れ自身が發明したところの、その道具で死んでみせるのは、最も公平な掟である。

〔解説〕

可憐なる者よ、不正な行ひをやらうとして、その爲に結局自分自身で苦しむやうになる悪人は、皆この技師のやうな者である。

#### 四九、悪魔の誘惑

ロンゴバルディ人の歴史家パウルスの話したことであるが、ハンガリー人の國王コーナンなる者

が、ジュリアスの都市城を包圍してゐる間に、其所の大名夫人ロージネラなる絶世の佳人が、四男二女の大家族を引連れて城壁に登つてゐるのを目撃した。彼れは彼女と言葉を交換した。そして、若し彼女が彼れと結婚するならば、彼女が今防禦してゐるその城を彼女に與へてやると申出した。夫人はこれを承諾した。しかし、彼女の息子等は彼等の母親のこの反逆的行爲を見て大に憤つて、相携へて城を逃げ出した。しかし、敵將コーナンは約束の實行を固執してその翌日ロージネラを妻として迎へた。だが、彼れは結婚の翌日彼女をハンガリーの十二人の軍人に引渡して、彼等の欲するまゝに彼女を罵倒させた。そして三日目に彼女の咽喉を刺して殺させた。その理由に曰く：「下劣な情を満足させる爲に國を賣つた妻は、皆、かくの如き夫を持つものと知れ」

〔解説〕

可憐なる者よ、コーナン王は城即ち人の心を包圍した者であるが故に悪魔である。又正しき道を踏み迷ふ婦人は、皆ロージネラである。ロージネラの子供は悪事の人り來たる時に胸を棄て、ゆく道徳そのものである。ハンガリーの軍人とは、心の荒んでゆく悪徳そのもの、謂である。



## 五〇、公平な判事の譽

ヴァレリアスの言ふところに依れば、皇帝ゼロンガスは一つの法律を設けて、若し何人にもあれ處女を汚した者があれば、その男の兩眼をつぶして仕舞ふことになつてゐた。然るにゼロンガス自身身のたゞ獨り子が或る寡婦の娘を汚した。そこでその未亡人は直に皇帝の面前に現れてこの事を訴へ出た。

「陛下が乙女を汚した者は兩眼を失ふべしといふ法律をお定めになりましたのは、實によろしいことでありました。ところで、陛下の御獨り子なる王子は、不幸にして私の娘をお汚しになりました。何卒王子を規則通りに御處罰になつて下さい」

皇帝はこれを聽いて非常に苦痛を感じたが、しかし直に命令を發して王子を罰することの準備をなした。二人の貴族はこれについて次の如く意見を述べた。

「犯罪者は陛下のたゞ獨りの王子であつて、然かも王位をつぐべきお仁である。然るに今そのや

うなお仁が、この事件の爲に兩眼を失ふことになつたら、これほど神の御教へに背いたことはありません」

皇帝は答へた。

「でも、これが私の定めた法律なのだから止むを得ぬ。事件が事件で餘りに不名譽であるから、私自身も大に落膽してゐる。しかしそれが爲に決心を鈍らすことは斷じてない。この規則を最初に破つた罪人は私の子供であるが故に、罰を受ける最初の者は同様に私の子供でなくてはならぬ」

貴族は言つた。

「嗚呼、何卒私共の願ひ申すことをお聞き下さいまして、王子の過を許してやつて下さい」

皇帝は彼等の熱心な願出を聽いて、多少心が動いたと見えて、暫時考へてゐた後、次のやうに言つた。

「私の友よ、私の言ふことを聽いてくれ、私の兩眼は即ち私の息子の兩眼である。同様に私の息



子の兩眼は即ち私の兩眼である。だから、私からは右の眼を剔り取り、私の息子からは左の眼を剔り取つてくれ。さうすれば規則を遵奉したことになるから」

皇帝のこの處置は親としての愛情を最もよく表はしてゐたので、人々は感心してゐた。國民の全部は皇帝の賢明にして且つ正義を重んずることを激賞した。

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は基督のことである。兩眼は神の恵みと永遠の幸福を表現してゐるものである。罪を犯した者が、若し神の子基督の同情及びその同情の結果として現れて來たところの基督自身の苦難といふことに依りて、その相當した罰を改められるといふことがなければ、是等の神の恵みも永遠の幸福も全く失はれて仕舞ふことになる。

五一、強奪

ジョセファスの記録によれば、ティベリアス・シーザーが地方の長官等が何故役所に永く居残つてばかりをるのかと問うた時、その問ひを受けた人が實例を示して巧みに答へたといふことである。その話はかうである。

私は或る一人の病人が瘡で全身を犯されてゐるのを見た。澤山の蠅がこの病人を襲つて來て、その瘡の上にとまつて、病人を苦しめることが實に甚しかつた。然るに彼れは拂蠅子はへらひを用ひるでもなければ、蠅に苦しめられるのを氣にするでもなかつたやうであるから、私はその譯を問うてみた。ところがその人の答へは實に悟りきつたものであつた。即ち彼れは次の如き答へを私に與へたのである……成程貴殿のお考へになるやうにこの蠅を拂蠅子で追ひ拂つたら私は助かるやうにも思はれますが、實際はその反對に十倍の苦痛を齎すことになりました。何故と申せば今このやうに私の血を啜つてゐる蠅が、追ひ拂らはれたならば、更に空腹を感じてゐる新しい蠅が機會を得て、その代りに私を攻撃してくるに相違ありませんから。飢ゑた蟲に噛まれることが、たらふく血を啜つた蟲に噛まれるよりも幾千倍も痛いことは、誰れでも承知してゐることです……これをしも痛くないと言ふ者があれば、その人は石であつて決して肉でない人です」



## 〔解説〕

可憐なる者よ、地方の長官で、既に永年その職にとまづてゐて、強奪の結果した、か私腹を肥やした者は、新任の、貧しい又腹のへつてゐる地方長官に比して、その人民を壓迫する程度が猛烈でない。

## 五二、誠實

ヴァレリアスの記録に依れば、ファービウスは、或る金額を支出するといふ約束で捕虜を買戻したことがあつた。然るに元老院はその後の金額を支出することに反対した。ファービウスは止む無く彼の所有してゐる一切の財産を賣り拂つて、その収入で前約通りの金を仕拂つた。彼れは正直の點に於て貧であるよりは、財産に於て貧であることが寧ろ心安しと考へたのである。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、ファービウスは基督である。何故ならば、基督は己が生命を棄て、人類を永劫の死から救済し給うたからである。

## 五三、轉任せざる君主

ヴァレリアス・マキシマスの語るところによれば、シラクースの人々がシシリーの王ダイオニシアスの死を希望してゐたが、それとは丁度反對に、或る婦人がたゞ一人だけ、毎朝彼れのためにその長命とその在位の長からんことを神々に祈つてゐた。ダイオニシアスはこの例外者を見て非常に不思議に感じてその理由を訊ねた。

彼女は答へた。

「私が未だ少女であつた頃君主として暴君を上戴してゐたことがありました。その時私は君主の入換のあることを熱望致しました。間もなく私達の君主は入換になりました。然るに新しい君主はもつと悪い人物でありました。次にその暴君から免れたかと思つたら、それよりはもつと悪い暴



君が、その後任者として参りました。さういつた譯で私は貴殿が王位を退かれたならば、其の後任者として極悪の者が来るのではなからうかといふ心配……然かもそれが理窟に合はぬ推量でもありませんから、寧ろ貴殿から一日も長く王様になつてゐて貰ひ度いのであります。それで私は毎朝貴殿の爲にお祈りをしてゐる次第であります」

ダイオニシアスはこれ以上彼女に手数をかけなかつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、變化を希望す可らず。神は慈悲深いものである。故に神の治め給ふことをもつて満足すべきである。

## 五四、天國

皇帝フレデリックはカプアの入口に不思議な大理石の門を造つた。この門は流れ水のその源流を眼

下に見て聳立してゐた。そしてこの石門に皇帝及び二人の判事の像が彫刻してあつた。右側に彫つてある判事の頭上に、半圓形をなして次の如き文字が刻んであつた。曰く、「彼れ自身の安全と無罪を欲する者は是所に入らしむべし」。同様に左側の判事の頭上には「追放と入牢は嫉妬者の刑罰なり」と刻んであつた。次に皇帝の頭上に半圓形でかう書いてあつた。曰く「私の爲に不運の目に遇つた者は、皆私の力で償つてやつた。同様にその門の上にも次の句が刻んであつた。「シーザーの治下に於て私は王國の守護者となつた云々」

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語の皇帝とは神のことである。大理石の門とは教會堂のことである。又流水の傍にこれが聳えてゐるといふのは、世界を見下してゐるといふことである。世界は川の流れるがやうに流れてゐるものである。判事とは基督の生母マリアと傳道者ジョーンのことである。

## 五五、罪ある者の罪を許す



或る大王は一人の美しい王子を有つてゐた。この王子は凡ゆる機會にその賢明なことや、勇敢なことや、又禮儀に厚いこと等を表はしてゐた。王はこの王子以外に四人の王女を有つてゐた。正義、眞實、慈悲、平和の四徳の名をかたどつて是等の四人の王女の名としてゐた。王は王子の爲に適當な配偶者を得ようと思つて使者を各地に遣して適當な美人を探させた。ジェルサレムの王女は終にその選にあつた。そしてこの姫は若い王子の心にもあつたので、早速結婚の式を擧げた。

當時この大王の宮廷に一人の寵臣があつて、皇帝から何事も委ねられてゐた。特に皇帝の一領地のことは萬事彼れが意のやうに行ふと言ふ有様であつた。然るにこの孽臣は皇帝の重なる恩義に報いるに不徳の行爲をもつてしたのである。即ち彼れは王子の妃を誘惑し、己が皇帝から委ねられてゐる領土をこれが爲に蕩盡すると言ふ有様であつた。王子は新妻の此の事を知るや狂はんばかりに悲しみ、終に一切の名譽を奪つて彼女を離縁して仕舞つた。彼女はこれが爲に貧乏のどん底に落ちた。そしてこの淺間敷い有様に墮して絶望の極、場所から場所へと食を乞ひ、又一日も早く死んで仕舞ひ度いと願つてゐた。しかし死の神は彼女の救済に来てくれなかつた。

王子は終に彼女の氣の毒な境遇に同情するやうになつた。そして彼女を宮殿へ喚び還へす爲に幾度も使者を彼女に送つた。使者は言葉を和けて彼女に説いた……「さあ、さあ、宮殿へお還り遊ば

せ。何事も御心配なさる必要はありません。王子はお待ちかねであります。何も御心配なさらなくてもよろしいです」。

しかし。彼女は斷乎としてその言葉を拒絶した。そして彼女は言つた……

「何卒、殿に申上げて下さい、私が殿の御側に戻り度いのは山々であります、それを思切つてやり得ぬ身分であります。若し殿がその譯をお問ひになりましたらば、それはたゞ嚴かな御掟に従ふためだとのみお答へ申上げて下さい。結婚した女が姦淫の罪を犯せば、夫から離縁されることに國法が定められてをります。そして離縁狀を渡された時からその女は最早妻たる資格はなくなる譯であります。私は姦淫の罪を犯したために離縁狀を渡された女であります。夫の所へ戻ることに出来ぬ女であります。

使者は答へた。

「我等の君主は彼れ自身でお作りになつた法律其物よりは、大きな力を有つてゐられるのであります。随つて君主が貴女に對してその罪をお許しになるといふお考へである以上は、貴女もその思



召し通りにお還りになるのが當然であらうかと思はれます。これ以上は貴女を罰したり、非難なさることはございません」

彼女は答へた。

「それはどうして保證が出来ませうぞ、若し殿がそのことを私に保證して下さいならば、又殿が御自身で是所へお出で下さいまして、御自身の唇でこの私の唇に接吻して下さいならば、その御厚意が私に通じますが……」

使者は直に宮廷に還つて彼等と彼女との間に交換された話の顛末を王子に傳へた。王子は領内の賢者達を呼び出した。そして如何なる方法を探つたならばよからうと相談した。賢者達は慎重にこの問題を考へた後、ともかく經驗もあり思慮もある人を選んで、彼女の還御を勧めるに如くはないといふことに歸着した。しかしこの策を案出した賢者連の中で誰れ一人として、この役目を引受ける者はなかつた。王子は非常に窮地に陥つて又々使者を彼女に遣はして次のやうに傳へさせた……「私はお前に對して如何にすればよいか分らぬのである。私の考へてゐることを首尾よく行つてくれる人物

は今私の領内に一名もゐない」

彼女は之を聽いて倍々苦痛を増すばかりであつた。彼女はさめくくと泣いた。彼女の有様が委しく王子に傳へられた。王子は父王に請うて彼女を一刻も速く宮廷へ呼び戻して、その悲しみを和けてくれと嘆願した。父王は勿論これを承認した。そして言つた……「すぐにも往くが、そして一度失つたその席を彼女に與へてやるがよい」

使者は戻つて彼女に殿が御自身でお迎へに見えるといふことを告げるやうにと命ぜられた。然るに王子の姉なる正義姫は、王子の企て、ゐることを萬事承知した後、直に父王を訪づれて次のやうな反對の意見を述べた。

父上よ、貴殿は果して正しいことを行つてゐらつしやいますか。又貴殿の御判断は正しいでせうか。女郎のやうな彼女が再び私の弟の妻となるとは何といふ理窟の合はぬことでせう。貴殿は彼女に對する離縁狀を正しいものとしてお認めになつたのはつい先日のことでありました。それであるのに今貴殿は正しい道をお棄てになつて、このやうな馬鹿々々しいことを御實行になるならば、私は今日



限り貴殿の娘であることはお断り申します」

二番目の姫……眞實の名で呼ばれてゐたその第二女は次の如く陳べた。

「父上よ、只今姉上の申されたことは眞實であります。若し貴殿があのような女を再びお呼び還へになるならば、眞實の道は全く滅びて仕舞ひます。さうなれば私も亦娘としての道は行ふことは出来ません」

然るに第三女……慈悲にちなんだ名の第三番目の姫は、二人の姉の言葉を聽いて次のやうに反對した。

「父上よ、私も亦貴殿の女であります。何卒この後悔してゐる婦人の罪をお許しになつて下さい。萬一、貴殿がそれをお許しにならぬならば、慈悲の道をお棄てになると申すもの。さうなつては彼女は二度と貴殿を父として認めることはないでせう」

第四番目の妹……平和にちなんだその第四女は、父と姉達の争ひを見て甚く恐れを抱いたものと

見え遠い田舎へ逃げ出して仕舞つた。

正義、眞實の二人の姫は彼女の素志を棄てることはなかつた。彼女の父王の掌中に拔身の劍を授けて次の如く言ひ放つた。

「父上よ、私等は父上に今正義の劍をお渡し致します。何卒この劍を振つて私達の弟を怒らせたあの女郎を斬つて下さい」

しかし、慈悲姫は進み出で、彼等の掌中からその劍を奪ひ取つて叫んだ。

「父上よ、貴殿は十分長い間此の國をお治めになりました。貴殿の御趣味はたゞ國法といふことのみになりました。しかし今はそのお考へをお棄てにならなくてははいけません。私も亦國王の娘であることをお忘れにならぬやうにお願い申上げます」

これに對して正義姫は答へた。

「お前さんの申すことは理窟がある。私達は長い間人心を治めて來たものである。今後も亦長い間私達の權威を保存し度いと思ひます。しかし私達は何故このやうに争はなくはならぬのでせ



う。弟を是所へ呼び出して來ては如何でせうか。彼れは私達凡ての者より賢い人物であります。私達の議論の是非を弟から判断して貰ひませうよ」

この申出は皆の者から認められた。王子はこゝへ呼び出された。姉君達は彼等の論旨を一つ々々陳べたてた。そして正義姫と眞實姫が熱心に國法の適用を主張してゐるのに反して、慈悲姫と平和姫が寛大な處置を希望してゐることが、こゝで委しく説明された。

王子は言つた。

「姉君達よ、私は平和姫が他の姉君達の争はれるのを見て、驚いてお逃げになつたことを遺憾に思ひます。このやうなことはあるべき筈のものでもなく、亦今後もあつてはならないことと思ひます。偕て私は私の姦淫の罪を犯した妻の一身上に關しましては、私自身で彼女の罰を引受くべきものであると覺悟してをります」

正義姫は言葉を入れた。

「それがお前さんの決心であるならば、私達はお前さんに反對しない」

王子は慈悲姫の方を見て言つた。

「姉上、何卒私の妻を還へすことに御盡力を願ひます。しかし萬一私が彼女を呼び戻した後に再び彼女が墮落致しましたならば、貴女は再び和解の勞をとつて下さいますか」

慈悲姫は答へた。

「否、否、但し彼女が眞實に後悔すれば又それは例外だが」

王子はこゝに於て彼れの姉君なる平和姫を呼び戻した。そして他の姉君達と一人々々相抱いてその悦びを交換せしめた。仲直りが芽出度終つたのを見て、王子は彼れのさまよへる妻の許へと急いだ。彼女は凡ての名譽を與へられて迎へられた。そして平和に彼女の一生を送つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語中の王者とは私等の天の御父のことである。又その王子とは基督のことである。次にその王子の妻は、かの惡魔となつて不純のものとなつた所の人間の魂その者である。



## 五六、死を忘れぬこと

或る大名は遊獵に多大の興味を持つてゐた。或る機會に一人の商人はこの大名と同じ路をとつて獵をする事になつた。商人は大名の華美な様子を見て獨語した……

「何といふ天の力を授つたものだらう。神様からあのやうな恩恵を受けるとは何といふ果報者だらう。美しく、雄々しくて、それに又優美ときてゐるから驚く。加之、彼れの隨行者も美しくいでたつてゐるから素晴らしいものだ」

かういつた風にすつかり感心して仕舞つたので、彼れはその大名の従者の一人に次の如く話しかけた……

「貴殿の御主君は餘程權勢のある御仁と見えますね」

従者は答へた。

「大きな領地を心のまゝに支配してをられる大名ですよ、寶庫には金銀が山と積んであります。奴

隸もいくらあるか分らぬ程です」

商人は言つた。

「何といふ果報者だらう。あのやうな立派な御仁を見たことは無い。實に智勇兼備の名君といふもの」

従者はこの商人と話し合つたことの顛末を彼れの主君に告げた。大名は夕方のお祈禱に家路を指差して還へりかけた時、商人に請うて今夜は是非とも私の家で一泊してくれというた。權力家の懇請は命令である。商人は迷惑とは思つたものゝ止むなくその御殿に入つた。富の大きなことを大袈裟に誇つてゐるその生活振りは、何を見ても皆鮮かに證據だてられてゐた。黄金で隈なく飾りたて、ある美しい廣間の數々を見ては、たゞ目がくらむばかりであつた。廳で夕食の時刻となつた。商人は大名の命に依りて大名自身の席に即けられた。彼れは餘りの面目をほどこして氣がぼうつとする程であつた。彼れは私に叫んだ……「あ、實に驚いた。この大名は己の好む物は悉く掌中に入れてゐる。美しき妻、美しき娘、勇敢な息子……それにこの廣い屋敷……」



彼れがこのやうなことを考へてをる時、食事が彼れの前に運ばれた。これは又何といふ呆れたことだらう。人間の頭蓋骨の中に食物が入れてあつて、その中から御馳走を一つ一つ銀の皿に移して、大名と商人の前に供へられるのであつた。商人はこれを見るや思はずぞつとした。そして彼れ自身の頭蓋骨も程なくこれと同じやうなひどい目に會はされるのではなからうかと思つた。そして心の中で「あ、私は死人だ、死人だ」と叫んだことは一度や二度で無かつた。

かゝる間に大名夫人はいろ／＼の親切をつくして商人を慰めてくれた。夜が迫つて來た。彼れは寢室へ案内された。その寢室といふのは周圍に釜がつるしてあつて、その一隅に光りが澤山點じてあつた。そして商人がこの部屋の中に入ると扉が固く閉ぢられたのである。彼れは氣の毒にもたゞ一人、襲ひ來たるところの怖れの念に捉はれるのみであつた。絶望して周圍を見たところが、これは又何といふ恐しいことだらう。兩腕で天井からつるされてゐる男の死體が二つもあつたでは無いか。商人はこのものすごい物を見せつけられて今はとても辛棒が出來なくなつた。冷たい汗が額から流れ落ちて來て、到底眠れるどころの話では無つた。翌朝直ぐに彼れは起きた。しかし、怖れの念がさらに増すばかりであつた。彼れは叫んだ：「嗚呼、私は是等の淺間敷しい死人の側につるされるにきまつてをる。あ、私はどうなるのだらう」

大名が起き出で、商人をその面前へつれてこさせた。

彼れは言つた。

「どうだ、この屋敷で何が最もお前の氣に入つたか」

商人は答へた。

「凡ての物が私の氣に入りました……たゞ人間の頭蓋骨に食物が入れてあつたのは閉口致しました……あれを見たゞけでも心持が悪くなりましたして手も觸れる勇氣がありませんでした。それから眠らうと思ひますと恐しい物がありまして、つい一睡も致しませんでした……私は最早やお暇乞を致します」

大名は答へた。

「お前に食物を提供してやつたあの頭蓋骨……私の妻……美人ではあるが心の正しくない私の妻の……その側に置いてあつたあの人間の頭蓋骨は、或る貴族の頭蓋骨である。其の譯をお前に話してやらうよ。實はあの頭蓋骨の持主であつたところの貴族は、不都合にも私の妻と不義の契りをや



つた男だ。それで私はその醜い現場を見たので、怒氣一時に天を突くといふ有様で、一刀兩斷、彼の胴と首とを分つたといふ譯だ。それより後私は私の妻にその恥を忘れさせぬ爲にこの記念の頭蓋骨を彼女の面前に置かせて、ひたすら彼女の懺悔を促してゐる次第である。然るに我が家の不幸はこれだけではなかつた。それは私の同族の二人が前記の死された貴族の一子に殺害された事である。私はこの二人の死骸をお前が前夜入つてゐた寢室につるして置いたことでも分かる。私は毎日必ずこの死骸を見にゆくののである。そして彼等の爲に何とかして讐討をしようと思ふその勇氣を、我れと我が心ではげましてゐる譯である。私は我が妻の姦淫の罪を犯したことや、同族の殺害された憐れな有様等を考へると、この世に何等の樂しみも望まないやうな感がする。しかし、もうこれでも話もないからお別れにしよう。だが私から聞いた教訓は忘れぬやうにして貰ひ度い。繰返へして言うて置くが、外部に現はれてゐる事柄はあてにならぬもので、人生が如何に美しい有様にあつても、死といふものが廳て巡り來たることを暗示してゐるものだと思ふがよろしい。」

商人は去ることを許されたので大に悦んだ。そして商業上に一層の満足をもつて戻ることになつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、大名とは罪を犯した妻を持つてゐる善良なる基督教信者のことである。又その妻とは罪を犯した魂を指差すものである。この汚れた魂は罰を受けたのでその罪過を思ひ出して、罪業の償ひをするのである。姦淫をした者とは、悪魔のことである。首を斬るとは我等の惡業を滅することである。大名の親族者で殺害された者のあつたといふのは、神と我等の隣人に對する愛を説いたものである。この愛は我等の祖アダムの罪に依りて滅びて仕舞つたものである。商人とは我等が常に眞實を告げなくてはならぬところの善良なる僧又は懺悔聽取僧のことである。

〔考證〕

人間の頭蓋骨を食器又は盃に造つたといふ話は第十五六世紀頃の物語に屢々現れて來る思想である。

(‘Gold. Leg.’ 前記 ‘King of the Lombards, his Tragedy’, 等参照)

五七、完全な生活



タイタスがローマ皇帝であつた頃、彼れの長男の誕生日はお祝ひの爲に國民の全部が皆業を休むこととした。そして萬一その日に誰れでも仕事を行ふ者があれば、直に捕へて死刑に處する旨言ひ渡した。彼れはこの命令を徹底させる爲にヴァージルと呼べる者を呼び寄せて次の如きことを言つた。

「私は或る法律を設けたが、しかし、法官の目を盗んでこれを犯す者が相當に多からうと思ふから、何か巧妙な方法に依つて、凡ての反則者を檢舉し度いものだ。何か工夫はあるまいか」

ヴァージルは快くこの大任を引受けた。そして時を移さずその計略を考へ出した。彼れは一つの不思議な像を造つた。そしてこれを都市の中央に建てた。この像は不思議な力を持つてゐて、過を犯す者があれば直にこれを皇帝に告げた。随つてこの像から告發された爲に、有罪者と目されて刑罰を受けた者は無數にあつた。

當時フーカスと呼べる大工があつて、彼れも亦毎日のやうに彼れの仕事を勵んでゐた。或る日のこと、彼れが床に横つてゐた時、ふとしたことから、この像の爲に被害者の多いことを思ひ出した。彼れは翌朝夙く起き出で、衣をつけて直にその像の所へ出かけた。そして次の如く言つた。

「像よ、像よ、お前の密告の爲に私達の多くの市民は捕へられて死刑になつた、若しお前が私のこ

とを告訴するやうなことがあれば、私は黙つてはをらぬぞ。必ずお前の頭を割つてみせるから……」

さう言つて彼れが家に還つた。それから一時間ばかりたつと、例の如く皇帝はその像に數名の使者を遣して、命令が嚴重に行はれてゐるや否やを問はせた。使者が像の前に立つて皇帝の傳言を陳べ終ると、像は叫んだ……「私の額に書いてある文字を讀んでみよ」と。彼等はその文字を見ると、「時代が變つた。人々は悪化して來た。眞實を言へば頭を割られる……かう言ふ三つの句が書いてあつた。

像は言つた……「さあ、速に宮城へ還つてお前達が見たことを皇帝に話してくれ」。使者は命ぜられるまゝに宮城へ戻つて、この事實を委しく皇帝に奏した。

皇帝は直に彼れの近侍の兵を呼び出して武装せしめた後、像の立つてゐる場所へと向はせた。そして若し何人にもあれ邪魔だてする者があつたら、その者を捕へて手と足を縛つて我が面前に引立て來いと命じた。近侍の兵は像の許へと急いだ。そして言つた……「皇帝の御命令であります、貴像あなたに對して無禮を敢てする者は誰れでありますか、何卒その名を言つて下さい」

像は答へた。



「それは大工のフォーカスといふ男である。彼奴は毎日々々法令を破つてゐるばかりでなく、若し私が彼れの罪惡を告訴するならば、頭を割つてやるぞと嚇してゐる」

フォーカスは直ちに捕縛されて皇帝の面前へ引出された。皇帝は彼れに何故國法を破つたかと訊ねた。

フォーカスは答へた。

「陛下、それは私が到底守ることが出来ぬからであります。何故と申せば私は毎日八片<sup>ペニ</sup>を得なくてはならぬ必要があるからです。しかし、この八片と申す金は毎日休みなしに働かなくては得られない金ではありません」

皇帝は重ねて問うた。

「それは又何故か。何故八片の金と言ふのか」

大工は答へた。

「私が一年中毎日々々必要な金は八片<sup>ペニ</sup>あります。その内譯を申せば、若い時代に借金した二片<sup>ペニ</sup>を毎日返済しなくてはならぬことが一つ、それから私が貸出さなくてはならぬ金が二片<sup>ペニ</sup>、私が費さなくてはならぬ金が二片<sup>ペニ</sup>、これが合計八片<sup>ペニ</sup>になる譯であります」

皇帝は改めて問うた。

「然らばそれは何の爲に？」

大工は答へた。

「陛下、何卒お聴き下さい。私は毎日私の父親に對して二片<sup>ペニ</sup>づ、拂ふ義務があるのです。その譯は私が子供の時に私の父親が私に毎日二片<sup>ペニ</sup>づ、費やしてくれたからであります。然るに私の父親は今貧乏してゐるので私の補助を必要としてをります。だから私は昔父親から借りた金を返済することにしてをります。次に私は息子の爲に、二片<sup>ペニ</sup>づ、送金するのは、彼れの學資金にこれを充てる爲です。私が將來貧乏したら、丁度私が今彼れの祖父に借金を返へしてゐるやうに、私の爲に金を返へしてくれること、思ひます。次に私は毎日二片<sup>ペニ</sup>づ、損失するのは、これは私の妻の爲に失ふ金であ



ります。私の妻は反対好きで、我儘者で、その上非常な疝癩持ちであります。さういつた性質の女でありますから、彼女に與へた金は全部棄てたやうなものだと私は思つてをります。最後に私は食物と飲料の爲に二片<sup>ペニー</sup>を費やしますが、これは私自身の爲に必要なのであります。私はどうしても八片<sup>ペニー</sup>が一文缺けてもその一日を送れないのであります。そしてこの八片<sup>ペニー</sup>を得る爲には一日でも遊んでゐることは出来ません。さういふ譯でありますからこの事情を御了解下さいまして、何卒冷靜に又公平に御判断を仰ぎ度いのであります」

皇帝は言つた。

「成程お前の答は理窟がある。さつさと家へ還へつて一生懸命にお前の業務を勵むがよい」

この事があつてから程なく皇帝は死んだ。人工のフォーカスは世にも珍しい智者であるといふので、全國民の賛成を得て、皇帝の位に選ばれた。彼れはその昔大工であつた時と同様に、國家を治めることが實に上手であつた。彼れが死んでから彼れの爲に一つの像が造られて、歴代の皇帝の像の間に竝べて置かれた。その像は頭上に八片<sup>ペニー</sup>を戴いてゐる像であつた。

### 〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝はかの日曜日を以て安息の日とお定めになつた神様のことである。ヴァーヂルは聖靈のことである。人間の善事と悪事を公にするやうに説教者に命令するのは、この聖靈である。最後に毎日一生懸命になつて己れの業務を勵み、又それらの義務を忠實に行つてゆく善良な基督教徒は、皆これフォーカスと同一の人である。

### 〔考證〕

ヴァーヂルはかの文豪ヴァーヂルとは全くの別人である。こゝに引用されたヴァーヂルは歐洲の中世期に於て妖術の祖と仰がれた怪僧のことである。固より傳説的のことのみが多く加つてゐるが、ともかく、ヴァーヂル中心の文學は後世の妖術傳説に大なる關係を持つてゐる。

## 五八、告白



アスモデアスと呼べる王は一つの法令を定めた。それに依れば悪事を行つて法官の前に引出された者は、例外なしに必ず三つの着實の事柄を明かに公言することになつてゐた。若しこれを拒む者があれば重く罰せられることに定つてゐた。但しこの規定の事柄を行ふならば、生命も財産も無事であつた。

會々こゝに一つの事件が持ち上つた。それは或る一人の軍人が法律を破つて逃亡したといふ事件であつた。彼れは森林の中に逃げこんだ。そして其所でさまざまの兇惡な行爲を敢てした。即ち彼れの手を觸れるかぎりの者は、何人でもかまはず、その財寶を掠奪し且つこれを殺害したのである。その地方の法官は彼れの出没する場所を明かにした後、その森林を多くの人々で包圍して、終に彼れを捕へた。そして法廷に引出した。

法官は言つた。

「法律は承知してゐることであらうな」

罪人は答へた。

「はい、承知してをります。明かな三つの事實を申上げることが出来れば、お許しになるのです。

若しそれを拒めば殺されます」

法官は言つた。

「その通りだ。だからその法令の寛大な御恩を受けるやうにするが、若しそれが嫌ひだといふならば、一刻の猶豫なく下されるところの刑罰を受けよ」

罪人は大膽に言つた。

「私の申上げることとは御他言御無用でありますぞ。それに對して御意見如何でありますか」

判事は他言せぬといつたので、罪人は次の如きことを言つた。

「先づ第一の事實はこれから申上げるやうな事柄であります。私は皆様の前で明言致しますが、若い時代から悪人であつたのです」

判事はこれを聴くや傍聽人にその眞否を問うた。傍聽人は悉くこれを認めて且つ言つた……「彼



の男が若し若い時から善人であつたら、今このやうな浅間敷い目を見ない譯です」  
そこで判官は言つた。

「第一の問題はそれでよし。次は如何に」

罪人は答へた。

「私は只今居るやうな危険な位置は好きではありません」

判事は言つた。

「成程、それも事實だ。お前の言つたことは信じてもよい。然らば第三の事實は如何。それさへ正直に答へればお前の生命が助かるのだ」

罪人は答へた。

「嗚呼、ほんに私はこの困りきつた場所から免れることが出来れば、二度とこんな所へは來ぬつもりであります」

法官は言つた。

「萬事よし、お前は智慧があるので一命が助つたよ。安心して去れ」

かういつた譯で彼れは命拾ひをした。

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は神様のことである。軍人とは罪人のこと、法官とは賢明な懺悔聽取僧のことである。若し罪を犯した者が、このやうに、悪魔でも反對することが出来ぬやうな仕方で事實を告白するならば、一命を助けられる……若しその罪人が懺悔し告白するならば。

## 五九、高慢者の損害

ジョヴィニアンが皇帝であつた時その権力は實に大なるものであつた。彼れが彼れの領土の大きなこ



とを考へながら床の上でたゞ一人得意になつてゐた。彼れは餘りに驕慢になつて終に「我れ以外に神ありや」と放言するに至つた。そして彼れはこのやうな考を抱いたまゝで熟睡した。

翌朝彼れは彼れの兵を檢閲した。そして彼等に「朝食後狩獵に出立する」と言つた。準備がいよいよ出来たので彼れは澤山の從者を引連れて出立した。狩獵の間に彼れは非常な暑さで苦しめられたので、水浴しなけれど到底生命がつかぬと感じた。近くに水が無いかと思ひながら周圍を見ると、餘り遠くない距離の地點に、水があるのを發見した。彼れは從者に「お前は是所にとゞまつてをれ、私はあの流れて一風呂浴びてくるから」と言つた。そして彼れは馬をたて、水の傍へと駈けた。彼れは流れの岸へ着くや否や馬から降りて衣を脱いだ。そして新鮮な、そして又冷たい水に全身をひたして非常に元氣が恢復したのである。彼れがこのやうに冷水に浴してゐる間に、凡ゆる點に於て彼れそのまゝの姿をした男が……容貌も態度もジョヴィニアン帝其儘であつたところの男が、何時の間にか分らぬ中に、皇帝の衣を盗み取つてこれを己が體に纏ひ、且つ皇帝の馬にさへ跨つて、さつさと皇帝の從者の居る所へ駈け出したのである。この男が皇帝に餘りに善く似てゐるので、誰も彼れを贋者として疑ふ者は無かつた。それ故彼れは直に兵士等に命を下して官城へと還つた。

ジョヴィニアン帝は水中から出て來て、彼れの馬や衣類を是所彼所と搜したが、何所にも見當らない

ので非常に驚いた。彼れはどうしたことかと思つて大に狼狽した……全身に一物も着けない全裸體で、然かも彼れの爲に手助けをしてくれる者が一名も側に居らぬので、これから如何にすればよいか自分ながら分らなかつた。

彼れは言つた。

「何といふ不運な目に會つた者だらう。このやうな苦しい境遇に落されて仕舞てはどうにもならぬ。この近くに一人の武士が住んでゐる筈だから、先づ差當り彼れの家を訪づれ、萬事彼れ身のまはりの世話をさせよう。これから騎馬で宮城へ戻つて、この不届なことをやつた奴を嚴重に取調べてみよう。かういふ無禮を冒した奴は嚴罰に處してやる」

皇帝は不面目にも裸體のまゝで前記の武士の居城へと急いだ。そしてその城門を音高く叩いた。然るに門番は入口を開けることなしにたゞその理由を尋問するのみであつた。皇帝は怒つて「門を開けろ、門を開けさへすれば私が何人であるか、自然に分るのだ」と叫んだ。門が開られた。門番は全裸體の變な男が門前に立つてゐるのを見て、びつくりして仕舞つた。

門番は問うた。



「やあ、やあ、不思議なこともあるものだ、一體お前は何者だ、全裸體で……」

皇帝は答へた。

「俺だよ、ジョヴィアンだよ、お前の皇帝のジョヴィアンではないか。速く主人にこの事を通じて、皇帝の爲に不便の物を捧げよと言ってくれ。馬も着物も失つて仕舞つたから……」

門番は叫んだ。

「無禮者め何を言ふか。汝の来る前に皇帝ジョヴィアン陛下は、家臣の全部を御引連れになつて宮城へお戻りになつたぞ。俺の御主人も陛下のお伴をしてお戻りになつた。そしてつい今陛下と御一緒に御食事をなされたのである。しかし、汝は假令狂人にもせよ、自ら皇帝だと名乗つたほどであるから、俺の御主人にその生意氣なところをお耳に入れて置かなくてはならぬ」

門番はかう言うて中へ入つた。そして事の次第を委しく彼れの主人に話した。ジョヴィアンは直に引出された。しかし、この武士はこれが皇帝であるとは少しも思はなかつた。但し皇帝の方ではこの

武士のことを十分記憶してゐたのである。

武士は皇帝に問うた。

「お前は何者だ、お前の名は……」

皇帝は答へた。

「俺は皇帝ジョヴィアンだ。お前は俺を忘れたのか。かういふ時にお前を一軍の將に榮進させたのに」

武士は言うた。

「何といふ大膽不敵な無禮者だらう。事もあらうに自ら皇帝の名を冒すとは……俺は皇帝のお伴をして騎馬で宮城へ參つて、つい今御殿から戻つて來たばかりなのだ。汝の如き無禮者はそのまゝでは還すことが出来ぬ」

さう言うて武士は従者等に命じて「この無禮者をした、か答打つて後、追出して仕舞へ」と言うた。



命令が直に實行された。憐れにも皇帝は狂はんばかりに泣いた。そして次のやうに叫んだのである：  
 「嗚呼何といふ淺間敷いことだらう。あれ程榮進を計つてやつた者が、このやうに私を殘酷に取扱はうとは……私がこのやうに醜い有様をしてゐるのだから、私を皇帝だと思つてくれぬのは先づ止むを得ぬとしても、あのやうな情も知らぬ小役人どもに私を答打たせるとは實に亂暴にも程度があるといふもの。しかし、覺えてをれよ、遠からずして復讐してやるから……さうだ、さうだ、何んでもこの近くに大名が一人住んでゐた筈だ。私の宮中顧問官であつたと思ふが……よし、よし、その者にこの不運の顛末を話してやらう。少くともあの男なら私を宮城へ滞りなく還すようになしてくれらうよ」

ジョヴィニアンはその大名の邸へと急いだ。彼れの叩きに應じて門が開かれた。しかし、是所でも門番は裸體姿を見て大に驚いたのである。

門番は叫んだ。

「お前は何者だ、そんな有様をして……」

皇帝は答へた。

「俺はお前の皇帝だよ、不幸にして衣類も馬も盗まれたから、お前の主人に助を求めに來た譯だ、一寸相談があるからと主人に傳へてくれ」

門番は倍々驚いて内へ駈込んだ。そしてこの不思議な傳言を彼れの主人にそのまゝに傳へた。

大名は言つた。

「ともかく案内して來よ」

皇帝は迎へ入れられた。しかし大名はこれが皇帝であるとは思はなかつた。随つて例の如く「お前は何者だ」といふ質問が起り、それに對して「俺は皇帝だ」といふ月並式の答へが與へられたに過ぎなかつた。

大名は言つた。

「嗚呼氣の毒な狂人よ、私はつい今宮殿から戻つたばかりだよ、お前が皇帝だと言つてゐるが、實



は私はその眞實の皇帝と宮殿で會つて來たのだよ。しかし、お前が果してこれ以上の馬鹿者であるのか、或は悪人であるのか私には分らぬが、何れにしてもそれを治療してやることが出来るから、さう思つてをれよ。」

彼れはさう言つた後、部下の者に命じて「この男を獄へ入れて水とバンだけで養つてをけ」と叫んだ。

命令一下、直にその如く行はれた。そしてその翌日、皇帝の裸體の身體は笞の洗禮を受けて、再び獄中に投ぜられたのである。

皇帝はこのやうな風で萬事が彼れに不利であつたので、止むなく逆境に彼れの運命を委ねてゐた。しかし彼れは衷心から懊惱の聲を發した：「如何にしたらよからうか。私の運命は將來如何になるのだらう。このやうに人民から亂暴極まる侮辱を被り、兇惡極まる虐待を受けてゐるとは何といふ運命だらう。寧ろこれから直に宮城へ戻つて自分から名乗りを上げた方がよからうかとも思はる。私の妻が私を知らぬ筈は無いのだから……」

彼れは獄を破つて彼れの宮城へと逃げのびた。そして先づ城門を叩いた。前と同様の質問があつた。そして又前と同様の答へが返へされた。即ち門番は「お前は何者か」と問うたのに對して、皇帝は如何にも不平らしい態度で、「お前がこの俺を知らぬといふのは奇怪千萬だ。お前は長い年月俺に事へた者ではないか」と應酬したのである。

門番は憤つて言つた。

「事へたつて？ これは呆れた言葉だ。偽を言ふにも程度があるぞ。俺は皇帝以外に何人にも事へたことは無いぞ」

皇帝は答へた。

「その皇帝といふのはこの俺だ。お前は私の言葉を信じてくれぬやうだが、お願ひだから皇后に取次いでくれ。私がお前に言うとしてゐることを皇后に傳へてくれぬか。私はかういふ記しの物を皇后に渡すから、皇后から皇帝の衣を受取つて來てくれ。實は私は惡漢の爲に皇帝の衣裳を盗まれたのだから。私がお前に話さうと思つてゐる是等の記しの物は、私達夫婦以外の者は誰も承知してをらぬ物だ」



門番は言った。

「疑ひもなくお前は狂人だ。何故と云うて今陛下は皇后と一緒に御食事中であるから。しかし、そのやうに切なる望みを述べてゐるのだから、ともかく奥へ取次いで来よう。それにしてもお前は時を移さず嚴罰に處せられるから、それだけは前以て覺悟してをれよ。」

門番は奥へ行つて聞いたまゝの事を委しく物語つた。然るに皇后は非常に悲しんで次のやうに言つた：「嗚呼、貴郎、私は何としたらよろしいでせう。私達の内密な事が門前に來てゐる淫猥な男の口からもらされ、それが又、門番の口から私に繰返へされるとは何といふ恥しいことでせう。そんなことでその淫猥な男が皇帝だと名乗り、又私の夫だと言つてゐるとは呆れて仕舞ふ」

質物の皇帝がこれを聴くやその男を彼れの面前につれて來させた。彼れが導かれて御殿に入るや否や、爐にかゝんでゐる大きな犬が……これ迄彼れから愛されてゐたその大きな犬ですら、昔の主人の恩を忘れて彼れの咽喉元にとびついた。しかし都合よくもこれを防いだので噛み殺されないのですんだ。亦棲木にとまつてゐた鷹も、彼れが部屋に入つて來るのを見るや否や、その足緒を斷切して逃げて仕舞つた。そこで質物の王は彼れの傍に立つてゐた從臣等にかう言つた：「私がこれよりあの無

頼漢に訊ねることがあるから、皆一同に傍聽してゐてくれ」

彼れは質物の皇帝に問うた。

「汝は何者だ。又汝は何を欲するのか」

氣の毒な皇帝は答へた。

「そのやうな問ひを受けるのが既に變な話だ。今更私の口から言ふまでも無いことだが、私こそは皇帝である。そしてこの宮城の持主である。」

質物の皇帝は卓の所に坐したり或は立つてゐた貴族等に目を向けて言つた。

「では是所に列席の貴族諸子に問うてみるが、私とあの男の何れが諸子の君主であるか、充分考へた後で返答してくれ」

貴族等は答へた。

「陛下は餘りに分りきつたことをお訊ねになります。充分考へる必要もありません。あの淫亂な惡



漢がどうして私達の君主でありませうぞ。私達が幼年の時代から善く承知してをりますのは陛下の御容貌であります。あの不敬漢に對しては、後日再びこのやうな贗者の狂人が出ぬ爲に、何卒嚴罰に處して下さい」

帝位篡奪者は皇后の方を見て言うた。

「お前が私に對して堅く誓つたことのあるその誠實の心をもつて、偽りの無いところを一つ聞かして貰ひ度いが、お前はこの男を知つてゐるのか……この男はお前の夫であり、又皇帝であると自稱してゐるが」

皇后は答へた。

「何故そのやうなことをお問ひになりますか。三十年以上も同棲してゐて、その上又、多くの子供をすら生んだ私が、眞實の夫たる貴郎をこの見も知らぬ男と混同して濟むものですか。それにしても私が驚いてゐるたゞ一つの事柄があります。それは私達夫婦の間だけに起つたことをこの男が餘りに委しく知つてゐることあります」

贗物の皇帝はこれに對しては何の返事も與へなかつた。そして實物の皇帝に向つて次の如く言うた。

「汝は何故そのやうに皇帝の名を僭するのであるか。汝の如き前代未聞の不敬漢に對しては、用捨無しに、はづかしい罰に處してやるぞ。そして若し再び同様の言葉を吐くならば散々に恥を與へて後死刑に處して仕舞ふから左様心得よ」

彼れは彼れの衛兵に命じてこのはづかしい刑罰を彼れに加へるやうにと命じた。しかし、彼れの生命だけは助けて置くやうにと注意した。不運な皇帝は今殆ど狂氣の如き有様となつた。そして絶望の極寧ろ死を欲したのである。

彼れは叫んだ。

「何故私はこの世に生れて來たのだらう。私の知人は皆私を遠ざけてゐる。私の妻も子も私を夫として或は父として認めてくれぬ。しかし、それにしてもなほ私の懺悔聽取僧が居る譯だから、私は彼れを訪づれてみよう。恐らく彼れは私のことを忘れてをらぬと思ふ……私の懺悔を幾度も聽取つてくれた仁だから……」



彼れはこの僧の庵を訪づれてその窓の戸を叩いた。僧は問うた「誰れですか」。「皇帝のジョヴィアンです、窓を開けて下さい、お話し致し度いことがありますから」……これがその答へであつた。窓が開られた。しかし、僧が皇帝の顔を見るや否や蒼皇として再びその戸を閉ぢて仕舞つた。そして彼れは叫んだ……「さつさと去つてくれ、あ、呪ふべき者よ、お前は皇帝では無い、お前は悪魔の權化だ」迫害を受けた皇帝の不幸はこれでその絶頂に達した。彼れは頭髪をかきむしつた。彼れは彼れの髭鬚を根元からかきむしつた。そして叫んだ……「嗚呼残念だ、悲しい、何んといふ因果者だらう」

無念の餘りに彼れが發したところの不敬の言葉が、この危険な時に於て、彼れの追想を裏切つた。即ち彼れは再び前記の僧のことを思出したのである。彼れは直に懺悔聽取り僧の庵の窓を叩いた。そして叫んだ……「十字架におかゝりになつたところの基督の愛の爲に私の懺悔を聽いて下さい。」僧は窓を開いた。そして言うた……「私は悦んで懺悔を聽いてやります。」ジョヴィアンは彼れの過去の生活委しく彼れに告げた。特に彼れが彼れの造物主に反對して餘りに驕慢な振舞ひをしたことを包まず話した。

懺悔が終り赦免の式が終つて仕舞ふと僧侶は改めて窓から顔を出した。今度は明かに皇帝の顔を思ひ起した。

僧は言うた。

「最高の御神に祝福あれよ、今にして私は貴殿のお顔を認めました。こゝに二三枚の衣類があるからこれを着て宮殿へ赴かれよ。彼等も亦貴殿のお顔を認めること、思ひます」

僧の教へに従つて皇帝は宮城へ赴いた。門番は門を開けて彼れに會釋した。

皇帝は門番に問うた。

「私を知つてゐるか」

門番は答へた。

「善く存じてをります。それにしても不思議なことは私が陛下の御出門を目撃しなかつたことあります」

皇帝は宮殿に入るや否や凡ての者から非常に鄭重に迎へられた。その時、例の贗物の皇帝は皇后と共に別室にゐた。一人の武士はこの贗物の王の前に跪いて言うた……「陛下、只今不思議な人物が別室に入りました。人々は皆その者の前に跪いてをります。その男は陛下に餘りに似てをりますの



で、何れが實際の陛下であるか分らぬほどであります」

質物の皇帝はこれを聴くや直に皇后に言つた：「お前が一つ見てくるがよい」

皇后は別室へ行てその男を見て來た。そして非常に驚いて戻つて來た。彼女は言つた：「陛下、私には何れが眞實の皇帝であるか分らぬほどであります」

彼れは應酬した：「では私が見て來て、それを決定してやりませう」

彼れは皇后の手を取つてその部屋にゆき、彼れの側の玉座に彼女を坐せしめた。そして皆の者に言ふには「諸君が私に誓つたところのその言葉にかけて、私達二人の中の何れが諸君の皇帝であるかを明言して貰ひ度い」

皇后は答へた。

「私が最初にお答へするのは私の當然の義務ではありますが、しかし、天も御照覽ある如く、何れが皇帝であるか私には決定が出来ぬのであります」

其所に居た凡ての人々は皆同様のことを答へた。そこで質物の皇帝は次の如きことを言ひ出した。

「さあ皆の者、よつく聴くがよい、あの仁は皆の者の君主である。あの仁は餘りに有頂天になつて終に神様を嘲つた。その爲に神様は彼れを罰し、彼れを皆の者からお隠しになつたのである。しかし、彼れは後悔したので神様の御怒りが和らいだ。彼れは今非常に満足してゐる。随つて皆の者が彼れに心の底から服従するやうになつた。皆の者、神様の御加護を受けるやうにとめられよ」

さう言つて彼れは姿を隠して仕舞つた。皇帝は神に感謝の意を捧げた。そして彼れの魂の全部を神に捧けて幸福な一生を送つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、驕慢と虚榮に全く心を墮する者は皆この皇帝の徒である。ジョヴィニアンが最初願ひを申出した武士は、理性そのものである。理性は常に人生の虚飾と暗愚を拒絶するものである。又大名とは良心のことである。残忍な犬とは肉慾のことである。これが鷹即ち神の恵みを驚かしてゐる。皇后は人類の魂である。皇帝が最後に體につけた衣は道德である。この道德の衣は眞實の王者即ち善良なる基督教徒に似合ふものである。



## 六〇、慾心と機智

或る國王に容貌の美しいたゞ獨りの姫があつた。彼女はローザモンドといふ名であつた。十歳に達したか達しない間に、彼女は駢足競争が非常に上手であつて、如何に速く走る競争者でも到底彼女の敵ではなかつた。彼女は是等の競争者が半分里程も走らぬ先に必ず決勝點に入つて仕舞ふのであつた。王様は誰れでも駢競べて彼女を破る者があれば、その男を彼女の夫として迎へ、且つ王位をも與へる。しかし、若しこの競争に於て彼女に破られるならば首を刎ねらるべしと天下に宣した。この最後の條件は實に賢明な思ひつきであつた。何故と言へば姫は美しい上に、報酬が餘りに大きいから、澤山の競争者が、我も我もといつた風に殆んど勘定も出来ぬほど多く集つて來るからである。このやうに彼等の前に重い罰が置かれてあつてすら、多くの人々は成功を夢みて、その危険を敢てし、終に殺された者が多いのである。

この國にアバイバスと呼ばれる貧しい男がゐた。彼は或日のことこのやうなことを獨語した……「私は非常に貧しい上に、賤しい血統の生れた。だから若し私が國王のお姫様と競争して勝つて、その夫となることが出来れば、獨り私の幸福であるばかりでなく、私の血族の者の榮達ともなる譯だ。」

彼れはこの野心を抑へることが出来なくなつたので、終に思ひ切つて競争を申出ること決心した。しかし、彼れは他の競争者よりは賢かつた。即ち彼れは次の三つの贈物を準備したのであつた。先づ彼れは薔薇の珍しい花環を造つた。彼れはこの品は必ず王女の好む物に相違ないと信じてゐた。次に彼れは最も美しい絹の帯を買込んだ。これは彼れが世間の大多數の婦人は、この種の美しい衣類に對して大きな興味を持つてゐることを信じてゐたからである。そして最後に彼れは絹の袋を買つて、その中に次の銘を刻んだ一つの黄金の球を入れた。即ちその銘は「私と競技する者は決して競技に飽きることなし」といふ句であつた。彼れは是等の三品を懷中して宮城の門を叩いた。門番は彼れに何の目的で來たかと問うた。彼れは形式の如くその希望してゐる事柄を陳べた。

王女はこの時偶然にもその近くの窓側に立つてゐたので、アバイバスの競争に來た意味が善く聽き取れたのである。彼女は彼れの衣服が餘りに粗末なものと、又彼れが非常に貧乏してゐることが分つたので、心の底から彼れを嘲笑してゐた。しかし、ともかく、彼れと駢競べをやることにした。萬事準備の出來たのを見て二人は競争を始めた。アバイバスは直に非常な距離に置き去りになつて仕舞つた。しかし、彼れは薔薇の花環を取出して、巧みにこれを姫の頭上に掛けた。若き姫は花の香と美とに酔はされて仕舞つて暫時足をとめてこの花環を眺めてゐた。アバイバスはこの間隙に乗じて猛烈



に決勝點を目掛けて駈けた。姫はこの時愕然として我れに還つた。そして彼女は叫んだ：「國王のお姫様とも呼ばれてゐる者が、このやうな身元の貧しい百姓の妻にされては面目が無い譯だ」……さう叫びながら彼女は花環を深い井戸の水に投げて仕舞つた。そして旋風の如く猛進した。數分にして彼女は青年に追へついで仕舞つた。彼女は手を擴げて彼れの肩を叩きながら叫んだ「馬鹿者、止まれ、それでもなほ王様のお姫様と結婚する心なのか……」。彼女が再び彼れを追へ越さうとした時彼れは絹の帶を取出してこれを彼女の足許に投じた。この誘惑物も亦彼女の決心を鈍らせることに力があつた。彼女は身をかゝめてこれを拾つた。彼女はこの品物の餘りに美しいのに我を忘れて仕舞つた。そしてこれを彼女の胸に巻いてみた。アバイバスはこの隙に乗じて駈け出した。彼れは今迄失つた以上のものを恢復した。姫は彼女の馬鹿らしい行ひの結果、このやうに負け氣味になつて來たのを見て大に殘念がつかつた。彼女は帶を引裂いて狂人の如く駈け出した。彼女は再び彼女の敵手に追へついで。彼女は腕をさしのべて彼れを捉へて、同時にした、か彼れを打つて言つた：「馬鹿者、私と結婚など出来るものか」。彼女は今迄よりはもつと速く駈けた。しかし、アバイバスは前へ躍り出で、彼女の足許に黄金の球の入つてゐる袋を投出した。彼女はこれを拾上げることを拒むことが出来なかつたのである。同時に亦これを開らいてその内容物を檢べざるを得なかつた。彼女はそのやうなことを

やつた。しかし、彼女は「私と競技する者は決して競技に飽きることなし」といふ文句を讀んで大に感に打たれてゐた。そしてそれが可成り永い間か、つて讀まれてゐたので、アバイバスはこの隙に決勝點に先着した。彼れは彼女を妻とした。

〔解説〕

可憐なる者よ、この國王は基督その人である。王女は魂である。アバイバスは天國の決勝點へ我等の入ることを妨げる爲に、いろいろの誘惑を試みるところの悪魔そのものである。

〔考證〕

この物語は有名なギリシア神話の一たるアタランタ姫の傳説と同一様である。しかし、もつとその原始的の物に溯つて考へれば、恐らくこれは『イソップ物語』の中に現はれてゐる競争物語と同一型に入るべきものであらうか。即ち『兎と龜の競争』等はそれである。按ふに是等は概ね東洋傳來の物を換骨脱體したものであるまいか。



## 六一、反省

皇帝クロードゥアスに獨り子の絶世の美姫があつた。彼れが床の中でこの姫の將來のことについて眞面目に考へた。「若し私が彼女を富人で然かも愚昧な者に結婚させたならば、彼女に死を與へることになるであらう。しかし、若し貧乏人であつても賢人にさへ結婚させるならば、將來、その夫たる人物は必ず富人となるであらう」

當時この都市にソクラテイスと呼べる哲人が住んでゐて、皇帝から非常に尊敬されてゐた。皇帝はこの人物を召して次の如く言葉をかけた。

「善良なる我が友よ、私は私のたゞ獨りの娘をお前に嫁らせようと考へてゐる」

ソクラテイスはこの言葉を聴くや非帝に悦んで、あらん限りの感謝の意を表した。

皇帝はソクラテイスに言つた。

「だがこゝに一つの條件がある。それは結婚後萬一彼女がお前に先つて死ぬやうなことがあつたらお前は彼女と一緒に死ぬことを承諾してくれなくてはならぬ」

哲人はこの條件を快諾した。結婚の式は盛大に擧げられた。そして新夫婦は幸福な日を送つてゐた。

然るに彼女は終に病床についた。彼女の死は刻々に迫つて來た。ソクラテイスはこれを甚しく悲しんだ。そして彼れは近くの森に入つて思ひのまゝに泣いた。彼れがこのやうなことをしてゐる間に、偶然にもアレキサンダー大王がこの森へ遊獵に來た。大王の護衛兵の一人は哲人を見つけ出した。そして馬上で駈けて來て彼れに「お前は何者だ」と問うた。ソクラテイスは「私は私の主人の僕であります。私の主人の僕たる人は貴殿の君主である」と答へた。兵士はこれを聴いて驚いて問うた：「何といふ？ 私が奉仕してゐるお仁よりもつと豪いお仁がこの世界にある筈はないと思ふが。しかし、お前はさう言はぬから、私はお前を私の御主人の前へつれてゆかう。そして其所で皆でお前の主人とは如何なる人物であるか聴いてみよう」

彼れはアレキサンダー大王の前に導かれた。王は問うた：「友よ、お前の言つてゐるその人物は誰れのことであるか：その者の僕が私の主人であるといふことだが」。哲人は答へた：「私の主人といふのは理性のことである。又その僕とは意志のことである。貴殿は貴殿の意志の命令するところに従つて、貴殿の國をお治めになりませんか。貴殿の御意志が國を治める力であるが故に、それは即



ち貴殿の御主人であります。しかし、意志は私の主人の僕であります。さういふ譯でありますから、私の申したことは眞實であります。貴殿はこれを否定することが出来ません」

アレキサンダーはこの人物の知識を信じてゐたので、明白にその言葉に賛意を表した。そしてその後永久に理性に依りて彼れの一身と彼れの國を治めたのである。

しかし、ソクラテイスはこの後再び森に入つて、彼れの妻の豫期されてゐる死を甚しく悲しんだ。彼れが悲しみに沈んでゐた時、森のこの部分に住んでゐたところの一人の老人が彼れに言葉をかけた：「貴殿は何故そのやうに泣いてばかりをりますか」。ソクラテイスは答へた：「私は皇帝の娘と結婚したが、その時の約束では、若し他日彼女が死ぬやうなことがあつたら、私が彼女と一緒に死ぬといふことになつてゐる。彼女は今死にかけてゐる。随つて私の命も近いうちにつきて仕舞ふ譯だ：」。老人は言つた：「そのやうなことで貴殿は悲しんでゐるのですか。それならば私の申すことをお聞きになれば何んでもなく悲しみの原因が無くなります。貴殿の御夫人は王室の血統であります。だから彼女の父の血で彼女の胸を塗つて汚くすることが第一の療法です。それから貴殿はこの森の奥へ入つて三種の藥草を見出すのです。そしてその第一種の藥草から飲料藥を製造して、これを彼女に服用させるのです。次に他の二種類の藥草はこれを膏藥に煉つて患部に塗るのです。若し私の今申し

たことがそのまゝに行はれるならば、彼女は明かに健康を恢復します」

ソクラテイスはその命の如く行つた。彼れの妻は直に健康を恢復した。ソクラテイスが妻の病氣治療の爲に如何に苦勞したといふことが皇帝の耳に入るや、皇帝は彼れに多くの寶を與へ、又大きな名譽を授けた。

### 〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝とは基督のことである。王女は魂である：一旦それが罪の爲に破滅されるならば、これを貰ひ受けた夫も亦、永劫の生命を失ふといふのが、この兩者の結びついた時の契約であつた。僧侶は教會のことである。其所に健康と安全が見出される。又老人は賢明なる懺悔聽取り僧のことである。最後にアレキサンダー大王はこの世界その物のことである。

### 〔考證〕

アレキサンダー大王もソクラテイスも皆同一時代の人物として取扱はれてゐる所に、説教材料の時代錯誤の面白い點が窺はれる。俗耳に入り易き世界的偉人の名を各方面から藉りて來て、巧みに結びつけてゆくのが、



宗教文學、特に説教本位の物語文學の特色である。

帝王の心得べきこと、藥草の效驗等を説いてゐるあたりは、ギリシア又はローマ文學の影響といはんよりは寧ろ印度式である。蓋し東洋傳來の材料ではなからうか。

## 六二、誠實の美

セーラスが皇帝の頃、國內にフロレンティナと呼べる絶世の美人があつた。三人の王者はこの美人を妃として迎へようとして競争したが、その一人は終に彼女を凌辱した。これが原因となつて彼等の間に戦争が起り、兩軍の間に多くの戦死者を生じた。貴族等はこのやうにして餘りに多くの人の血を流すことを遺憾として、終にこの戦争に對して干涉した。そして皇帝に忠告して言ふには、若し今後なほこの兩軍の間の敵意を根絶することを考へぬならば、國內の者は悉く死絶して仕舞ふと陳べた。皇帝はその忠言を慎重に考慮した後、玉璽の捺してある書狀を使者に持たせて、その戦争の起つた原因物たる美人の許へと贈つた。それはこの書面を讀んだならば一刻の猶豫無しに宮城へ出頭せよといふ意味のものであつた。使者はこの書狀を携へて出發した。然るに彼れがなほこれを渡さない先きに

彼女は死んで仕舞つた。使者は空しく還つた。皇帝はそのやうに美しい婦人を終に見ることが出来なくなつたのを甚しく遺憾とし、國內第一の美術家と呼ばれる者を悉く王城に呼び出した。彼等がいよいよ彼れの前に集つた時、彼れは次の如きことを言つた。

「私がお前達を呼び集めた理由はかうである……實は國內にフロレンティナと呼べる絶世の美人がある。そしてこの美人のことから多くの人の命が失はれたのである。然るに私がこの美人を見ることの機會を持たぬうちに彼女は死んで仕舞つた。それでお前達から彼女の美しい姿を活けるが如く描いて貰ひ度いのである。私はお前達の描いた畫を見た後、何故彼女がこれほど多くの人々の血を流す原因となつたのであるかを理解してみたい」

美術家達は答へた。

「陛下は頗る實行難の事柄を御下命になります。彼女は餘りに美しかつたので、世界中のどんな美術家でも、彼女の満足を買ふことが出来るやうに、彼女の眞實の美を描き出すことが出来なかつたのであります……しかし、たゞ一人だけ例外者がありました。しかし、その男は目下山の中に隠れてをります。この美術家であるならば、陛下の思召しにかなふやうな畫を描くことが必ず出来得る



と思ひます。

皇帝はこの話を聞いて直に使者を山間に放つて、この美術家の隠家を探した。彼れは程なく發見されて、この物數寄な皇帝の前に持來たされた。皇帝は彼れにフロレンティナの生きてゐた當時そのまゝの姿を描けと命じた。そして若し彼れがその命の如く描き終るならば、報酬は彼れの望みのまゝであると言ひ添へた。

美術家は言つた。

「御下命の事柄は非常に困難のことです。しかし、若し陛下が國內の悉くの美人を、少くとも一時間だけ、私の面前にお集め下さるならば、陛下の御希望の如く描いてみませう」

皇帝はこれを承認した。彼れの領内の美人といふ美人は悉く集められた。そしてこの畫家の面前に立つた。畫家は是等の中から四人だけ選んだ後、その他の者を皆その家に還へらせた。彼れはいよいよ繪筆をとつて力作に従事した。彼れは先づ紅の上衣を描いた。それからこの四人の美人に於て特に美しいと感じた點を悉く彼れの繪に取り入れて描いた。そのやうにして美しい繪が出来上つた。皇帝

はこれを見て感心して言つた：「お、フロレンティナよ、お前が若し永久に生きてゐたならば、このやうに美しくお前を描いてくれたこの畫家に對して、熱い愛情を寄せるに相違なからうが」

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は神様のことである。美人フロレンティナは魂である。三人の王者は悪魔、俗世界、肉慾である。貴族は神と人との仲裁者なる族長と豫言者である。集つて來た畫家達は天使と人間とである。是等の人達の問には一人として魂を死から救ひ出す者は無かつたのである。山に隠れてゐた美術家は基督のことである。紅色は鮮血である。四人の婦人は實在、成長、感情、理智等である。

六三、現世の快樂

皇帝ヴェスパシアンにアグライースと呼ぶ絶世の美姬があつた。或日、姫が皇帝と相對して立つてゐる。



た時、皇帝は姫の顔をつくづく眺めてゐたが、終にかういふことを姫に言ひ出した。

「姫よ、お前は現在呼ばれてゐる名前以上に美しい容貌を持つてゐる。今日から私はお前の名前を改めて慰安姫と呼ぼうと思ふ。それは悲しみに在る者がお前の顔を見ると、何となしに愉快になつて来て、今迄の悲しみを悉く忘れて仕舞ふからである」

皇帝は宮殿の近くに氣持のいい、一つの庭園を持つてゐた。そして折々其所へ散歩することにしてゐた。偶々かういふ布告があつた……「誰でもこの王女と結婚したかつたならば、宮殿へ来て三日乃至四日間、この庭園にとゞまつてをらなくてはならぬ、彼等が其所を首尾よく立退いた時に結婚式が行はれる」……かういふ易い條件で王女と結婚が出来るのだから、多くの人々は我も我もといふ有様で競うてこの庭園に入つた。しかし一旦庭園に足を踏み入れた者は、再びその姿を見せることは無かつた。即ち誰れ一人として庭園から還つた者は無かつたのである。

或る遠い國に住んでゐた一人の武士が、大王の姫をこれほどの易々たる條件で掌中に入れることが出来るのを傳へ聞いて、早速宮殿の門を叩いた。そして直に迎へ入れられた。彼れは皇帝の前に誘はれて次の如く陳べた……

「陛下、世間の人々の傳へてゐるところに依りますると、誰れにてもあれ、陛下の御庭に入る者が

あれば、王女を賜はるとのことです。私はそれに應じようと思つて參上致しました」

皇帝は言つた。

「入つてよろしい。何れお前が庭園から還つたなら姫を遣るから」

しかし、この時武士は附け加へて言つた。

「しかし、たゞ一つだけ陛下に御願ひ申上度いことがあります。私がお庭に入る前に、お姫様と一寸の間だけお話し申し度いと存じます……」

「皇帝は答へた。

「それは差支ない」

王女は呼び出された。武士は王女に次のやうなことを話しかけた。

「美しきお姫様よ、貴女は慰安姫といふお名前の由であります、承りまするところに依れば、貴



女にお會ひ申す者は、最初悲しい顔をしてゐても、遇へる時には満足した幸福けな顔になると申すことでもあります。私は只今淋しい心を抱いて貴女の前に立つてゐる者であります。それでもありますから、貴女にお別れして是所を立去る時に、何卒私を幸福な者として下さい。お庭に入つた者は多いさうですが、無事に其所から戻つた者は一名も無いといふ話です。若し私の身にもそのやうな事が起りますならば、私が貴女と結婚しようと思つたことは水の泡となります譯で……」

姫は言つた。

「眞實のことを聞かして上げませう。それを聽いて貴郎の不幸を幸福に變へるがよい。實を申せばあの庭に大きな獅子が飼つてあつて、それが私と結婚する希望から入つて來る人を皆引裂いて食べるのですよ。ですから、貴郎は貴郎の全身を護謨のやうな亞麻で掩ふがよろしいと思ひます。甲冑も何もかも皆そのやうにするのですよ。貴郎が庭にお入りになると獅子は直に貴郎に飛びかゝつて來ます。さうしたら貴郎は猛烈に獅子と格闘するのですよ。若しその結果、貴郎が御疲勞になつたならば、獅子の爲すがまゝにして置くのです。さうすれば獅子は直に貴郎の腕や脛を齧まうとします。しかし、護謨のやうな亞麻は獅子の齒にくつついて、どうにもならぬのです。その時機を見

計つて貴郎は劍を抜いて獅子の首を胴體から斬り離して仕舞ふのですよ。でも、只今私がお話し申上げた兇猛な獅子以外に、なほ一つ恐しいことがありますから、貴郎はそれにも打克たなくてはならぬのです。それはこの庭園に入口がたつた一つしか無い事實であります。迷宮のやうにぐるぐる廻つた路が無數にあつて、出入口はたつた一つしかありませんから、案内人か或は他の手引きでもなければ、到底こゝから再び出ることは出来ません。しかし、私はこれも亦獅子の場合と同様に貴郎をお助けする方法を知つてをります。先づこの絲を卷いた球をお取りなさい。貴郎は庭に入る時に門の所にその絲口を結んでをくのですよ。そして絲巻きをだんだん解きながら庭の奥へ奥へと進んでゆくのですよ。しかし、命が大事であつたら決してこの絲を失はぬやうにして下さい」

武士は命ぜられた事を悉く嚴重に守つた。彼れは武具で全身を固めた後、庭園に入つた。獅子は大きな口を開けて彼れに飛びかゝつて一口に食べようとした。武士は斷々乎としてこれに抵抗した。しかし彼れの方が到底獅子に抵抗することが出来なかつたから、數歩飛び退いた。獅子はこの時、恰も姫が言つた如く、武士の腕に噛みついた。しかし、獅子の齒が亞麻にからんで、如何なる傷をも武士に與へることが出来なかつた。武士は折こそ善けれと劍を抜いて直に獅子を斬り倒した。しかし、不



幸にして彼れはこの時絲を失つて仕舞つた。そこで彼れは非常に困難をして、三日間といふものは、狂人の如くに庭園を歩きまはつて、失つた絲を搜索した。夜に近づいてから彼れはやつとのことでの絲を見出した。彼れは非常に悦んで急いで門口へ還つた。それから絲を解いて皇帝の前に現はれた。後丁度い、時分を見計つて慰安姫は彼れの妻として迎へられた。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は基督のことである。姫は天國そのものである。庭園はこの世界のことである。獅子は悪魔のことである。絲球いとたまは洗禮を表はしたものである。我等はこの洗禮によりてこの世界に入るのである。

〔考證〕

これはギリシアの英雄神話に現はれてゐる話と同一のものである。即ち絲卷の絲口を便りに九死の中から一生を得るといふ話は、英雄神話に屢々出てくる話であつて、比較神話學の上から頗る興味の多い問題である。日本の昔話にもこれに類似したものが多し。蓋しその遠い源は印度神話に發してゐるものではなからうか。

## 六四、基督の權化

或る國王は三つの特質があるので有名であつた。第一は彼れが如何なる人間よりも勇敢であつたこと。第二は何人よりも賢明であつたこと。第三は何人よりも美であつたこと。即ちこの三つであつた。彼れは永い間獨身生活をつゞけてゐた。しかし、彼れの元老官は切りに彼れに結婚を勧めてゐた。

王は是等の元老官に言つた。

「お前達も十分承知してゐる如く、私は富んでゐて且つ權力も十分あるから富みの必要は無い。だからお前達は私の爲に都市といはず、田舎といはず、各地を巡歴して、私の爲に美しくて且つ賢い乙女を捜し出して来てくれ。若しお前達がさういつた乙女を見出してくれるならば、その女がどんなに貧しい生れの者でも、私は必ずこれを迎へて皇后にしてやる」

王の命は直に服従された。彼等はかゝる乙女を搜索する爲に一生懸命になつた。そしてその苦勞の結果王統の出であるところの一美人を見出した。この乙女は注文通りの資格を具へてゐる理想の人物であつた。しかし國王はこれだけでは容易に満足することが出来なかつたと見え、自身でこの乙女の



性質を試めすことにした。彼れは使者の手を経て彼女に三吋四方の布の一片を與へて、これだけの材料で彼れの體にきちんと合ふやうな襦衣を造つてみよと命じた。そして更につけ加へて言ふには「若しそれがうまく出来るならば、私の妻としてやるぞ」と傳へしめたのである。

使者は國王からの依頼品を携へて早速その乙女の許へ出掛けた。そしてうやうやしけにその布を彼女に渡した。

乙女はこれを受取つた後次のやうに言つた。

「僅に三吋四方の布片でどうして襦衣が造れませうぞ。これはお引受けが出来ません。しかし、私に一箇の容器ヴエツセルを與へて下されば、私はその中へ入つて仕事を致します。そして御體にうまく合ふやうに御襦衣を造つて御覽に入れます」

使者は乙女の返答を齎して宮城へ戻つた。帝王は直に一箇の素しい容器を彼女に贈つた。乙女はこれに依りて要求通りの大きさに布を廣げた。そして襦衣を造り上げた。これを見て賢明な國王は彼女を皇后として迎へた。

### 〔解説〕

可憐なる者よ、國王は神様のことである。乙女とは基督の御生母のことであつて、精選されたる容器セルそれ自身である。使者は天使ガブリエルである。又布は神の御恵みその物であつて、これは適當に意を用ひ且つ苦勞さへ厭はぬならば、人間濟度に十分なるものとなり得るものである。

## 六五、魂の治療

或る國王は一つの國から他の國へと旅行を企てたことがあつた。永い間旅行した後一つの十字架（往來に立つてゐる高い標柱用の十字石柱なり）の下に來た。それには澤山の文字が刻んであつた。先づ一面にはかう書いてあつた……「王者よ、若し爾がこの道を騎馬で進むならば、爾自身は非常に面白い樂しみを與へられることあるべし。しかし、爾の馬は食物に窮することあらん」。次に他面を見るとかう書いてあつた……「爾はこの方向を進むならば、爾の馬は大に優遇されることあるべし。但し爾自身は何物をも與へられざるべし」。第三面にはかうあつた……「爾若しこの路を進まば、爾自



身も、亦爾の馬も共に優遇されることあるべし。但し爾は其所を去らざるうちに必ずや非常な不幸に出會ふべし。最後に第四面にかう書いてあつた：「爾若しこの方向を進むならば、人々は爾に忠實に奉仕することあるべし。但し人々は爾の馬を引留め、爾は止むなく徒歩にて爾の餘れる旅程をつゞけざるを得ざるべし」。

王は是等の文字を讀んだ後、何れの不幸を選ぶべきかを慎重に考へた。そしてその結果、終に第一を選びとることに決定した。彼れは如何にも學者らしい態度で言つた：「私の馬が假令餓死することがあつても、私だけがこの道を進めば幸福な事にありつくのだから、それでい、譯だ。特にさういふことになれば一夜は直に過て仕舞ふのだから：」。さう言つて彼れは馬の腹を蹴立て、一目散に第一の方向をとつて駆け出した。彼れは或る一人の武士の居城に到着して、非常に優遇された。しかしその城主は彼れの馬に對しては殆んど何物をも與へてくれなかつた。翌朝彼れは彼れ自身の居城に還つた。彼れは目撃した事柄の凡てを物語つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、己が魂の安全を求めて旅行する善良の基督教信者は皆、この國王と同一の人物であ

る。國王の乗つてゐた馬は、四つの要素から造られてゐるところの肉體そのものである。十字石柱は良心であつて、我等の進むべき道を指差し、且つそれに伴ふところの結果を説明してゐる。

六六、貞節

昔、或所に一人の王様があつて、その王様に可愛い美しいお姫様があつた。王様の死後そのお姫様が王位に即かれた。しかし、年も若く且つ保護する者も無つた爲に、或る一人の大名が野心を抱いて彼女に接近し、終にいろいろの大きな約束事で王女の心を誘惑して、全く姫の體を汚して仕舞つた。彼れの不正の目的が達せられた時、姫は初めてそのことを覺つて今更のやうに甚く泣き悲しんだのである。これを見てこの暴君は終に姫を王位から引き下して追放して仕舞つた。王女はその華かな境涯から生活の最も慘憺たる窮地に陥れられて仕舞つたので、今は毎日の生活にも苦しむといふ有様で、止むなく往來の人々に施物を乞ふやうになつた。或日のこと、彼女は泣きながら路傍に坐してゐると、一人の武士がその側を通過した。そして彼女の非常に美しい姿を見て、直にこれに懸想した。彼れは



彼女に對つて「美しき婦人よ、貴女は何んですか」と問うた。姫は泣きながら答へた、「私は國王の獨り子でありましたが、父の死後、悪人に欺かれて散々の目に會はされた上、家も財産も皆奪はれて仕舞つた者であります。」武士は言つた、「左様ですか、時に貴女は私と結婚してくれますか」。彼女は答へた、「それは何よりも私の望ましきことであります。」武士は言つた、「ではそれを誓つて下さい。私以外の如何なる男をも貴郎の夫として迎へぬといふことを堅く誓言して下さい。若しそれを誓つて下さるならば、私は貴女を欺いた暴君と戰つて、貴女の爲に再び貴女の財産を取戻して御覽にいたします。しかし若し私が不幸にしてその戦ひで討死するやうなことがありましたら、何卒私の血に染まつた武器を、愛情の記しとして永く保存して下さい。そして後日誰れでも貴女の愛情を求める者がありましたならば、私が貴女の爲にかく迄愛情を捧げてゐたことを思ひ起して下さい。」彼女は答へた……「貴郎の御望みに對して堅く誓ひを立てます。しかし、それにしても、貴郎の愛情の如く貴郎の御生命の大丈夫であらんことを祈ります。」

武士はこの誓約を得て大に悦んだ。彼れは武具で身を固めて暴君と開戦する爲に出發した。暴君はこれより先き既にこのことを傳へ聞いてゐたので、攻撃の準備をなしてゐた。しかし、武士は彼れを征服してその首を刎ねた。だが、彼れも亦致命傷を受けて、それから三日目に死んで仕舞つた。

姫は彼れの死を悲しんだ。そして彼れの血に染まつた武具を己が廣間に懸けた。彼女は屢々それを見に行つて、熱い涙でそれを潤うした。多くの貴族は彼女に結婚を求め、又大なる約束をすら持出してその歡心を得ようと力めた。しかし、彼女は是等の貴族に對して返答を與へる前に必ずこの血に染つた武具部屋に入つた。そしてこれをじつと凝視した後、涙を雨の如く落して叫ぶのである……「嗚呼貴郎ほど貴いお仁は何處にありませうぞ、……私のやうなつまらぬ者の爲に一命を棄て、私の領地を取戻して下さつた御恩は……嗚呼私はそれを思へばどうして私の誓ひを破ることが出来ませうぞ」その後彼女は彼女に結婚を求めてゐる人々の所へ戻つて來て、私は如何なる事があつても二度と結婚はしない、私は一生涯獨身で暮らすと答へた。そしてその言葉の如く彼女は終始一貫したのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、この王者は我等の天の父である。又その姫は惡魔の誘惑にか、つた人間の魂である。路傍とはこの世界のことである。姫の側を馬上で通過した武士は神の子基督のことである。鮮血に彩つた武具は基督の死とその心とである。



## 六七、辯解の餘地なき事

皇帝マキシミアンは國を治めることの明があるといふので評判の君主であつた。彼れの治下に二人の武士が住んでゐて、一人は賢く、他は愚昧であつた。しかしこの兩人はお互に尊敬しあつてゐた。賢い方が言つた：「我等兩人がお互に爲めになるやうに行ふといふことを約束しようではないか」。愚昧の方がこれに賛意を表した。そして彼れは彼れの友人の言葉通りに彼れの右手に傷をつけて血を流した。賢い方が言つた：「私は君の血を啜るから、君も亦私の血を啜つてくれ、そして私等兩人は將來如何なる幸福の時にも不幸の時にもお互に交りを絶つことがないやうに、又二人の中の一方が金を儲けることがあつたら、直ちにこれを分配してやることをこゝで誓はうではないか」。愚昧の方が賛成した。そして兩人はお互に血を啜つてこの誓約を固めた。彼等はこの後同じ家に住んだ。

當時國內に二つの都市があつた。一つは高い山の頂上にあつた。そしてこの山上の都市に住まはんとする者は先づ大きな財産を所有してゐること、又、一度この都市に居を構へたならば、一生涯他へ移つてはならぬといふことに國法上定められてゐた。この都市へ通じてゐる道は狭くて石が多かつた。そしてその中間には三人の武士が大軍を率ゐて駐屯してゐた。次に是所を通過するほどの者は必

ずこゝで一戦争を試みるか、或は又、その所有してゐる一切の物品と共に、彼れの一命迄も失ふことになるのが例であつた。皇帝はこの都市に一人の代官を置いた。この代官は是所へ入つて来る者はその何人たるを問はず悉く歓迎した。彼れはその人々の事情に應じてそれぞれ面倒を見てやつた。然るに他の都市は前記の山の下の谷の中にあつて、それに達する道は極めて平坦で且つ愉快であつた。途中に三人の軍人が住んでゐて、其所へ来る者を大に優待してくれた。人々の欲するまゝに便宜を與へてくれることになつてゐた。この都市にも一人の代官が置かれてあつた。しかし、彼れは是所に入つて来る者を悉く獄に投じ、且つ判官の來るのを待つて直に死刑の宣告を與へることにしてゐた。

賢い方の武士はその友に言つた。

「友よ、我等兩人も他の武士に學んで、世界を旅行して、何か幸運なことにありつかうではないか」

彼れの友は賛成した。彼等兩人は旅行を始めた。程なく彼等は二つの道路が交つてゐる地點に來た。賢い方の武士は言つた。

「さあ困つたぞ。こゝに道が二本あるぞ。一つは世男第一の美しい都に達してゐる道だ。其所へ到着すれば希望する事柄は何事でも達せられる。しかし、他の方の道は谷の中の都に通じてゐる。若



しその方の道を往くならば獄中に投げこまれて、その後磔刑に處せられるであらう。だから私は君に忠告するが、この方の道を避けて、他の方の道を選択するに限る」

愚昧の方の武士は答へた。

「友よ、私は是等の二つの都市のことについては久しい以前から聽いてゐた。しかし山上の都に達する道は非常に狭く且つ危険である。その理由は是所へ入る者を、是等の軍人が攻撃するばかりでなく、屢々その財寶を剥ぎ取り又殺害するからである。しかし、他の道は大きく廣く開らけてゐるばかりでなく、其所に番をしてゐる軍人は、其所へ來る者を歡待し、何んでも必要な物は悉く供給してくれる。これは實に明かなことであつて、私はこの目で見てゐる事實である。私は君の目よりも私自身の目を信じ度いほどだ」

賢い友は言つた。

一方の道は歩いてゆくに困難であるといふのは明かな事實である。しかし、他方の道はその往きついた所が前者よりももつと悪いことになる。即ちその方の道を進んでゆくと、我等は二人とも大き

な恥をか、せられた上に、磔刑に處せられるに相違ないのだ。しかし、君は戦争したり、盜人に遇つたりするのを恐れて、この狭い道を歩いてゆくのを厭ふのか。君は武人で無いか。武士はその義務として當然勇敢に戦ふべき者ではないか。しかし、何れにもせよ、君が私の欲してゐる道を辿つて私と一緒に往くならば、私は君に先んじてその戦争に手をつけようと思つてゐる。君がその時私に助太刀してくれ、ば、二人の力で如何なる敵をも倒すことが出来る譯だ」

愚人は答へた。

「私はどうあつても君と一緒にその道を行くことが出来ぬ。私は私自身の道を進まうと思ふ」

賢人は答へた。

「では私も止むなく君と一緒に往かう……私の考へとは一致してをらぬことではあるが……これといふのも私が君と交りを絶たぬといふ誓ひの血を啜つたからだ」

さういふ譯で兩人は同じ道を進んだ。



兩人は非常に愉快に進んだ。そして三人の軍人が駐屯してゐる所へ辿りついた。三人の軍人は彼等を鄭重に待遇してくれた。是所で愚昧な武士は賢い武士に次の如く誇つて言つた：「どうです君、私はこの道が非常に愉快だと言ふたでは無いか。その通りでせう。又他の道は愉快な事は一つも無いのだよ。」賢者はこれに對してかう答へた：「結果が善くなれば萬事は善い。しかし、私は到底そのやうなことを望むことが出来ぬと思つてゐる」

彼等は三人の軍人と暫く時を過した。この間に都市の代官は二人の武士が國王の禁令を無視して是所に入つて來たことを傳へ聞いて、直に軍勢を送つて兩人を捕縛させた。代官は先づ愚昧の武士の手足を縛めて井戸の中へ投げ込ませ、賢い武士を獄中に投じた。次に彼れは判官が到着するを待つて悉くの罪人を己が前に引出した。二人の武士も亦その中に混じてゐた。その時賢い武士は代官に對つて次のやうに言つた。

「閣下、私は私の友に對して不平を申さなくてはならぬのであります。何故と申せば、私が殺されるやうになつたのは彼れの爲からでありますから。私はこの都の禁令を彼れに委しく教へたのみならずこれを犯せば我等兩人の命が危険であると説き聞かしたのであります。彼れは私の言葉を聽くこともなく、況やそれに従つて是所へ來ることを思ひとゞまることも欲しなかつたのであります。

そして彼れは私は君の眼よりも私自身の眼を信用するとさへ申したのであります。しかし、残念なことには、私は幸不幸何れの場合にも、決して彼れと離れぬといふ固い誓約を交はした關係上、是所迄彼れの後について來た譯であります。然るに私は今、たゞそれだけの理由で殺されなくてはならぬでせうか。何卒公平な御裁斷を仰ぎます」

その時愚昧な武士は判官に言つた。

「彼れこそは私の原因であります。何人でも知つてゐる如く、彼れは賢人で、私は愚人であります。随つて賢人であるところの彼れが、かく迄輕卒に、その智慧を棄て、私の愚論に従はなくてはならぬ筈は何所にありませうか。若し彼れさへかういふ馬鹿なことをしてくれなかつたら、私は自分から約束した嚴しい誓ひの言葉もあつたほどですから、彼れの進む道について行つたのです。彼れは賢人で私は愚人でありますから、私の死の原因は結局は彼れであります」

判事はこれを聽き終つてから兩人に話しかけた：「但し賢い武士に最初話しかけたのである。

「君は賢人とも言はれる人物でありながら、愚人の言に盲従するとはどうした譯か。何んといふ馬



鹿々々しいことだらう」

それから彼れは愚昧な武士に對つて、かう言つた。

「君は愚人だと言ふのか、愚人であるなら何故賢人の言葉を信じなかつたか」

判事は兩人に次の判決を下した。

「汝等兩人は驚くべき馬鹿な行をやつた罪で當然死刑に處せらるべき者である。兩人共に十字架の上に懸けらるべし」

命令の如く兩人は磔刑に處せられた。

### 〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は基督のことである。二人の武士は肉體と魂である。愚人は肉體で、賢人は魂である。この兩者は洗禮に依りて合一體となつた。彼等は血を啜つた。血を呑むといふことは脈管の血が彼等の分離を妨げ、彼等の生命を保存するといふことである。二條の道路は後悔と俗界の名譽と

である。後悔の道は狭いが、俗界の名譽の道は廣くして且誘惑的である。山上の都市は天國であるが谷の中の都市は地獄である。三人の軍人は世界、肉慾、惡魔等である。

## 六八、最後まで眞實で

ゴルディアンの時代に或る一人の立派な武人が、美しい妻を迎へた。この婦人は絶世の美人ではあつたが、惜しいことには心の正しくない人物であつた。彼女は夫が旅行に出たその留守中に、彼女の情人を自宅に引き入れて、日夜淫逸に耽つてゐた。彼女の侍女の一人は鳥の歌を解することに長じてゐた。城内の庭に雄鶏が三羽飼つてあつた。夜間、夫人の情夫が彼女と一緒に居た時、第一の雄鶏は時をつくつた。夫人はこれを聞きつけた。そして「あの雄鶏は何を言つたのか」と侍女に問ふた。侍女は「貴女が不都合にも夫の體面を汚してゐられる」と言つたのですと答へた。夫人は「ではあの雄鶏を直ぐ殺せ」と命じた。命の如く雄鶏は殺されて仕舞つた。然るにその後直に第二の雄鶏は時をつくつた。夫人は前と同様のことを侍女に問うた。侍女を答へた……「私の友は眞實の事を言つて殺されて仕舞つた私も同じ譯で死ぬ覺悟をしてゐる」夫人は「殺せよ」と叫んだ。命の如く第二の雄鶏は殺さ



れた。それから第三の雄鶏は時をつくつた。彼女は三度問うた……「雄鶏は何を言うたか」。侍女は答へた……「殺されるのがいやならば何事をも聞くな、何事をも見るな、何事をも言ふな」、夫人は言うた……「さうか、さうか、ではあの雄鶏は殺すな」

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は神である。武人は基督である。武人の妻は魂である。彼女の情人は悪魔である。侍女は良心である。第一の雄鶏は我等の救済主である。何故ならばこの雄鶏は基督と同様に死刑に處せられたからである。第二の雄鶏は殉教者、第三の雄鶏はかの眞實な事柄を正直に語るべき筈の説教者が、脅迫を恐れてこれを敢てしないことを表はしたものである。

〔考證〕

禽鳥の言葉を藉りて人心の正邪曲直を諷譏し、或は人間と禽鳥とが問答するといふ仕組は、既に『アラビヤ夜話』及び佛陀傳説物語等にもある如く、東洋文學の一つの長所である。この物語は一見して『アラビヤ夜話』式のものであることが明かである。蓋し東洋傳來の物なるべし。

六九、貞節

皇帝ガラッスは世に比類なき名匠を雇つて莊嚴な宮殿を建立した。その當時一人の美しい娘を持つてゐる武士がゐた。彼れはこの名匠の世にも稀なる才幹を認めて、己が娘を彼れの妻として與へようと思つた。そこで彼れは或日この大工を呼び出してかう言つた……「私の善き友よ、若し君が何なりと欲する物があつたら私に言うてみられよ。私の力で出来ることであれば何事でも君の爲にやつてみるから……若し君が私の女を妻としてくれるならば……」。大工は答へた……「難有いです、何卒お娘さんをお嫁に貰ひ度いものですが」。結婚の式は芽出度く終つた。その後彼女の母親は大工に言つた……「私の息子よ、お前さんが私達の家族の一人になつて下さつたのだから、私は今お前さんに世にも不思議な襦衣を一枚お贈り致さうと思ひます。この襦衣は不思議な魔力を持つてゐて、お前さん達夫婦の者がお互に操を固く守つてゐる間は、どんな事があつても、裂けもせず、破れもせず、汚點もつきませんが、萬一、不幸にして、お前さん達夫婦の者のどちらか一人が不實な行ひをすると、直ぐさまその不思議な力が無くなつて仕舞ふのです。」大工はこれを聞かされて非帝に満足して、その襦衣を受取つた。そして幾度も幾度も母親にお禮の言葉を言つた。



この事があつてから間もないことである。大工さんは皇帝の御殿の建物を自ら監督するやうに命ぜられたので、かの貴い贈物であるところの襯衣を膚に着て宮殿へ出掛けた。彼れは建築の全く出来上る迄自宅に還へらなかつた。人々は彼れが朝から勞働してゐるにも拘らず、彼れの襯衣が常に清潔であるのを見て不思議に感じたのである。皇帝自身もこれを不思議とせられたのである。そこで皇帝は或日畏くもかういふ質問を大工に發したのである：「お前はどのやうに一生懸命に汗だらけになつて働いてゐて、特に毎日同じ襯衣を着てゐて、然かもその襯衣の色に少しも變りが見えないのは、如何なる理由か、何時お前の襯衣を見ても新しいものと少しも異りはないではないか」。大工は答へた：「陛下、この襯衣は私と私の妻がお互に操を固つて守つてゐる限りは、いつも昔ながらの純白さと美しさを失はぬ筈であります。しかし、私達夫婦の中の何れか一人が、結婚の時の誓ひを忘れるやうなことがありますれば、他の衣類と同様に汚れてくるのです」

これを洩れ聞いた一人の軍人は早速悪心を起して、彼女の貞操を試みようとなつた。そこで彼れは大工さんには少しも疑はれるやうなことをしないで、密かに彼れの留守宅に赴いて、その妻を誘惑しようとした。彼女は非常に満足したやうな様子を彼れに現はした。そしてその申込みを受入れるやうに見せつけた。しかし、彼女は俄かにかう言ひ出したのである：「でも、是所では他人の目につく

からいけませんよ、彼方へ私と一緒に來て下さい。秘密の部屋がありますから」。彼れは彼女の後にいつて行つた。彼女は一つの秘密の部屋に彼れを入れて戸を閉ぢた。そして言つた：「是所で暫くお待ちを願ひます。直ぐ戻りますから」。さう言つて彼女は毎日同じ事を繰返へしてゐた。そして常にバシと水だけを彼れに與へたに過ぎなかつた。彼女は彼れからどんなにせきたてられても、少しもそれに對して頓着することなく、この屈辱的な接待を受けるやうに彼れを餘儀なくさせたのである。この後久しからずして、又々二人の軍人は同じやうな腹黒い考へを抱いて宮殿からぬけ出で、來た。しかし、彼女は前者に對したと同一戦法で彼等を例の秘密部屋に誘致して、毎日バンと水だけを與へて置いた。

三人の軍人が俄にその姿を隠して仕舞つたので、宮殿では大騒が持ち上つた。彼等の行衛が嚴重に搜索された。大工さんは首尾よくその仕事が終わつたので豫てからの契約金を受取つて、嬉々としてその家に還つた。貞節な妻は悦んで彼れを迎へてくれた。そして彼女は夫の襯衣に何等の汚點も無いのを見て悦んで言つた：「嗚呼何といふ有難いことでせう。私達がお互に正しかつたことはこれで明かになりました。襯衣に汚點一つありませんから」。夫は言つた：「可愛き者よ、御殿建築中に三人の軍人が代りく私のところへやつて來て、この襯衣のことについて問うたことがあつた。私は事實



を有りのまゝに語つてやつた。さうすると不思議なことには、その時以來この三人の軍人が何所へ行つて仕舞つたのか未だにその行衛が分らぬ。夫人は笑つた。そして言うた……「貴郎が御心配になつてゐるその軍人達は、無禮にも私を不義な誘惑に引きかゝる者だと思つたものと見え、非常な腹黒い考へを起して是所へ参つたのであります。私は彼等を巧みに誘出して離れの部屋へ入れて毎日パンと水だけを食べさせて置きました。大工さんは彼れの貞節の堅いことが證據だてられたので非常に悦んだ。そして彼れは是等の軍人達の命を助けてやつた上に、自由に解放してやつた……但し彼等が善人に立還へるといふ條件づきで……」

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は神、宮殿は人間の心である。大工に己が娘を與へた武士は基督である。又大工は善良なる基督教信者、母親は教會である。襯衣は信仰、三人の軍人は驕慢、眼の慾、心の慾等である。

〔考證〕

この物語の材料はアラビア又はベルシアあたりの物語に屢々現はれたものと似てゐる。特に襯衣の魔力を材料とした點は『アラビア夜話』式である。トルコの古い物語 'Farage bada alchidda' 等の感化を受けた點もあるやうに見える。

七〇、正直者の悔恨

或る國王は一人の美にして賢であつた姫を持つてゐた。彼れは彼女を結婚させようと思つてゐたが彼女はその夫たるべき人物が三つの條件を満たすに非ざれば誰れとも結婚しないと誓つてゐた。その條件の中の第一は、四大要素の長さ、幅、深さが何呎あるか、精確に又簡潔に説明し得る者たること。第二は北風を變じ得ること。第三は如何なる方法に依つたならば懷中に火を入れて負傷せずになれるかといふこと。即ちこの三つのことを爲し得る者でなければ、彼女の夫たる資格が無いといふのであつた。王は姫の決意のあるところが分つたので、その旨を國內に傳へた。そしてこの條件を果し得る者があれば、その何人たるを問はず、彼女と結婚を許すことを約束した。多くの人々はこれに應じた。しかし、皆失敗した。最後に或る外國の武人がこのことを傳へ聞いて、たゞ一人の従者を引



連れ、一頭の悍馬に跨つて、この王城を訪づれた。彼れは國王の前に導かれて次の如く陳べた……「私は陛下のお姫様と結婚致し度いと思ふ者であります。御提出の問題を解く爲に本日推參致しました。」國王はその申出でを聽き入れた。

そこで武士は彼れの從者を呼び入れて地上に横はらしめた。彼れは先づ從者の身長を頭の頂から足の爪先迄測つた。そしていよく寸法をとつた後、彼れは國王に言つた……「陛下、第一の御質問は解けました。私は四大要素は辛うじて七呎あるものと認めます。國王は「それは又如何なる譯であるか。四大要素に對してどうしてそのやうに言ひ得るか」と問うた。武士は答へた……「陛下、動物も人間も皆四大要素から造られてをります。王は「成程、爾はこの事實を實に上手に證明した」と感じた。

國王は重ねて言つた……「では第二の條件……即ち風の方向を變ずること」。武士は直に宮庭の廣場に彼れの乗馬を曳いて來て、これに一服の藥を吞ませた。馬は全く溫和になつた。彼れは馬の鎖つたのをみすまして、馬首を東方に轉じた。そして國王に言つた……「陛下、御覽ぜよ、風が北から東にかはりました。」國王は應じた……「如何にして？ 風がどうしてこのやうに？」。武士は答へた……「陛下、凡べての動物の命はその呼吸、即ち空氣から成り立つてゐることは十分御存知のこと、思ひます。

私の馬が北方に向つて立つてゐた間は荒れ狂つてばかりをりましたが……そしてその鼻嵐も荒々しくありましたが、水藥を一飲與へて、東方にその首を向けてから俄に溫順になつて、その呼吸も靜かになり、異つた物となりました。こゝに於て所謂風が變つて來ました。國王は言つた……「爾はこの問題をも巧に解いた。次は第三の條件だ」

武士は答へた……「陛下、失禮ながらこのことは宮中の皆様の面前で行つてみたいのであります。さう言つて彼れは紅に燃えてゐる石炭を一つかみ取上げて、これを彼れの懐中に入れた。しかし、彼れの肉は少しも火傷しなかつたのである。國王は叫んだ……「爾は是等の條件を悉くうまく果した。しかし、それにしても爾は如何にして火傷をしないのであるか」。武士は答へた……「火傷しないのは私自身の力ではありません。それは私が常に懷中してゐる不思議な石の功力であります。この石を持つてゐる者は如何なる熱火にも抵抗することが出來ます」。國王は悉くの條件が萬事上首尾に満たされたので非常に満足した。そして、直に姫を彼れに與へた。武士は富と名譽を授けられて大に面目を施した。新夫婦は幸福に彼等の生涯を送つた。



可憐なる者よ、國王は基督、姫は人間の魂である。要素を測るといふことは肉慾を服従するといふことである。亂暴な馬とは後悔の念で性質の變つてくる罪深き人のことである。懐中の火とは奢侈、驕慢、貪慾等である。石とは心の底から熱心に基督を信仰するその堅い信仰心のことである。

## 七一、永久の報酬

或る國王は一大宴會を開くこととし、各地に使者を遣して多くの案内状を送つた。その案内状に依れば、來客はたゞに盛大な饗應を受けるばかりでなく、多くの財寶をすら與へられることになつてゐた。使者が都市村落到る所で王命を果した後、偶々或る都會に着いた。其所では二人の男に出會つたのである。その一人は體格が頑丈で、元氣な顔つきをしてゐたが盲目であつた。他の一人は弱々しい體でその上跛者であつたが、視力だけは人並みすぐれてゐた。

盲人は跛者に話しかけた、「友よ、私も君もつまらぬではないか。噂に依れば王様は大きな宴會を開きになるさうで、何んでも其席へ行くほどの者は誰れでも皆、御馳走を鱈腹たべて上に、お金や寶を澤山貰ふことが出来るといふことだ。さういふ、所であるのに君は跛者で、私が盲者ときてゐる





から、つまりぬではないか。何んとかして二人でその宴會の席へ參る方法はなからうか」

跛者は答へた、「私の考へをいれてくれ、ば、私達二人も御馳走とか金にありつくことが出来るよ」

盲人は悦んで言つた、「私は私の利益になることなら何んでも君の考へ通りになるよ」

跛者は言つた、「そんなら話してみよう、君は體格も丈夫だし、元氣もある。だから跛で且つ體の弱い私を背に負ふことが出来る。私の視力は君の代りに十分役立つことが出来る。さういふ譯だから私達兩人はお互に不足してゐる點を補つて、王様のお招きに應じ、大に御馳走を食べた上に、亦お土産をも貰つて來ようではないか」

脚の利く方の者は答へた、「君の言葉通りにやつてみよう、先づ私の背に乗り給へ」

彼れはその如くに爲した。跛者は道を案内し、盲者は跛者を運んだ。そして兩人は宴會の席場に到



着し、他の來客と同様の報酬を得た。

〔解説〕

可憐なる者よ、王は永久の生命の饗應を行つた基督である。盲人は未來の安全を見ることの出來ない現世の権力者である。跛者は俗界の人と共通な何物をも持つてはをらぬが、しかし來たるべき王國を達觀してゐるところの信仰の強い人である。

〔考證〕

この物語は古い東洋傳説を巧に取入れたものであることは明かである。盲者と跛者の教訓的童話は、中世時代以後、歐洲民間童話として相當に廣く行はれてゐたやうであるが、その材料の源は『アラビヤ夜話』、『パンチャ・タントラ』、『イソップ』等と同様に東洋に於て生れ出たものである。

七二、恩知らず者の破滅

或る國王は王子をたつた一人だけ持つてゐたので非常に可愛がつてゐた。然るにこの王子は成人す

ると毎日のやうに父王にその退位を迫り、一日も速く私に王權を譲つてくれと要求した。

國王は言つた：「可愛い息子よ、若しお前が私の晩年を面目を汚さぬやうに私に送ることを保証してくれるならば、そしてお前が私を親切に取扱ふことを固く誓つてくれるならば、私は私の王位をお前に與へることに決して反對はしない」

王子は答へた：「それは今更ら父王に誓ひをたてる迄もありませんが、しかし必要とあらば國內の凡ての貴族の前でこれを誓つても差支ありません。私は子としての義務を怠る者ではありません。私は私自身に對するよりも、寧ろ父上に對してより以上注意を拂ふつもりでをります」

老王はこの保證の言葉を信じて王位を彼れに譲つて仕舞つた。然るに王子は王冠を戴いて彼れの祖先傳來の玉座に即くや否や、その精神は全く豹變して仕舞つた。彼れは二三年間はその優しい父親を大切に取扱つたが、それ以後は全く父親のことを忘れて仕舞つた。老王はこの豫期せざる、又何等の理由もなき虐待を受けて非常に呆れた。そして國內の賢人達に對つて王子の破約した事實を愁訴した。賢い人達は日頃からこの老王を敬愛してゐたので、今これを聞いて王子の不徳を非難せざるを得な



つたのである。新王は大に憤つて是等の賢者を獄に投じ、且つ父王をすら或る一つの城に監禁して何人をも接近せしめなかつた。父王はその城に於て非常に饑餓を訴へた。加之彼れは凡ゆる虐待を受けたのである。

偶々國王自身がこの城で一夜を送ることになつた。父は彼れに次の如き書面を送つた。

「我が子よ、爾の老いたる父を憐れんでくれ、爾の父は一切の物を與へた恩人ではないか。今私は飢渴に苦しんでゐる。私は凡ての娛樂を奪はれて仕舞つた、……老年を慰める酒すら奪はれて仕舞つた……私は私の生命を縮めてゐる」

若き王は言つた……「この城に酒のあることは私が知らぬ」

しかし、それは偽であつた。何故といへば彼れはこの城に酒樽が五本あつて、それが全部國王の許可が無ければ、代官でも用ひることが出来ぬのだと告げられてゐたからである。それ故この不運な父は言つた……「私の可愛き子よ、何卒私のこの敗殘の身に是等の酒樽の第一號を與へてくれぬか」。若

き王はこれを拒んだ。そしてその理由として第一號は新しい酒であるから、老人に有害であるといふのであつた。老人は言つた……「では、第二號の酒樽を」。王は答へた……「それはなりません。それは私と私に侍つてゐる若き貴族の飲料であります」。父は又言つた……「では、第三號ならば差支がないであらう」。王は答へた……「それも駄目です。第三號の酒は餘りに強すぎますから、體の弱い老人が飲めば死んで仕舞ひます」。父は言つた……「では、第四號樽は」。王は答へた……「それは腐敗してゐる酒ですから、お體に障ります」。父は又言つた……「しかし、第五號樽はよからうと思ふが」。王は言つた……「第五號樽は滓ばかりです。これは貴族等が父上に飲ませて毒殺しようと思つて贈つた酒樽です」

憐れな父はこのやうな辯解を澤山聽かされたので甚く失望して其所を去つた。しかし私かに貴族連に書面を認めてその虐待の有様を具さに報告し、且つ一日も速にこの苦境から我れを救ひ出してくれるやうにと懇願した。貴族連はこれを讀んで老王に對して氣の毒に思ひ、且つ非常に憤つたのである。彼等は終に老王を救ひ出して再び王位に即けた。そして若き王はこれを捕へて獄に投じた。彼れは獄中で死んだ。



## 〔解説〕

可憐なる者よ、父王は基督で、その子は悪しき基督教徒である。

## 七三、衆人を盲目とする貪慾

ローマの或皇帝は法令を出して盲人は年々百圓づゝ、皇帝から貰ふ権利があると言った。偶々二十三名の仲間が一團となつて、都に遊び、或る料理店に入つて大いに飲んだ。彼等は七日間といふものは殆んど飲みつゞけ食べつゞけたのである。彼等は最後に計算する時になつて、その飲食代を支拂ふだけの金が無かつた。料理屋の主人は勘定書を彼等の前に突き出して「さあ皆様勘定が凡て百圓になつてをりますぞ。百圓の中一文でも不足してゐる間は一人なりとも是所から出ることを許しませんぞ」と言つた。放蕩家連中は大に驚いて仕舞つた。彼等は互に顔を見合せながら「さて如何致さうか、逆もそのやうな大金は工面が出来ぬ」とつぶやくのであつた。いろいろ相談の結果一人が言ひ出した：……「私の考へを一つ聞いて貰はふ、分別があるよ。この國の王様は盲人に百圓づゝ與へるといふ御

布令があつた。そこで我々は今こゝで抽籤をして、若し鬮に當つた者があつたらその人は盲目となつて、王様の所へ約束の百圓を頂戴に往くこと、してはどうだ。さうなれば我等は無事に是所から立退くことが出来るといふもの」

皆の者はこの考へこそ妙であると賛成した。抽籤の結果發案者がその選に當つた。彼等は彼れを捉へて無理矢理に眼球を剔り取つた。彼れは宮殿へ伴はれ。城門に達して彼等は門番にその來意を陳べた。盲人は言つた……「私は御覽の如き盲目でありますから、王様の御慈悲を受けに來つたものであります」。門番は言つた……「よし、よし、では執事のお方にそのやうに申傳へよう」

執事は頗る用心深い性質の人物であつたから、一應この盲人の事情を檢べた後に金を渡さうと思つた。それで彼れは「お前は何が欲しいのか」と問うてみた。すると盲人は「盲目の者に下さるといふその百圓のお金を頂戴し度くてと答へた。執事はすかさず言つた……「私は昨日お前が丈夫な兩眼をもつて料理屋に居るのを見たが……若し私の思ひ誤りでなくば……。お前のこの法令の精神を誤解してゐる。この法令で言つてゐる盲人とは、或る生れながらの病氣とか、或は不時の災難の爲に生れもつかぬ盲目となつた者の場合を指差したのであつて、言はゞ、人間の力でどうすることも出来ぬ不幸の



人を救ふ爲めの法律であるのだ。然るにお前は鱈腹飲食して、その勘定を拂ふことが出来ぬので、自分勝手に盲目となつたのだから、王様の御慈悲を受ける資格が少しもない譯だ。だから憐みを受けたかつたら他へ往くがよい」

盲人は我れと我が身の愚昧であつたことを呪つて、意氣悄然として宮城を去つた。

#### 〔解説〕

可憐なる者よ、この物語中にある法令とは神の掟である。生れながらの病に依りて、或は悪魔の誘惑に依りて罪を犯した者が、心の底から懺悔するならば、神はその人をお赦しになる。しかし、全くの悪心から罪を犯して、その結果、自暴自棄になつた者に對しては、神は容易にその罪をお赦しにならない……假令それが少しでも赦されるにしたとしても。料理店の主人とは悪魔のことである。

#### 〔考證〕

全體の話の組立てはチョーサーの『カンタベリー物語』中であらはれてくる放蕩者の失敗談と同様に、何とはな

しに東洋式の軽いユーモアに満たされてゐる。

### 七四、用心深きこと

或る國王はたゞ一人の王子だけを持つてゐて非常に寵愛してゐた。彼れは大金を投じて一つの黄金の林檎を造らせた。この黄金の林檎が出来上ると間もなく彼れは病床に臥した。彼れは死期の近づいたのを知つて王子を枕頭に呼んで次のやうなことを言つた。

「私の可愛い子よ、若し私が神様の思召しでこの病氣から恢復出来ぬやうになつたら、どうかお前は、私の像てから造つて置いたこの黄金の林檎を携へて、都市村落を隈なく巡歴して、世界第一の愚人を見出して、その林檎を彼れに與へてくれ」

王子は父親の願望を必ず行ふことを誓約した。父王は壁の方へ顔を向けて、そのまゝで呼吸を引取つた。

盛大な葬式が行はれた。王子は父親の埋葬が終つてから、黄金の林檎を携へて彼れの旅程に登つた。彼れは多くの國々を旅行し、多くの愚人に遇つたが、黄金の林檎を與へるやうな愚人には未だ嘗て



出會はなかつた。終に彼れは或る國に入つてその首府に近づいた。その時彼れは非常に美しく装うて、多くの従者を引連れてゐるその國の君主が、街道を厳めしく騎馬で進んでくるのを見た。彼れはこの王者のことについて、特にこの國の制度等についていろいろ問うてみた。その答に依ると、この國の王者は國民の習慣上一年だけでその位を退くことになつてゐるので、最近迄王位に即いてゐた人は、既に凡ての名譽を奪はれて追放の身となり、貧困と薄命の中に死んで仕舞つたといふ話であつた。黄金の林檎の持主はこの話を聞かされて驚いて叫んだ……「ではこの男こそ私の求むる人なのだ、これだ、これだ」。彼れは直ちに王城に往つた。そして大きな聲を張り上げて「陛下萬歲、私の亡父はこの黄金の林檎を陛下に献上するやうにと遺言したのであります」と叫んだ。

國王はこの黄金の林檎を受取つて、そして言つた。

「友よ、それは又如何なる譯であるか。貴殿の父親は私のことは全く識らぬ譯だ。亦私も貴殿の父親に對して何事も御盡力申上げたことは無い筈だ。然るにこのやうな貴重な贈物を私に下さるとはそれは又如何なる譯であるか」

彼れは答へた。

陛下よ、私の父はこの品を特に貴殿に遺産として残した譯ではありません。たゞ私は亡父の遺言

に依りまして、私の見出し得る最も大なる阿呆者にこれを與へれば、それで満足することが出来るのであります。私はこの目的で各地を旅行致しました。しかし、私は何れの地に於ても貴殿ほどの愚人、狂人を見出し得なかつたのであります。それ故、私は私の亡父の命に従つて、この林檎を陛下に献上致すのであります」

王は言つた。

「しかし、お前は如何なる理由で私を天下第一の愚者と呼ぶのか」

彼れは答へた。

「陛下、只今その譯を申上げませう。陛下は僅かに一ヶ年間だけ王者の位に在るのでせう。そして一ヶ年の後には追放されて貧困な生活をしないでならぬのでせう。そして最も憐れむべき末期を遂げるのでせう。世の中にこれほど極端な馬鹿者の例はあるでせうか。東の間の榮華をゆめみて淺間數い末期を望む者は、阿呆者より外に誰もありません」

王者は言つた。

「嗚呼實にその通りだ。お前の言ふことは正しい。だから私は未だ王位に在る間に將來のことを考へて置かう。私が王位を退いて追放の身となつた時に、安樂な生活をなすことが出来るやうに、私



の財寶の大部分を遠い國へ送りつけて置かう」

王はその言の如くに行つた。そして王位を退いた後も永い間贅澤に生活し一生涯安樂に送つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、愚人に黄金の林檎を與へた王は神である。又その林檎はこの世界である。一年位間に在る王とは僅に一時間この世に生活してゐる人のことである……この世に生活してゐる時間は、未來世と比軍すれば僅に一時間の長きに過ぎぬ。故に我等は未來の準備をしなくてはならぬ。

七五、俗界の心配事

昔、三人の美しい娘を持つてゐる王があつた。彼れは是等の娘を三人の大名に妻として與へた。然るに不幸にして三人の夫は皆一年の間に死んで仕舞つた。王はこれを聽いて三人の娘に再婚させようと思つた。そこで先づ長女を彼れの面前に呼び出して「可愛い娘よ、お前の夫は死んで仕舞つた。それ

で私はお前に再婚させようと思ふが」と言つた。しかし長女はどうしても父王の命に従はなかつた。彼女はその理由を説明してかう言つた……「若し私が再婚するならば、第二の夫を第一の夫と全く同様に愛さなくてはならぬことになります……併し實際は第二の夫をより多くか、或は又より少く愛するやうになるのは止むを得ぬこと、思ひます。しかし、このやうな事は決してなすまじきこと、思ひます。何故と申して、私の第一の夫は私の最初の愛、即ち私の處女の誓ひを得たのですから、それ故第二の夫はそのやうに愛さるべき筈は無いと思ひます。しかし私はこの第二の夫を第一の夫以上に愛することになるかも知れません。若しそのやうな結果になりますならば、これが爲に惡が増すばかりであります。又若しその反對に、第二の夫を第一の夫より少く愛するやうになりますならば、私達夫婦の間に喧嘩が起きるばかりであります。さういふ譯でありますから私は再婚はお斷り申します」

王は長女の理窟を聽いて満足した。そこで今度は次女を呼び出して長女の場合と同じことを問うてみた。次女は答へた……「父上、私も再婚はお斷り致します。若し私が再婚に同意することになりますれば、それは富のためか、權力のためか、或は又美のためか、ともかくこの三つの中の何れか一つのためでなくてはなりません。ところで私は富は十分あります。亦權力にしたところで、私を保護し



て下さる友は澤山ありますから、それも無用であります。それならば美しい男は如何といふならば、これも無用であります。何故と申せばこの世界には私の亡夫ほど美しい男はありませんから。さういふ譯で私も獨身生活をやる決心であります」

王は第三の娘を呼び出して同様のことを訊ねてみた。彼女も亦これを拒んだ。そしてその理由として次の如く陳べた……「若し私が再婚致しますならば、私の夫は必ず私の容貌の美しいのを望むか、然らざれば私の富を望みます。しかし第一の要求は全く駄目であります。それは私が美人でないからであります。では第二の條件は如何といふことになりましたが、眞實の愛情は金力では得られぬものであります。お金が逃げてゆけば愛情も逃げてゆくといふ諺もある位ですから、さういふ譯で私は再婚はお断り申します。聖書の中にも書いてあることですが、夫婦は一つの體であるが、魂は二つであります。それでありますから私の夫の體は即ち私の體、又私の夫の體は私の體であります。私は毎日のやうに私の亡夫のお墓に參詣してをります。私の夫はいつも私の心に現はれてをります。ですから私は是等の理由で獨身生活をつゞける決心であります」

王は彼れの娘達が皆このやうに固く道徳を守つてゐるのを見て大に満足した。そしてこれ以上再び結婚の話を持出さうとはしなかつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、王は神、三人の娘は三位一體を象れる魂かたぎそのものである。神は宣うた……「我等をして我等に象りて人間を造らしめよ」。故に渾然として一體となれる三位は魂に依りて表はれ、魂は三人の人物に依りて表はされてゐる。次に三人の大名は悪魔、俗世界、肉慾の三者である。この三者が死滅すれば……即ち魂が己が罪を後悔するやうになれば、再び是等の者と結びつくことなし。

七六、仲直り

昔或る都會に治療にかけては非常に上手なお醫者が二人住んでゐた。どんな病人でもこの醫者の藥を服用して全治しないものは一人も無かつた。そこでこの市民の間にこの兩人の名醫の何れが優れてゐるかといふ議論が起きた。程なくこの議論がこの二人の醫者の間にすら起るやうになつた。その一人は言つた……「私の友よ、貴殿と私とが喧嘩をしたり、嫉妬をしたり、或はお互に怒りあつて離れてゐる必要は無からうと思ふ。寧ろ我々兩人の間で技術の腕競べをやつてみた上で、敗けた者が勝つ



た者に事へるといふことにしては如何」。他の者は言った……「しかし、腕競べをするにしてもどんな風にしてやるか」。初めの者は答へた……「それはかうだ、先づ私が少しの害をも與へることなしに貴殿の兩眼を取り出して、それを貴殿の前の卓の上に置くのだ。そして若し貴殿が御希望であるならばもと通りに完全に且つ役に立つやうに、これを眼窩に戻すのだ。次に貴殿も亦私の行つたこと、同様の手術をやつてみるのだ。若しその時貴殿が私と同様の事を爲し得るならば、私達兩人は優劣の無い者と認められなくてはならぬ。さうなれば兩人は兄弟の如く天下を濶歩して差支ないと思ふ。だが萬一技術に失敗する者があれば、その失敗者は勝利者の下に事へるのである」。彼れの友は言った……「それは成程面白い考へだ。大に賛成します」

是に於て先づこのことを提案した醫者は、彼れの手術道具を取上げた。そして彼れの友人であるところの前記の醫者の兩眼を引き出した。彼れはその後眼窩と眼瞼との外部に或る高價の塗油を塗りつけた。

彼れは問うた……「友よ、何か見えますか」

彼れの友は答へた……「實際何も見えぬ。私は私の目を使ふ用事が無くなつた。しかし、それにして目が無くなつても何の痛みも感じないのは不思議だ。でも、最初約束したこともあるのだから、もと通りに眼球を入れて下さい」

彼れの友は「よし、よし」と言った。彼れは再び眼瞼の内部と外部に前記の油を塗つた後、何等の間違もなしに、彼れの眼球をその眼窩に挿入した。

彼れは問うた……「どうです、見えますか」

他の者は言うた……「善く見えるとも……しかし不思議なことには少しの痛みも感じない」

初めの者は續けて言うた……「さあ、今度は貴殿の順番だ。私と同じ様にして私の眼を取り出すんだよ」



彼れの友は言つた「よし、よし、承知しました」

彼れは直に手術道具を取り上げて、彼れの最初の友がやつたと同様に、或る特別の油で眼の上と下を濡らしてから、兩眼を引き出した。そしてそれを卓上に置いた。患者は少しの痛みも感じなかつた。しかし、彼れは「何卒速く眼球をもとへ還へして下さい」と懇願した。手術者は固より快諾した。然るに彼れが彼れの手術の道具を準備してゐた間に、一羽の鳥が窓の開いてゐた所から入つて来て、卓上の眼球を見るや否や、その一つだけを掠めて逃げて仕舞つた。お醫者はこの不意の事件に全く驚かされて仕舞つた。彼れは心配の餘り獨語したのである……「若し私が私の友人の眼球を恢復しなければ、彼れの奴隷にならなければならぬのだ」その時彼れは一頭の山羊が程遠からぬ場所で草を食うてゐるのを見た。彼れは直にその山羊の所へ走つて行つた。そしてその一つの眼球を引き出して来て、それを彼れの友人の一方の眼窩に入れた。

手術者は叫んだ……「友よ、どうですか、見えるでせう」

彼れの友は答へた……「引き出す時も、入れる時も、少しも痛みを感じなかつた。しかし、これは又驚いた、おや／＼、一方の眼は森々見えるぞ……」

手術者は言つた……「それは薬がよく利いたからだよ。結局私等兩人は優劣がないといふことに決定した。今から後は平等の者として仲直りをしようではありませんか、二人の平和を破つてゐたあの競争心は今日限り棄て、仕舞ふことに致さう」

山羊の眼球を入れてもらつた醫者は贊意を表はした。彼等兩人はこの時以來非常に親密の間柄となつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、二人の醫者とは新舊兩様の法律である。猶太人と基督教徒はこのやうに争うてゐる。引き出された眼球は基督教徒の守つてゐる古い掟である。鳥は悪魔である。山羊の眼は猶太人の重く見てゐる儀式である。彼等はこれが爲に眞實を辨別することが出来ぬ。



## 七七、嫌はれた富貴

或る一人の王は二人の娘を持つてゐた。一人は非常に美しいので他人から大に愛されてゐた。しかし、他の一人は色の黒い、人好きのしない女であつたので、彼女の姉とは全く異つて他人から嫌はれてゐた。父は二人の容貌の異つてゐるところから彼等にそれ〴〵特色のある名をつけた。姉の美人の方をローザムンダと呼び、妹の醜い方をグレイシャブレナと呼んでゐた。前者は芳しい薔薇といふ意味、後者は溢る、優雅の心といふ意味であつた。

王は使者を以て國內に宣傳して言うには、二人の娘の中の何れと結婚するにしても、その結婚を希望する者は次の条件を満たす者でなければならなかつた。即ち第一の条件は結婚候補者は最も價値ある人物たること、第二の条件は美しいその娘を選択する者は、彼女の美貌以外に何物をも與へられざること、但し色の黒いその娘を選択する者は王位を繼ぐやうになること……即ちこの二つの条件であつた。多くの候補者は召しに應じて集つて來た。しかし彼等は皆美しい方を選ばうとしたので、如何に王位の誘惑をもつてしても黒い方を妻としようとする者は無かつた。グレイシャブレナは彼女の不運を嘆じてゐた。そこで王は或日「何故お前はそのやうに泣いてばかりゐるのか」と訪ねた。彼女は「父

上よ、誰れ一人として私を訪づれる者もなく、亦親切に話しかけてくれる者もありません。皆の人は私の姉上ばかりに心を寄せますが、私を思つてくれる人は一人もなく、却つて嘲るばかりですもの」と答へた。父は言つた……「可愛い娘よ、それではお前は未だお前と結婚する者に、王冠を與へることになつてゐるのを知つてをらぬと見えるな」。これを聞くや彼女の心は動いた。そして直に涙を乾してそれ以後は非常に快活の女となつた。

その後久しからずして、或る國王はこの宮殿を訪づれた。そしてローザムンダの非常に美しい姿を見て、彼女と結婚したいといふことを申出した。父王は直に承諾を與へ、ローザムンダも大に悦んで彼れと結婚することになつた。然るに妹のグレイシャブレナは永い間結婚の相手が無いので獨身であつた。しかし最後に或る一人の貴族が現はれて來て、彼女が假令忌はしいほど醒い容貌であつても、富んでゐるからといふので、終に彼女と結婚する決心になつた。そこで彼れは王を訪づれてその許しを得た。王はこの申出を固より悦んでゐるから直に彼女を與へたのである。そして王の死後彼れは王國を譲り渡されたのである。



可憐なる者よ、この國王は我等の主基督である。ローザムダは凡ての人の愛するこの世界のことである。又彼女の妹グレーシャブレナは、世界の人々から嫌はれてゐるところの貧乏そのものである。しかし、心の貧しき者は天國を受けることになる。

## 七八、愛の永續

或る國王は一人の美しい娘があつた。この王女は一人の心の美しい大名に嫁して可愛い子供を生んだ。その大名は死んだ。國內の人々は皆その死を悲んだ。彼れの死後彼女の友人は彼女に熱心に再婚を勧めた。それは彼女が未だ年も若く、容貌も美しかったからである。しかし、彼女は等の忠告に對して次の如く答へた：

「私は決して再婚はしないつもりでをります。私の亡夫は非常に善人で又親切でありました。加之、心から私を愛してくれました。ですから彼れが死んだ時私は迎も生き残つてゐることが出来ぬとさへ考へたのであります。さういふ譯でありますから、萬一私が私の亡夫のことを忘れること

があつたとしても、他に夫を何所で求むべきでせうか。又若し假りに私が再婚するにしても、私の第二の夫は又々私より先きに死なぬとも限らぬでせう。さうなつたならば私の悲しみは二度出てくるといふもの、そして今と同じやうに苦痛を受けなくてはなりません。又若し二度目の夫が悪人であつたらどう致しませうか。二度目の夫が最初の夫にくらべて人物が劣つてゐたならば、先夫を慕ふ心が倍々強くなつて悲しみが増すばかりであります。さういふ譯で私は只今の如く獨身でをり度いと思ふのです」

(註、この物語は本書第七十五章の物語とその性質を同じくしてゐる)

〔解説〕

可憐なる者よ、王は神、王女は基督と結婚した魂のことである。

## 七九、勸違



或る國王は大きな音を出して吠へる小犬に對して不思議なほど好みをもつてゐた。さういふことから、小犬が常に王の膝の上に眠つてゐた。加之是等の小犬は王の膝の上で食べたり眠つたりする習慣がついてゐた爲に、他の所では容易に食べたり眠つたりしなかつたのである。彼等は王の顔を見上げたり、彼等の前足で王の頸を搔いたりして悦んでゐるやうであつた。

偶々驢がこの馴々しい有様を目撃した。彼れは獨語した：「私がこの王様の前で歌をうたつて踊つてみせたら：：又王様の頸をこの足で抱いてみせたら、必ず美味い食物を私に食はせ、彼れの膝の上に私を載せて眠らせて下さるだらう」

こゝに於て驢は彼れの厩を去て宮殿の廣間に入つた。そして王の側へ駆け寄つて、そのぶざまな足をやつとこさで王の頸にひつかけた。王の従者等は驢の厚意のあるところを理解しないで、たゞ氣が狂つたものとのみ思つた。それで彼等は彼れを引き離して、したゝか彼れを打ちのめした。そして彼れは再び厩に入れられた。

#### 〔解説〕

可憐なる者よ、王は基督で、吠へる小犬は熱心な説教師である。驢は何等の資格なくして神の御言

葉を解釋しようとする生意氣な人である。

#### 〔考證〕

この物語は「イソップ物語」そのままの形式である。蓋し東洋傳來の物に多少の變改を加へしものなるべし。

### 八〇、惡魔の奸智、神の祕密の判斷

昔一人の隠者があつて夜となく晝となく淋しい洞に入つて神を念じてゐた。その洞穴からたいして遠くない所に一人の牧羊者がゐる羊の群を監督してゐた。偶々或日のこと、この牧人が熟睡してゐた間に盗人がその虚をついて彼れの羊を掠めて仕舞つた。番人が目を覺してこの盜難事件を發見するやこの事件は彼れの睡つてゐた時に起つたのであると固く言ひ張つてゐた。しかし何所へ持つてゆかれたのか一向分らなかつた。羊の持主は番人の辯解を聞いて到底満足する者ではなかつた。彼れは番人を死刑に處するやうに宣告した。この宣告は前記の隠者に大なる不快の念を與へた。彼れは獨語した



：「嗚呼天よ、天はこの行爲を御照覽なきか。罪無き者が罪有る者の爲に苦しむとは何といふことであるか。天はこれをしもお許しになるのであるか。若しこのやうにして不正の者が勝つことになるならば、私は是所に隠れて神を念じてゐる必要は無くなる。私は寧ろ是所を棄て、再び俗世界へ還へり他人の爲すが如く自分も行つてみよう」

隱棲僧はかういふ感じを抱いて彼れの洞穴を棄て、再び俗社會に戻つた。しかし神は彼れの淪落するのを欲しなかつた。一人の天使に命じて人間の姿となつて彼れと交はらしめた。天使はこの僧の道を遮つて次の如く言葉をかけた：「友よ、何所へ往かれるか」。僧は答へた「彼方の都に」。天使は言うた：「私もお供致しませう。私は天國から來た使者であります。貴殿のお友達にならうと思ひまして來たのです」。彼等は都會を指差して共に歩いた。彼等は都市に着いてから或る武人の家に夜の宿を乞うた。この武人は彼等を温い心をもつて迎へてくれたのみならず、さまざまに優遇してくれた。この武人はその獨り兒を搖籃の中に入れて非常に可愛がつてゐた。夕食の後彼等の寢室は非常に美しく飾りたてられた。天使は僧と共に眠る爲に其所へ退いた。然るに夜半、天使は床から起き上つてこの眠つてゐる幼兒を絞め殺した。僧はこれを見て非常に恐しくなつた。彼れは彼れの腹の中で獨語した：「これが天使であるとは全く虚言だ。この武人は親切にも我等の欲する物は皆與へた。彼

れの所有物としては僅にこの氣の毒な兒が一人あるのみであつた。然るにこれを絞め殺すとは：「この男は決して天使では無い。惡魔だ：」。しかし彼れはこの天使を詰責するだけの勇氣を持たなかつた。

翌朝兩人は一緒に起きて又次の都市へと往つた。其所でも彼等は一住民の家に泊つて大に歓迎された。この家の主人は非常に高價な黄金の盃を所有してゐて、それを大に大切にしてゐた。然るにその泊つた夜天使はこれを偷みとつた。僧はこの事實を目撃してをりながら、恐怖の念に襲はれて口を緘してゐた。翌朝兩人は彼等の旅をつゞけた。彼等は歩いてゐる間に橋のか、つてゐる大きな河に着いた。彼等は橋を渡りかけた。然るにその橋の途中で一人の貧しい巡禮に遇つた。天使はその巡禮に對つて「あの都へ行く道を教へてくれ」と言つた。巡禮は方向を轉じて、その往くべき方角に指差した。然るに天使はその男の方向を轉じた時を見計つて、その肩を捉へ、眞逆さまに流の中へ投込んで仕舞つた。これを見て僧は又々怖れの念を喚び起した。彼れは心の中で叫んだ：「これは惡魔だ、惡魔だ、善良な天使どころか：：彼の爲に溺死の災難に遇つたあの氣の毒な人に、何の罪があつたか：」。僧は今や一刻も速くこの天使と別れたかつた。しかし、彼れはその心に考へてゐることを發表するだけの勇氣は無かつた。晩禱の刻限に彼等は一つの都市に着いた。彼等はこゝで再び夜の宿を求



めた。然るに彼等の申出たところの家の主人は言下にこれを拒絶した。天使はこれを聞いて大に憤つて言うた：「我等に宿を與へないと狼や其他の野獸の餌にしてやるぞ」。家の主人は豚小舎を指差して言うた：「彼方に豚が住んでゐる、若し彼方で一夜を明かすならお貸し申さう。しかし、それ以外の所はお断り申す」。天使は言うた：「我等はこれ以上にどうすることも出来ぬのだから、止む無くその不親切な言葉に従はう」。彼等はその言葉の如く行つた。翌朝天使は宿の主人を呼んで言うた：「私の友よ、この盃を貴殿に贈物とする」。彼れは前記の窃盗品を彼れに與へたのである。僧はこれを見て倍々驚いて仕舞つた。そして私かにさ、やいた：「これが悪魔であることが最早や疑ふ餘地が無い。彼れは私達に親切をつくしてくれたあの善人からこの盃を盗んで来て、そして、それを私達に宿を拒んだところのこの男に與へてゐる：」。彼れは天使の方を見て叫んだ。私は今度貴殿と一緒に旅行することは止めにした、御機嫌よう：」。天使は答へた：「親愛たる友よ、先づ初に私の言ふことを聽かれよ、それから勝手になさいよ」

〔説明の條〕

「爾は爾の庵室にゐた時、羊の持主が不正にも彼れの僕を殺した。彼れが罪無くして死んだのは明かである。故に彼れが他の世界に入るに適當してゐたのである。神が彼れの殺されるのをお許しになつたのは、若し彼れが生存してゐたならば、罪を犯すやうになり、然かも罪を犯した後に、未だ悔恨の念を起さぬうちに彼れが死んで仕舞ふことを達觀されたからである。然るに羊を盗んだ罪人は永遠に苦しむことになる。そしてその反面に於ては羊の持主は、彼れの無智の爲に犯した罪を、施物や善行爲に依りて賠償することになる。次に私が親切な武士の子をその搖籃の中で絞殺したことになるが、これはこの子が生れる前迄はその父親が多くの慈善事業を行つてゐたにも拘らず、子供が生れてからといふものはその子の愛に引かされて、子供の爲に財産を増さうといふ心から、貪慾になつたので、それを私が戒しめんが爲にわざとその子を絞殺したに過ぎぬ。これが爲に父親は悲しみの極再び神を崇めるやうになつた。次に私が私達を親切に取扱つてくれた恩人の家から黄金の盃を盗んだが、これにも深い譯があるのだ。この盃が造られる以前はこの世界にこの男以上の禁酒家は無かつたのである。然るにその後彼れはこの盃に好みを持つて、屢々これを愛用し、一日に二回又は三回づ、酩酊するといふ有様であつた。それで私はこれを盗み取つたのである。彼れはこれが爲にもとの如く禁酒家となつた。次に私は巡禮者を河に投げこんだ。しかしこれにも理由がある。即ち私が溺らせた巡禮者は善良な基督教信者であつたが、しかし、若しもつと進んで



行つたならば、必ず大罪を犯すに至つたのである。彼れは今や救はれて天國の光榮に浴してゐる。次に私は不親切な市民に黄金の盃を與へたことは事實であるが、これとても理由が無いことは無い。彼れは私達に豚小舎を與へた。それ故に私は彼れに貴い報酬を贈つたのである。しかし、彼れは今後地獄で住むことになるであらう。故に爾の唇に番人を置いて、神を誹謗するものではない。何故といへば神は萬事を知つてゐられるから」

隱棲僧はこれを聽聞して天使の前に伏してその不明の罪を謝した。僧は再び彼れの洞穴に還つた。そして善良な且つ信仰の堅固な基督教徒となつた。

#### 〔考 證〕

この物語は説教物語としては上乘なるもの、一つである。古來この物語の材料に關して異説が多い。或者は(例へばポープの如し)スペイン語の種本が最古のものであると説き、或者はアラビア傳來の物であると想像してゐる。何れにもせよ東洋種であることが粗と推斷され得ると思ふ。

## 八一、宿 緣

皇帝マーカスは一人の王子と一人の王女を持つてゐた。彼れはこの二子を非常に愛してゐた。彼れは高齡に達して重い病にかゝつた。彼れはその死期の接迫して來たのを知つて、國內の主なる大名等と呼ばひ出して、己が面前に招いて、次のやうな遺言をした。

「皆も見られる如く、私の魂は今日その生れて來たところの神の許へ還るのである。私の特に心にかゝるのは獨り娘の將來である……未だ結婚もさせないであるから……それで私はお前……私の息子であつて又私の相續者であるお前によく頼んで置き度いが、彼女の爲に立派な夫を持たせてくれ。そしてお前の一生涯の間、彼女をお前の命と同様に大切にしてくれ」

是等の言葉を言うてから彼れは壁の方へ向いて仕舞つた。彼れの魂はこの世界から飛び去つて仕舞つた。國王は大に悲しんだ。彼れの遺骸は莊嚴な式をもつて葬られた。

若い皇帝は善政を施した。特に彼れの妹に一身上の事に關しては、亡父の遺言を固く守つてゐた。彼れは彼女と同じ椅子に坐して食事を共にした。又夜間は彼れの寢室に彼女をつれて來て眠らせるといふ有様であつた。しかし、こゝから彼等兩人の、取返へしのつかぬ不幸事が生じたのである。彼れ



は悪魔の誘惑を受けて最も恐るべき慾情に敗けたのである。そして憐れむべき處女の反對をも顧みずして、彼れは終に神も人も許さざる大罪を犯して仕舞つた。泣いてこの汚辱が取消し得るものであるならば、彼女の涙はこれを取消すに十分なものがあつた。彼女は非常に泣いた。そして一切の樂しみを拒んだ。しかし、皇帝は彼女を慰めることにつとめた。そしてそれは徒に悲嘆と愛情の極端なるものを證據だてるに過ぎなかつた。半年ばかりたつてからのことであるが、兩人が食事をしてゐた時、兄は妹の顔を凝視<sup>みつめ</sup>してゐたが、俄にこのやうなことを訊ねた……「何故顔色がそのやうに變つて來たのかね。お前さんの眼瞼の上の方が黒くなつて來たよ」。彼女は答へた……「何の不思議もあらう筈はないでせう。恐ろしい罪の報いが私の腹に宿つたのですもの……」。皇帝はこれを聞いて魂の消え入る感があつた。彼れは顔をそむけて、絶え入るばかり泣いた。そして「生れて來たその禍ひの日が恨めしい……嗚呼何としよう……」と言ふのである。妹は言つた……「兄上よ、私の申すことを聽いて下さい。神様をこのやうに怒らせた者の最初の罪人は私達ではありません……兄上も御存知の通り亡父の顧問官として評判の善つた老武士が未だ生存してをりますから、その老人を是所へ喚び出して、私達兩人の口からこの悲しい物語を全部告白致さうではありませんか」。兄は言つた……「それは實に善い思ひつきだ。しかしそれを行ふ前に先づ神に謝罪致さうではないか」

彼等は神に懺悔した。彼等の悔恨は實に眞面白であつた。亦その告白も徹底してゐた。彼等はいよいよ神に對する懺悔を終つたので、今度は前記の老武士を喚び出した。彼等は武士の前で涙ながらに彼等の罪を告白した。

武士は言つた……「陛下よ、陛下とその御妹君は神様のお和らけにならうと思召すならば、私の申上けることをお聴きにならなくてはいけません。即ち陛下は、陛下御自身の罪の爲に、又陛下の父帝の罪の御爲に、速に靈地に御出發になることであります。但し御出帆の前に國內の諸大名を御喚び出しになつて、その旅行の理由を一通り御説明になることが必要であります。又、御妹君は陛下御出立後たゞ一人の王位相續人でありますから、是等の大名等にその妹君に對しての忠勤を誓はせる必要があります。次に私自身のことを申上けるならば、何卒御妹君を私の監督の下にお委ねを願ひます。私は私自身の生命を愛しますと同様に、御妹君のことは萬事安全に且つ幸福に取計ひます。御分婉のことも祕密に取計つて誰れにも知られぬやうに致す決心ををります……たゞ私の妻にだけは告げて置きます。それは萬事彼女に世話をさせるつもりでをりますから」

王は言つた……「お前の考へは實に善いと思ふから、何事もその如く行うであらう」

直に諸大名は呼び出された。皇帝の靈地行幸の準備はと、のつた。彼れの妹君は前記の武士の居城



に送られた。武士の妻は彼女を見た時、その夫に對して何故このやうな女子を是所へ連れて來たのですかと問うた。これは寧ろ自然の問ひであつた。夫は妻に答へた：「これは國王の御妹君である。しかし、これから私がお前に話さうとしてゐる事柄を、お前が何人にも洩らさぬといふことを誓つてくれなくてはならぬ。萬一お前がその秘密を洩さうものなら、お前の一命が無いものと知れよ。」彼女は決して他言せぬことを誓つた。そこで彼れは國王の妹君の秘密を悉く妻に話した。そして今日以後は彼女以外に誰れもこの妹君に侍づいてはならぬことを命じた。従順な妻はその命を守ることを約した。姫はその住居として定められた部屋に密かに導かれた。彼女は何不足なく侍かれた。分娩の時間が近づいた。美しい男兒が安々と生れた。武士はこれを知るや、洗禮の式を擧げる爲めに僧侶を呼んで來てはどうかと姫に問うてみた。姫はそのやうなことをされては萬事が發覺して、恥辱を世間に曝らすことになると言つて甚しく反對した。武士は言つた：「貴女の罪は成程重いには相違ありませんが、王子までがそれが爲には永久に殺されて仕舞うては氣の毒でせう。」姫は答へた：「私の誓約は天國の帳面に記るされてゐる。私は最早や誓つた者である。私は私の罪に更に僞誓を加へることは致さぬ。私は今空桶を一つ欲しいから用意して下さい。」武士はその命に従つた。姫はその空桶の中に生れたばかりの男兒を横へ、小さな書付を一緒に入れたのである。それにはかう書いてあつた：「何

かの因縁でこの兒を拾つて下さつた御仁は、この兒が畜生道に陥つた者の兒であるが爲に、洗禮を受けぬことを御承知になつて下さい。何卒、この兒の爲に洗禮を與へて下さい。枕の下に黄金を入れて置きましたから、その金でこの兒を養つて下さい。又足の下に同様の目方の銀を入れて置きましたから、それでこの兒に將來學問をやらして下さい。」かう書いて、彼女はそれを赤兒の側に置いた。又黄金は枕の所に銀は足許に置いたのである。それから彼女は黄金の絲で縫取つてゐる絹の衣に彼女の赤兒を包んで、これをその空桶の中に入れた。そして武士に命じてこれを海上に流した：「神様の御慈悲に依りて必ずや安全の地に流れ着くこと、信じて：」。武士は姫の命令を忠實に行つた。彼れは桶を海中に投げた。そしてそれが終に見えなくなるまで海岸に立つてその流れてゆくのを見てゐたのである。

武士が、姫の命令を果たしてその城に還ると、國王の使者が來た。彼れはその使者に言葉を掛けた：「何所から來た使者であるの。」使者は答へた：「靈地から參りました。」武士は問うた：「左様では何か外國で變つた事があらうな。」使者は答へた：「主君の國王陛下は御他界遊ばされました。それ故私等はその御遺骸をその御城に持つて參つたところでありませぬ。」

正直な武士はこの話を聽かされて涙を抑へることが出來なかつた。その時恰も彼れの妻も是所へ來



てゐてこの凶報を耳にして夫と共に悲嘆の涙にかきくれたのである。しかし、武士はこの報知の爲に沈んでゐた元氣を多少恢復してから、かう言ひ出した……「何卒泣かないで来てくれ、お姫様にさくられたら大變だ。必ずその譯を訊ねられるから……お産の褥をお離れになる迄にかういふ不吉な事はお耳に入れぬに限るよ。」かう言つて彼れは妻と共に王妃の部屋に入つた。しかし彼等兩人の悲しげな顔色は姫の鋭い目を避けることが出来なかつた。姫は熱心にその譯を問うた。彼等は答へた……「お姫様私等は悲しんでゐる者ではありません。悲しむどころか却つて貴女の御健康の速く恢復したのを見て悦んでゐる次第でございます。」姫は重ねて言つた……「いや、いや、それは眞實で無い。善い事にせよ悪い事にせよ、私に祕密にするとは何といふ不忠者だらう。天罰が來ますぞ。」武士は止むを得ずかう答へた……

「實を申せば只今靈地から使者が参りまして、我君、即ち貴女様の御兄君の御様子を傳へましたので……」

「その使者は何というてゐるか……是所へ使者をお呼びよ……」  
 彼者は呼び入れられた、姫は王の様子を訊ねた。

使者は答へた……「王様は御他界遊ばされましたから、その御遺骸を御本國に持つて参りました……御本國の儀式を用ひてお葬ひ申上げようと存じまして……」

姫はこの不幸の報知を得て地上に倒れた。武士とその妻は姫の悲しみを思ひやつてその傍に彼等の身を投げたのである。永い間彼等三人はこの有様をつけた。彼等は最早知覺が失せて仕舞つたほど悲しみに打たれたのである。姫は先づ起きた。そして彼女自身の頭髮を搔きむしり、顔を引かき、金切り聲を張り上げて言つた……「嗚呼悲しい、悲しい、何故私がああ娠娠した日に死な、かつたのだらう。あの氣の毒な、氣の毒な赤兒の生れたあの夜のこととは忘れて仕舞ひ度い、私の罪過は何といふ大きなものであらう。凡ての事が私に満たされてゐる、私の希望は破られ、私の元氣は竭きて仕舞つた。彼れは私のたつた獨りの兄弟である……私の魂の半分である。私は今日以後何と致さう、嗚呼私には分らぬ……」

武士は起きて言つた……「お姫様、私の申すことをお聴き下さい、若し貴女がそのやうなことばかり仰せられるならば、この國は滅びて仕舞ひます。今は貴女だけが獨り残つてゐられるのでありますから、貴女以外には正しい血統の王位相續者は一人も居りません。若し貴女が御自分で御自身を滅してお仕舞ひになるならば、この國民は外國の人々に自由にされて仕舞ひます。さあ、しつかりして下



さい。王様の御遺骸を是所へ御移しになつて、御葬ひの式を嚴かにお舉げにならなくてははいけません。そして式がいよいよ終りましたらば、ゆつくりとこの國の將來のことを御相談になつては如何でせう。彼女は武士の言葉に依りて慰められはしなかつたが、しかしそれで心が落付いたのでやつと身を起して、貴族を従へたま、で、その兄君の遺骸の横つてゐる城へ入つたのである。死骸は柩の上に置かれてあつた。王妃はその部屋に入るや否や死骸にとりついて頭から足まで……否、その足の裏に至る迄接吻した。兵士等は王妃の餘りに悲しむのを見るに見兼ねて彼女を柩から引離して部屋に導き入れた。そして死骸を墓所に運んで盛んな式を舉げた。

この後久しからずしてバーガンデーの或る大名は使者を送つて、姫をその妻にと懇望したが、姫がこれを拒絶したのでこの大名は大に憤つて言つた……「この女が若し私と結婚してをれば、私はこの國の王となつてゐるのだが。しかし、彼女は私を排斥しようといふのだから、假令彼女が王位に在るにしても、碌な事は無いぞ。」さう言つて破れは直に軍勢を集めて彼女の領内に押寄せた。彼れは到る所で良民を苦しめ、又彼れに反對する者を悉く征服して仕舞つた。王妃は大に窮地に陥つて止む無く今迄住んでゐた城を棄て、もつと堅固の城の在る又守りの嚴しい一都市に避難した。そして其所で彼女は長い歲月の間滞在した。

これよりの海中に棄てられた男の兒のことを話してみよう。赤兒の入れてあつた桶が多くの國々の海を流れ流れて、終に第六祭禮期に或る僧庵に漂着した。その日庵主は魚を獵りに往く準備をしてゐた。彼等一行が彼等の網を投げてゐると、一つの桶が波の動搖をうけて海岸に打上げられた。庵主はこれを見て彼れの僕に言つた……「あの桶は何だらう。何が入れてあるか開けてみよ。」彼等は桶を開けてみた。驚いたことにはその中に生れたばかりの一人の男の兒が、非常に美しい着物を着て横はつてゐた。そしてその赤兒は庵主の顔を見るなりにこゝろ笑つたのである。庵主はこれを見て大に感動して仕舞つた。彼れは言つた……「嗚呼神様よ、これは又何といふ譯でありますか、このやうな氣の毒な有様の赤兒を見ると……」彼れは自身の手を下してその赤兒を抱いた。赤兒の側に、その片腹の下に不運な母親の書いた書付が入れてあつた。彼れはこれを讀んでこの赤兒が骨肉相姦の間に生れた兒であつて、未だ洗禮も濟んでをらぬことが分つた……母親が天國の爲にそのことばかりを願つてゐる意味がこの書付に書いてあるので……又、彼れは黄金と銀がこの兒の養育費と教育費の爲に置いてあるのを見出した。そこで彼れは直に洗禮を與へ、彼れに銘名するに、彼れ自身の名にかたどつてグレゴリーといふ名を以てした。彼れは桶の中にあつた黄金と銀を取出してこれを一人の漁夫に與へ、その漁夫からこの兒を養つて貰ふことにした。この兒は多くの人々から愛されて成長した。七歳



の時庵主は彼れに學問を教へた。驚くほどその學問が上達した。僧侶仲間はこの兒を非常に可愛がつてくれて、恰も彼れが彼等自身の宗派に屬する者の如くに考へてゐた。忽にして彼れは是等の凡ての僧侶よりも多くの智識を學び得たのである。

或日のことである。この子はその假りの父親たる漁夫の子とボール遊びをしてゐたが、偶然ボールで漁夫の子を打つた。打たれた子は甚く泣いた。そして家へ走つていつて、兄弟のグレゴリーに打たれたといふことを母親に愁訴した。母親は大に怒つて直に家から走り出てグレゴリーを甚く非難し、且つ怒りにまかせて「この横着な放浪奴たろつきめが、何故私の息子を打つたか、汝のやうな親も國も無い奴が、私の大切な息子を打つとはもつての外だ」と叫んだ。これを聞いてグレゴリーは大に驚いた。彼れは言つた：「では母上、私は貴女の子で無いのですか、何故貴女は今のやうに私をお呼びになつたのですか。」婦人は言つた：「私の息子だつて！ 何をつまらぬことを言ふのです。汝は誰の子であるか私には分らぬ。たゞ私に分つてゐる事は、汝が或日桶の中に入つてゐたのを庵主がお拾ひになつて、それ以來庵主の御手で汝を御養育になつたといふそのことだけだよ」

グレゴリーはこれを聽いて泣き出した。彼れは庵主の許に駆け出した。そしてかう言つたのである：「御師匠様、私は長い年月の間御師匠様と一緒に居りました。私は漁夫の子であるとのみ信じて

をりました。然るに今日はさうで無いことが分りました。私は自分の兩親が分らなくなりました。御師匠様、何卒私を武人にして下さい。私は最早や是所に居り度くありませんから」

庵主は言つた：「我が子よ、決してそのやうな考へを起すものでは無いよ。皆の僧侶仲間はお前を可愛がつてゐる。それ故私が死んだ後は、お前は必ず私の後を承けて是所の庵主となれるのだ。」

グレゴリーは答へた：「御師匠様、私は私の兩親のことを知り度くあります。かういふ中間ぶりの有様で居ることは、逆も私の忍ぶことの出来ぬことであります」

僧は如何に彼れを慰めても効果が無いと考へたから、寶藏へ入つて先年桶の中で見出した書付けを取出して來た。そしてこれをグレゴリーに與へて「さあ、これを讀むがい、お前の身許がこれを讀めば皆分るのだ」と言つた。

グレゴリーはこれを讀み終つてから地上に泣き伏した。彼れは叫んだ：「嗚呼、これが私の兩親であるのか。では私はこれから一刻も速く靈地に參つて、私のこの不運な生みの親の爲に罪障滅却の修業をなし、其所で私の一生を送らうと思ふ。御師匠様、何卒一刻の猶豫もなく、只今私を武士にして下さいませんか。」僧はその希望を許して、直に彼れのために武士免許の式を擧げた。僧院の人々



は固よりのこと、近くに住んでゐた人々も、グレゴリーの出立を聞くや皆その別れを惜んだのである。グレゴリーは或る武人團の一行と共に靈地へ往くこと、なつた。さて彼等が相携へて本國を出帆すると間もなく逆風が起つて來て、一行が或國の海岸へ俄に吹きあけられて仕舞つた。然るにこの漂流した國こそグレゴリーの母親の持城の在つた所であつた。武人の一行はこれが何といふ國やら、又是所の君主は誰れであるか少しも承知してをらなかつたのである。しかし、グレゴリーがこの都に入ると一人の市民は彼れに「貴殿は何所へ參られるのか」と問うた。「宿りを求める爲に」といふのがグレゴリーの答へであつた。その市民は親切にもグレゴリーを案内して己が家へと導いて、其所で非常に歡待した。彼等が共に食事についた時に、グレゴリーはこの家の主人にこの國の名や、その君主の名等を委しく問うた。家の主人は答へた：「今より少し前迄、私達は非常に強い王様を持つてをりましたが、その王様は靈地で御他界になりましたので、その妹君は王位をお繼ぎになりました。ところがバーガンディーの大名はその妹君に對し、結婚を申込んだのであります。しかし、妹君はその申込をお拒みになつた爲にバーガンディーの大名は非常に憤つて、直に戰爭をしかけて終にこの國の全部を征服して仕舞ひました。そして只今残つてをりますのは僅にこの妹君たる皇后がお住ひになつてゐる都市一つだけに過ぎません。」若き武士は言うた：「では私は私の胸中の祕密の希望を陳べても差支が

無いでせうか……」

「それは大丈夫ですとも」

グレゴリーは言葉をつけた：「私は身分の正しい武士である。貴殿は明日御足勞ながら宮殿迄私の爲に使者の役目を勤めて下さいませんか。先づ宮城へお出でになつて執事に御面會になり、若し彼れが私に報酬するといふことを約束するならば、私は今年一年間皇后の爲にバーガンディーの大名を討伐致しますといふことを傳へて貰ひ度いです。」この市民はこれを聞いて直に言うた：「さういふ事でありまするならば彼れは即座に承諾致しますよ。ともかく私は明日御希望通りのことを實行致します。」

宿の主人は翌日宮殿へ出掛けてこの事件を委しく傳へた。執事は少なからず悦んだ。そして時をも移さず、一人の使者をグレゴリーに遣はした。グレゴリーは使者の案内によりて宮殿へ參上した。直に彼れは皇后の謁を賜つた。皇后はこの勇士を得たことを非常に悦んだ。しかし、これが彼女の生みの子であるとは夢にも想像してゐなかつたのである。何故と言へば、彼女の赤兒が海中に棄てられたのは長い昔のことであつて、既に大海の真中で死んで仕舞つてゐるべき筈であつたからである。執事は皇后の面前に於て、この武士から一年間、國家の爲に奉仕して貰ふことの契約を結んだ。グレゴリー



は翌日直に戦争の準備をなし、大軍を集めた。彼れの作戦は實に巧妙であつたから到る所で大勝利を得た。そして終にバーガンデーの大名の居城迄も陥落させた上、彼れを捕へて首を刎ねたのである。

この成功がもと、なつて、他の都市は相續いで降つた。彼れの武勇の噂は戦はずして是等の都市を平定する所以となつた。彼れは契約の一箇年が來ないうちに、全領土を敵の掌中から奪へ還して仕舞つた。グレゴリーはこれより他の國へ出發し度いといふ考へがあつたから、執事に豫ての契約に基いて一箇年間奉仕の執酬を要求した。執事は答へた：「貴殿の功勞が餘りに大きいので、豫ての御約束の報酬だけでは不足だと思ひますから、先づ皇后の面前に參つて、其所で改めて御相談申上げようではありませんか」。彼等は皇后の面前に現はれた。執事は先づかう言つたのである：「陛下、私は只今陛下の御爲に一言申上げ度いことがあります。私達は今日迄君主の無かつた爲に多くの禍ひを受けて參りました。私達の希望と致してゐる事柄は、かういつた不幸の事件が再び來ぬやうに、陛下から或る勇敢な夫君を迎へていたゞき度いこととあります。陛下の御領土は十分豊かでありますから、富んだ夫君をお迎へになる必要はなからうと存じます。そこで實に失禮の言葉とは存じますが、この國の爲に最も都合も善く且つ將來の國運を盛んにする上から考へまして、グレゴリー閣下ほど適當した夫君は何所にも無からうかと存じます」

皇后は既に前にも話した如く再婚を拒んでゐる人であつた。しかし、このやうに執事から理論責めにされて、その上せきたてるので、今は到底これを拒むことが出來なくなつて仕舞つた。そこで彼女は或る指定の日に確答すること、し、それ迄十分考へさしてくれと懇願した。いよくその指定の日が來た。彼女は多くの大名等の集つた席上で、やをら身を起して次の如く陳べた：「グレゴリー殿は私の爲に、又國民の爲に勇敢に、又有効に戦つて下さつたので、我國は強敵の東縛から免れることが出來たのである。それ故私はその御恩に報いる爲にグレゴリー殿を私の夫君として迎へる」

これを聽く者は皆悦んだ。そして一日も速く結婚の式を擧げることにした。聽てその日が來た。彼等は全國民の歡喜の中に結婚の式を擧げた：母と子との結婚が：しかし勿論兩人は親子の關係のあることを承知してをらなかつたのである。彼等は互に相愛してゐた。然るに或る特殊の譯でグレゴリーが狩獵に出掛けたことがあつた。その留守の時、皇后の侍女がかういふやうなことを話しかけた：「陛下、こんな事を申上げては御留守中の陛下に對して失禮にならぬでせうか：」。皇后は答へた何をかい？何でも言うて御覽よ、何も失禮になぞなるものですか。私達夫婦ほどお互に愛しあつてゐる者は世界に無いのだから。それにしてもお前は何故そのやうなことを問ふのですか」侍女は言う



た……「何故と申して陛下は毎日御満足けに御自身のお部屋にお入りになりますが、其所をお出ましになる時はいつも淋しさうにしていらつしやるのですもの。そしてその後御自身でお顔をお洗ひになります。私にはこの譯が少しも分りませんの」

皇后はこれを聴くなり、案内を求めまでもなく、直に王の私室に入った。そして入れ物といふ入れ物は悉く檢べたのである。終に書付の入れてある場所を搜索し當てた。この書付けこそは彼れの誕生の賤しいことが書いてあるものであつて、彼れが毎日讀んでゐたものである。彼女はこれを見て非常に悲しんだ。そして我れを忘れてさめくくと泣いた。これこそは彼女が桶の中に入れて置いたものであつて、今それが彼女の眼前に現はれて來たのであるから、萬事魔術にかゝつた如く彼女の記憶を喚び起したのである。彼女はこの書付を開いてみた。正しく彼女自筆のものであつた。彼女は叫んだ……「かういふ罪の證據を持つてゐる以上は、これは私の子に相違ない。」彼女は狂氣の如く泣き叫んだ……嗚呼私は何故天日を仰ぐやうになつたのだらう……生れぬ前に死ぬべきであつたに……」。廣間に居つた武人等は皇后の悲しい叫びを聞きつけて部屋に駈けて來た。彼女は地上に倒れて泣いてゐた。彼等は彼女を圍んで永い間立つてゐた。やつとのことで彼女は元氣がついて來たのでかう言ひ出した。私を活さうと思ふならば陛下を直ぐ呼んで來て下さい。直に使者が馬を走らせて國王の許へと赴いた。

た。彼等は皇后の危篤であることを王に傳へた。王は驚いて城に還り直に皇后の横はつてゐる部屋に入つた。皇后は夫の還つたのを見るや「何卒人拂ひを願ひます。貴郎だけのお耳に入れることがありますから」と言つた。部屋が直に人拂ひになつた。皇后は熱心な様子で國王の血統を質問した。王は答へた……「それは妙な問ひである。しかし、たゞ答へて置き度いのは私は遠國の生れであるといふことである」皇后は言つた……「私は眞面目に神様に誓つて申しますが、若し貴郎が眞實のことを私にお話しにならぬならば、私は自害しようと思つてをります」。王は言つた……「いやさう言ふことにならうものなら、私は實に貧しい憐れな者になつて仕舞ふ……私がお前とお前の國を奴隸の有様から救ひ出した時に用ひた武器以外に何物も持たぬこと、なる譯だ」。皇后は迫つた……「貴郎の生國と貴郎の兩親のことさへ承れば、それでよろしいのですよ。若し貴郎が私に眞實の事をお話しにならぬならば、私は今日より後は食事を致しませぬ」。王は言つた……「では満足の出来るやうに答へよう。私は幼い時から一人の僧侶に養育されたものである。その僧侶の話に依れば私は桶の中に入れられてゐるたさうである」。……で彼女は彼れにその書付けを示した。そして言つた……「これを知つてゐるでせう。」彼れはその書付けを見て地上に伏した。彼女は叫んだ。私の息子、お前は私の子なのだ。私の獨り子で、そして私の夫で、そして又私の君であるとは……お前は私と私の兄上との間に生れた子なのだ。私の



息子、私はお前と共に是等の書付を空樽の中に入れて置いたのだ。嗚呼私は何故この世に生れて來たのだらう……かう言ふ惡事を犯すことになつたほどなら……嗚呼私は灰になつて仕舞ひ度い……母親の腹から直ぐ闇の中へ入つて仕舞へばよかつたのだ……」。彼女は壁に頭を打ちつけながら叫んだ。「神様、何卒私の息子……私の夫、私の兄上の子を御覽下さい」。グレゴリーは言つた：「私はかういふことになるのを心配してゐた。然るに終に惡魔の良にか、つて仕舞つた。何卒私をたゞ獨りで悲しまさせて下さい。嗚呼何といふ悲しいことだらう。私の生みの母親が私の妻であるとは……惡魔の惡戲にも程がある……」。母親は我子の悲しみを見て言つた：「我子よ、私は私の晩年を神様に捧けて、難業を苦行し、諸所を巡歴して私達の罪を滅ぼさうと思つてゐる。お前はこの國を治めて下さい。」彼は答へた：「それはいけません。貴女は是所にとゞまつてゐて下さい。私は私達の罪が赦される迄放浪生活を致さうと思ひます。」

その夜彼れは起き上つて彼れの槍を折り、巡禮者の衣を纏うた。彼れは彼れの母親に暇乞をした。そして素足のまゝで放浪の旅路に出で、終にその領内の最も遠い國境に辿りついた。彼れは或る都會に入つてから漁夫の家を捜し出して、其所で一夜の宿を乞うて許された。漁夫は彼れを鄭重に取扱つた。そして彼れの人柄の上品なのを見て、かう言つた：「貴殿は眞の巡禮者では無い。それは貴殿

の上品な御容子で明かになつてゐる」。巡禮者は答へた：「假令眞實の巡禮者で無いにしても、何卒私に一夜の宿を與へて下さい」。漁夫の妻は彼れを見て甚く信仰の念に動かされて仕舞つて、彼れの爲に一夜の宿を貸すことを夫に請うた。但し臥床は門の入口に設けたのである。水とパンと魚が彼れに與へられた。漁夫は特に彼れに注意した：「巡禮者よ、若し貴殿が神聖な人物とならうと考へるならば、遠い遠い所へ往かなくてははいけませんぞ。」グレゴリーは答へた：「悦んで御言葉通りに致します。しかし私にはその場所が分りません」。漁夫は言つた：「では明日私が御案内ませう」。翌日になると漁夫は彼れを喚び起して大急ぎで出發させた。彼れは餘りにせきたてられたので先夜眠つた門の背後に彼れの書付けを置き忘れて仕舞つた。

漁夫は巡禮者と一緒に海上に乗り出した。約十六哩ばかり乗り出した所に一つの大きな岩があつた。その岩の麓には鎖がか、つてゐて、鍵を用ひなければ其所へ登ることが出来なかつた。漁夫は鍵を取出して鎖を解いた後この岩の上に巡禮者を導いた。そしてそれが終ると鍵を海中に棄て、彼れ自身のみさつさと還つて仕舞つた。巡禮者はこの岩の上に十七年間とゞまつてゐた。そしてこの長年月の間深い懺悔の念に耽つたのである。

その頃法王遷化のことがあつた。法王が遷化された時天に聲があつた：「グレゴリーと呼べる僧



を捜索し來れよ、そして彼れを法王の位に即かしめよ」。長老はこの聲を聽いて大に悦んだ。世界中に使者を送つてグレゴリーの行衛を捜索した。彼等の或者は偶然にもこの漁夫の家に泊つた。彼等が夕食を食べてゐた時、その一人は言つた：「友よ、私達はグレゴリーと呼ぶ僧を捜索する爲に各地を歩いて今は殆んど尋ねあぐんでゐる。若し私達がこの僧を見出すならば直ぐにも法王の位に即けることになつてゐるのだが」。漁夫は前記の巡禮者のことを思ひ出して、是等の使者に言ふやうに：「グレゴリーと呼ぶ巡禮者は十七年以前にこの家に泊つたことがある。私は彼れを海中の岩の上へ導いた。そして其所に彼れを置き去りにして來た。しかし、餘り久しい以前のことであるから、彼れは最早死んで仕舞つたこと、思ふ」

その同じ日のことであつた。澤山の魚が取れた。この漁夫がその中一つを料理してゐると、十七年前に彼れが海中に投げ棄てた鍵が偶然その腹から出て來た。彼れは直に叫んだ：「皆さん、これ御覽ぜよ、鍵が出て來ましたよ、これは私が海中に棄てた鍵ですよ、この縁起の善いことから考へてみると、皆さんの苦勞は報いられたと申すもの」。使者の一行は漁夫の豫言を甚く悦んだ。翌日朝夙く彼等は彼れを案内者としてその岩に赴いた。岩に上つてみるとグレゴリーは無事に生存してゐた。彼等は言つた：「神の人グレゴリーよ。我等と共に戻られよ。神様の御言葉であるが故に我等と一緒

に戻られよ。貴僧は神様の御意に依りてこの世の教への師とならなくてはならぬのです。」グレゴリーは答へた：「神様の御意とあらば従ひませう」。彼れは彼等に從つて岩を去つた。彼れが都市に入るや否や市中の鐘といふ鐘は皆獨りでに鳴つた。市民は鐘の音を聞いて皆街道に走り出た。そして基督の正嫡ともいふべきこの教への主を迎へた。グレゴリー僧正は法王の位に即いて正しい行ひをもつて天下に範を垂れた。世界各国から多くの人々は彼れの許に集つて來て、彼れの教へと彼れの助けを請うた。

グレゴリーの母親は現在法王の位に在る人物の非常に徳の高いことを傳へ聞いて、かういふ名僧ならば自分の力になつてくれることと思つた。しかし、彼女はこの人物が彼女の息子で、彼女の夫であるとは少しも知らなかつたのである。そこで彼女は急いでローマに出立して、法王の前に出で、己が罪を懺悔した。法王はこの懺悔を聽く迄は、この婦人が己が生みの母であることに思ひあたらなかつたのである。法王は言つた：「なつかしい母上よ、妻よ、又情人よ、惡魔は私達を地獄に伴つて行かうと夢みたのでありますが、神様の御慈悲に依つて私達はその惡魔の良から免れて仕舞ひました」。母親は是等の言葉を聽くや法王の足下に倒れ伏して悦びの餘りよ、と泣いた。しかし、法王は彼女を助け起して、なつかしさうに彼女を抱きかへた。彼れは彼女の爲に一字の寺を建立して、彼女を其



所の庵主とした。この後久しからずして兩人は大往生を遂げた。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は基督である。皇弟の娘は人間の魂である。又その娘を委ねられた兄は肉慾である。兄と妹が一つの部屋に眠つたといふことは、二人が一つの心になつたことである。兄と妹との間に生れた子は人類である。樽は聖靈である。世界の海を漂流するが故である。バーガンディーの大名は悪魔である。何故と言へば彼れは罪に曝らされた魂を侵して、これを占領するからである。しかし、終には神の子、即ち基督が：：神であり亦人であるところの基督が現はれて来て、この魂を救済し、その母なる靈と結婚するのである。僧院の住持は神である：：その獨り子の力に依りて我等を救つて下さつた神様である。漁夫は僧である。グレゴリー僧正がその後お乗りになつたといふ舟は教會のことである。執事は懺悔聽取僧のことである。槍を折つたといふのは邪惡の生活を棄てること、即ち不正の生を殺すことである。岩とは悔恨である。

〔考證〕

この物語は所謂骨肉間の相姦罪を材料として、因果物語の一種を作り出したものであつて、エジプト、ギリ

シア等の神話に屢々見られる宿命思想の一形式である。亦赤兒を海に流すといふ仕組も古來東西の文學又は傳説に多く現はれてくる形式であつて、これも詮すれば因果物語の一つの形式である。亦魚類の腹中から鱗が現はれたり寶玉が出てくるといふ話も、既に『アラビヤ夜話』や『ペルシア物語』等に屢々出てくる事柄であつて、言はゞ東洋傳來の物とも見られるのである。之を要するにこの物語の構想は因果應報といふことが骨子を成してゐて、これに配するに漂流物語の傳説を以てしたものである。後年南歐の牧歌的文學や、沙翁物や、或はドイツの村落物語(特に宿命主義の文學等にこの種の構想が多分に流れこんでゐる。全體の組立ては東洋的であつて、たゞこれを基督教の宣傳の道具に用ひたに過ぎぬ。

## 八二、姦淫者に對する裁判

或る一人の武士は甚だ美しい城を持つてゐた。二羽の鶴がその城に巢を造つた。城の下に美しい泉があつた。鶴は其所へ来て水を浴びることにしてゐた。偶々牝鶴は雛を生んだ。牡鶴は彼等に餌を與へる爲に他へ巢から出て行つた。牡鶴の不在中に牝鶴は若い情夫を引き入れた。そして夫からその亂れた容子を見て惡事をさとられぬ爲にといふので、夫の還へらぬ先きにこの泉に降りて来て彼女の體



を洗ふことにしてゐた。

然るに武士は屢これを見て驚いてゐたので、終にその泉を塞いで牝鶴にこゝで體を洗つたり、水に浴つたりすることが出来ぬやうにして仕舞つた。この爲に牝鶴はその情夫と密會した後、體を洗ふこと無しにその巢に還へらなければならぬやうになつた。牝鶴は巢に戻つて來た。そして彼れはいろいろの證據から、彼れの妻が彼れの不在中に貞操を汚してゐたことを覺つたので、是所を飛び去つて仕舞つた。そして多くの鶴を伴つて來てこの姦淫の罪を犯したところの鶴に對して制裁を加へた後、武士の面前で終に殺して仕舞つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、牝鶴は基督で、牝鶴は基督の妻である。武士は悪魔である。泉は懺悔と悔恨の泉である。私等が若し最後の裁判の日に體を洗はぬならば、即ち後悔の念を抱かぬならば、基督は多くの天使と共に我等の所へ來て、我等に死を與へられるであらう。

### 八三、魂の臆病な番人

トレージャン帝治世の頃、帝は庭園といふものに對して多大の興味を持つてゐた。彼れは世に比類なき美しき庭園を造つて、其所に各種の樹木を植付けた後、一人の園丁を番人として其所に置いて、萬事ぬかりの無いやうに注意せよとその番人に命じたのであつた。然るに程もなく一頭の野猪がこの庭園に闖入し若い樹木を倒したり、花木を根こぎにしたりした。番人のジョナサンはこれを見付け出したので、其の野猪の左の耳を切り落した。野猪は大きな音をたて、逃げ去つた。然るに他の日に又この野猪が庭園に亂入して來て非常な害をなした。ジョナサンは再び野猪を捕へて今度はその右の耳を切り落した。然るにこれにもこりず、三度庭園を荒らした。園丁は野猪の餘りに横暴なのを見て非常に憤つて、今度は彼れの尾を切り落した。彼れはこのはづかしめを受けて、例の如く怖しい音をたて、逃げ去つた。然るに彼れは第四回目に又現はれて前回同様の損害を與へた。ジョナサンは今度はいよいよ憤りの度を加へた。彼れは槍を取出して來て即座に野猪を刺し殺して仕舞つた。そしてその死骸を直に王の臺所に送り王の食卓に供へしめた。

皇帝トレージャンは動物の心臓を食べることが特に好きであつた。然るにこの料理人はこの野猪の心



臓が不思議なほどに脂ぎつてゐて、如何にも美味さうに見えたから、彼れ自身が後になつてから食べるつもりで、皇帝の食卓にはこれを供へなかつた。故に皇帝は食事の時にこの動物の心臓はどうなつたかと訊ねた。従者は直にこのことを料理人に傳へた。料理人はその使者に言つた：「陛下に申上げて下さい。實はこの野猪に心臓らしいものも無かつたのであります。しかし、若し陛下が私の言葉をお疑ひになりますならば、その理由を私から委しく申上げる所存であります」。従者は料理人の言葉を皇帝に傳へた。皇帝は驚いて叫んだ：「何といふ不思議なことだらう、心臓の無い動物があるとは……しかし料理人がこの事實を證明するといふのだから、彼れからそれを直接聽いてみたい」。是に於て料理人は喚び出された。

料理人は皇帝に次の如く陳べた……

「陛下、何卒お聞き下さい。凡ての考へは心臓から先づ生じて來ます。故に如何なる思想も無い所には、如何なる心臓も無い譯であります。この野猪は先づ第一に庭園に入つて多くの損害を與へました。そこで園丁はこれを見出して、その右方の耳を切り取りました。若しこの際、野猪に心臓がありましたならば、これほど大切な物を切られたのだから、忘れようとしても忘れ得るものではない譯であります。然るに彼れはこれを全く忘れて仕舞つて再びその庭園に入つたのであります。故

に彼れには心臓は無いと申して差支がありません。次に彼れは右方の耳と尾を切り取られたのであるが故に、その事を十分記憶してゐるべきであつたと思ひますのに、少しも反省しなかつたやうに見えます。何故と申せば彼れは第四回目に亂入して終に殺されてをりますから、私は以上の如きさまざまの理由から考へてみて、この野猪に對する結論として、彼れに心臓が無いといふことを信じざるやうになりました」

皇帝はこれを聽いて大に満足し、且つ彼れの判斷に贊意を表した。

料理人はかくの如くにして巧みに危い所を免れた。

#### 〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は基督のことである。美しき庭園を好むといふことは、我等の主が多くの道徳を植付けられたところの信仰の念篤き人々を愛するといふことである。園丁とは僧侶のことである。野猪は俗的の事柄のみを考へてゐる人のことである。自ら罪を犯して、それが爲に罰せられる者は皆この徒である。左方の耳を切り取られたといふことは、愛してゐた者の死を表現してをる。同様に右



方の耳の切り取られたことは、息子又は娘の死を指差し、尾を切落されたことは、妻の死を現はしたものである。最後に死、即ちジヨナサンは罪人その者を刺し殺すことになつてゐる。心臓はこゝでは魂のことを指差す。魂はその理性を保存してゐる限りは決して罪を犯すものではない。

#### 八四、神の賜物

ボンペーの治下に一人の美にして優しい婦人が住んでゐた。彼女の家の近くにこれも美しく且つ上品な一武人が住んでゐた。彼れは常に彼女を訪づれて、彼れの切なる情を訴へてゐた。或日、彼れは彼女の掌の上に一羽の鷹を見た。彼れは大にこの鷹を褒めた。

彼れは言つた……「若し貴女が私を愛してをられるならば、その美しい鳥を私に下さいませんか」

彼女は答へた……「よろしいです。お贈り申しませう。しかし一つの約束が必要ですよ……それはこの鷹に餘りに御執心になつて、私のことをお忘れになつてはいけないといふことなんですよ……」

彼れは叫んだ……「貴女の僕しもべたる私が、どうしてそのやうな不義理なまねが出来ませうぞ……私はどんな事が起らうとも貴女を棄て、仕舞ふやうなことは誓つて致しません。何卒私を信じて下さい。この御親切の爲に私は一層貴女をお慕ひ申すことになります」

この誓約を得たので女は彼女の鷹を彼れに與へた。彼れは彼女に暇を告げて彼れ自身の城へ還つた。武士はこの鷹を掌中に入れてからといふものは、朝夕このことばかりを考へてゐて、彼女に約束したことは全く忘れて仕舞つた。たゞ彼女のことを少しづつ、思ひ出すのは、鷹に戯れてゐる時位のものであつた。そこで彼女は彼れに使者を送つた。しかし何の効果もなかつた。彼女は終に至急便を送つてこの手紙を讀んだら猶豫無しに來て下さい。但し鷹を携へてと書き加へたのである。彼れは承諾した。女は鄭重に彼れに會釋した後、鷹に手を觸れさせてくれと請うた。彼女は彼れの許しを得て鷹を抱いた。そして抱いたかと思ふ間もなく鷹の首と胴とが離れて仕舞つた。

武士は無念の齒を噛み鳴らして叫んだ……「何を、何をしたんです。とんでもないことを……」

女は答へた……「まあそのやうにお怒りにならなくてもいいでせう。私の行つたことを却つてお悦びにならなくてはいけませんよ。この鳥が居つたればこそ貴郎は私の所へお出でにならなかつたので



せう。かういふ風にこれを殺してさへしまへば、貴郎と私が以前のやうに面白いことが出来るといふもの……」武士はこの理窟を至極道理のあること、思つた。そして又もや怠りなく彼女を訪づれるやうになつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、王は天の父、女は基督と結んだところの我等人類の性質そのものである。武士は基督教信者、又鷹は假りの榮華を現はしたものである。

## 八五、お祈りの妙音

ティベリアス治世の頃彼れは音楽を好むこと實に甚しかつた。或る日狩獵に出てるたが、立琴の音が餘りに美しく聞こえて來たので、馬首をその音のひゞいて來る方向に向けて走らせた。其所に走りついて見ると一人の貧しい男が手に立琴を持つて、地上に坐してゐた。美しい音楽の音が是所からひ

びいて來たのであつた。皇帝はこの立琴の美しい音に我れを忘れて聴きほれてゐた。

皇帝は問うた……「私の友よ、貴殿の立琴がどうしてそのやうに美妙の音を出すのだから、私に教へてくれませんか」

音楽家は答へた……「陛下、私は三十年以上もこの川の岸に坐つてをりました。ところがその功空しからずで、神様が私に一つの妙技をお授けになりました。それで私がこの立琴の絲に手を觸れますとその妙音が自由自在に出で來ますので、此の川の魚類はその音に魅せられてひとりでに私の手の中へ入つて來ます。私はそれを持ち還つて妻子の食物とするといふ有様でありました。然るに不幸にもこの數日前より他國から口笛吹きの名人が參りましたので、魚類は私を棄て、その男の方へ行くやうになりました。さういふ譯でありますから、陛下のやうな権力のある、又この國の主權者である御仁の御威光を藉りて、この惡むべき口笛吹きを何とか制裁して見度いと思ふのであります」

王は言つた……「私の友よ、私はたゞ一つの事だけで貴殿のお力になることが出來ます。しかし、それだけで十分であらうと思ふ。私は只今私の獵用の袋の中に黄金の鉤を一箇持つてゐるから、これを貴殿に與へませう。貴殿はこの鉤を釣竿の頭に結びつけて、そして立琴を弾むのですよ。立琴の



音は魚をこゝへ誘へこみます。いよく魚がその近くへ寄つて來たならば、この鉤を利用して地上へ引上げるのです。貴殿が若し私の忠告したことを行ふならば、口笛吹きの名士といへども大に面喰つて是所から去るに相違ありません」

貧しき男は皇帝の命令の如くこれを行つた。それを行つてみると魚類が口笛吹きの立つてゐる場所に近寄りぬ先きに、黄金の鉤が是等の魚類を悉く地上に引上げて仕舞ふといふ有様であつた。口笛吹きはこれでは到底彼れに勝つ見込みがないと思つたから大に失望して是所を去つた。

### 〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は神であり、皇帝を悦ばせた音楽はお祈りのことである。川は世界のこと、魚は罪人のことである。貧しき人とは説教師のこと、又その立琴は聖書のことである。口笛吹きの名士とは悪魔である。黄金の鉤は神の御恵みのことである。

## 八六、罪ある者神の恵みに浴す

或る皇帝は一つの法令を設けて、若し如何なる婦人でも姦淫の罪を犯したならば、一生涯獄に投ずべしといふことに定めて置いた。偶々或る一人の武士は一貴婦人と結婚し、大にその婦人を愛してゐた。然るに彼れは或る急用の爲に他國に往かなくてはならぬこととなつた。その不在中に彼れの妻は不義の行ひがあつて終に前記の國法に處せられた。彼女は地下の獄中に投ぜられた。そして入牢中に可愛い男兒を生んだ。この兒は成長した。そして彼れを見た凡ての人々から愛されてゐた。しかし母親は嘆きと涙の中に彼女の時を費してゐて、決して如何なる娛樂をも求めなかつた。

この男の子は彼れの母親が常に悲しみにばかり沈んでゐるのを見て「母上は何故そのやうに悲しんでばかりゐるのですか」と問うた。母親は答へた：「私の子よ、私には泣かなくてはならぬ譯があるのだよ。先づ人間の交際は私等二人の全く知らない事柄であつて、私達二人の頭の上の方で行はれてゐる事柄なのだ。私等二人の頭の上の世界には太陽が美しくかがやいてゐる。しかし、私達だけはこの眞暗な場所に住んでゐて、光りを見ることが出来ぬのだ。彼女の子は言つた：「私には是等の事柄は皆分りません。私は牢の中で生れたのですから。でも私は飲食物さへ十分に與へて貰へば、悦



んで是所に暮してをります。」

母と子がこのやうなことを話してゐた時、皇帝とその護衛の人々は牢の前を通過した。彼等の一人はこの兩人を釋放しては如何ですかと皇帝に願つてみた。皇帝は親子の不幸に同情し、且つ彼れの從者等の懇願したことを重く考へた末、兩人を釋放し、且つ將來の罰をも許してくれた。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は我等の天の御父である。武士の妻は人間の魂、又その夫たる武士は基督である。牢獄は地獄である。姦夫姦婦の間に生れた子は肉慾に耽つてゐる俗世界の権力家富豪家のことである。皇帝にお許しを願つてくれた仲裁人は親切な僧侶のことである。

## 八七、人類救済の爲に死したる基督

或る皇帝は激戦に従事してゐた時既に一命が危くなつてゐた。一人の武士はこれを見て皇帝とその

敵との間に身を投じて、やつとのことで皇帝の一命を救ひ出した。しかし、武士はこれが爲に重傷を負つた。そして永い間病床に臥してゐて、幾度も生死の間を往復した後、辛くも命拾ひをした。但しその戦争の時に受けた疵痕は一生涯治ることがなかつた。そしてそれが却つて彼れの勇戦苦闘の武勇の歴史を語る名譽の記號となつたのである。

偶々この武士は財産を横領されようとしたことがあつた。彼れは皇帝の許に走つて、何卒この事件を首尾よく解決するやうに御配慮を仰ぎますと願ひ出た。然るに皇帝は「私の親切な友よ、目下私自身でお前の事に心を配つてゐることは出来ぬ。しかし、この事件を裁判させる爲に一人の判事を指定するから、その役人から萬事判断して貰ふがよい」と答へた。そこで武士は「陛下は何故そのやうな冷たいことを仰せられますか」と叫んだ。そして彼れは直に彼れの衣を脱いで、戦争の時に蒙つた疵痕を彼れに見せて言つた……「陛下、これをお忘れになりましたか。これは陛下の爲に私が蒙つた疵痕でありますぞ。これを御覽に供してもなほ私の爲に便宜を計つて下さらぬのですか……私にこれだけの損害をかけて置きながら、今私のお願ひ申した事件を裁判官だけの手に委ねて仕舞ふとは不公平も甚しいと申すもの……。」

皇帝はこれを聽いて直に答へた。



「よし、よし、私の友よ、よく分つた。お前の言うことが正しい。私が一命が危かつた時に、私を救つてくれたのはお前であつた。そしてお前以外の誰でもなかつたのだ」  
さう言うて皇帝は自ら法官席に着いて、武士の利益になるやうに判決を下した。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、この武士は我等の爲に多くの疵を受けられた基督のことである。故に我等は我等の感謝の念を示す爲に決して他人を代表者として用ひるべき筈のものでは無い。我等自身が最も眞面目な態度をもつて報恩の實を擧げること努力すべき譯のものである。

## 〔考證〕

この物語はかのローマの歴史上に有名になつてゐるところのオーガスタス、シーザーの逸事とアクシヤムの戦争に勇戦したころのローマの軍人との逸話的物語の中に見られる事柄である。

## 八八、悪魔の奸計

或る國王は如何に彼れの全力を擧げてみても到底彼れの敵を征服することが出来なかつたので、終に次のやうな奸計を用ひることにした。

彼れは先づ逃亡をよそほつて彼れの城を棄て去つた。そしてその城も、その糧食も凡てはこれを敵の手に渡したのである。彼れは城を逃げ出す時、或る毒草の種子を混じた酒樽を澤山城内に備へて來た。これを飲めば如何なる人間でも直に熟睡して仕舞ふのであつた。彼れは彼れの敵兵は空腹で且つ渴してゐることを承知してゐた。故に彼れは彼等がこのやうな上等な長所を見出して、その悦びの餘りした、か飲酒して、半死半生の状態となつて睡つて仕舞ふだらうと思つてゐた。

奸計は思ふつばに入つた。敵兵はした、か飲んで熟睡して仕舞つた。國王は直に城内に攻め入つて敵兵を悉く殺して仕舞つた。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、この國王は悪魔である。悪魔の残した物は警戒しなくてはならぬ。



## 八九、遺産三分

或る武士は三人の男の子を持つてゐた。臨終の時彼れは三子を病床に招いて遺産分配をやつた。先づ長男には財産を、次男には寶物を、三男には非常に高價の指環を與へた。この指環は他の二人の兄弟に與へた凡ての物よりは貴い品物であつた。

しかし、指環を貰つたのは末子だけでは無つた。長男も次男も全くこれと同じやうな指環を貰つたのである。それ故、父の死後長男は先づ言つた。

「私は父上から高價な指環を貰つた」

次男は言つた。

「いや、そんな譯は無い。高價の指環を貰つたのは私のことだ」

三男は言つた。

「いや、そんな譯は無い。長兄のお貰ひになつたのは不動産、次兄の、は寶物、私の、は最上等の

指環」

長兄は言つた。

「それでは三人の指環をお互に出して見て、何れが最上等の品物であるか試験してみようではないか」

三人は意見が一致した。先づ病人を集めて是等の指環の功德を試すことにした。試験の結果、長男と次男の指環は何等の效驗もなかつたが、三男の指環は凡ての病人の病を治ほした。

〔解説〕

可憐なる者よ、この武士は神のことである。又三子とは猶太人、回々教徒、基督教信者等を指差したものである。三つの指環の中で最上等の品と言はれた物は信仰その物のことに外ならぬ。そしてこの眞實の信仰は三人の中の若き者即ち基督教徒のみの財産となつてゐるのである。



## 〔考證〕

この物語の材料は所謂遺産分配物語の共通的材料であつて、古代から近世に至る迄の南歐及英吉利文學に最も多く見られる形式である。特に貴重な指環を遺産とするといふ話は古來最も多く見られる例である。ポッカシヨの「十日物語」に出てくる話はその最も古いものゝ一例である。

## 九〇、思ふまゝ

昔、或る國王は一つの法律を設けて、兄に生れた者は遺産を分つべき義務があり、弟に生れた者は思ふまゝに選舉する権利があることを明かにした。この理由は分配者は選擇者に比して思慮が深くなくしてはならぬ。従つて弟よりも賢明であるべき筈の兄が、分配者となるのが當然だといふところにこの法律の精神があつた。然るにこゝに亦他の法律が一つ設けられた。それは奴隸の子も自由民の子も、遺産として父の不動産を貰ふ権利にかけては何等の差別が無いといふ法律であつた。

偶々こゝに二人の兄弟があつて、その一人は下婢から生れた者、他は自由民の母から生れた者であ

つて、この二人の兄弟の間に財産が分配されることになつたのである。兄は法令の定むる所に依りてこの財産を分配する役目をなした。即ち彼れは一方に全財産を置き、他方に彼れの弟の母親を坐はらせた。弟はこれを見て己が生みの親を何物よりもより多く愛するのが子としての義務であると考え、且つ彼れの兄が必ずや彼れに對して、親切であり、又寛大であると思つたので、己が生みの母親を先づ選擇することにした。然るに彼れの想像は全く裏切られて仕舞つた。と云ふのは兄は彼れに對して財産を少しも分配してくれなかつたからである。

弟は大に憤慨して早速裁判官にこの事を訴へ出で、彼れの兄が財産を一文も分配してくれぬのは不都合であると不平を鳴らしたのである。然るに兄は又兄の言ひ分として、さう言ふ不平は彼れの知つたことで無いと冷しい顔をしてゐた。兄の理窟には理由がある：：何故かと言ふならば苟も自分自身で選擇した以上は、その掌中に入れた物を自分自身の物とするのが當然のことであつて、分配した者がこれを得ると言ふ理由が無いからだ。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、この二人の男子は基督と人間である。兄即ち基督は遺産を分配した。母はこの世界



のことである。弟はこの世界を選択して己れの所有物とした。そして其の代りに天國を失つて仕舞つたのである。

## 九一、懶惰

皇帝プリニーは三人の王子を持つてゐて非常にこれを愛してゐた。彼れは彼れの王國を三人に分配しようと思つて、三人を悉く彼れの面前に呼び寄せてかう言つた。

「私が花んだ後にこの國を治める者は、お前達の中の最も懶惰者に限るのだ」

長男は言つた。

「それではこの王國は私の物とならなくてはなりません。その譯を申せば、私は大の懶惰者なまけものでありまして、嘗て爐邊で暖をとつてをりました時、この脛を火から退けるのを小面倒に思つたばかりに、とんでもない大火傷をしたほどの者でありますから」

次男は言つた。

「この國を貰ふのは私より外に誰れもありません。私の懶惰振なまけぶりときては實に徹底したものであります。私は私の脛を繩にかけられて今にも締め殺されようとしてゐる時に、僥倖にも私の掌中に一口の劍があつたとしても、自らその劍を振つてその繩を切断する手数を煩はしいと思ふほどの人物でありますから」

三男は言つた。

「いや、いや、二人の兄さんの懶惰振なまけぶりはまだく徹底致してをりませんから、この財産は皆私の物となるのが當然です。私が嘗て私の床の上に横つてゐた時上の方から水が落ちて来て私の目にあたりました。その水の質が悪いので私の兩眼がつぶれる虞がありました。それでも私は私の頭を右にも左にも向けることも出来ず、亦強いて向けようとしなかつた位です」

皇帝はこれを聞き終つてから、三男の懶惰振が最も徹底してゐるものと考へたので、彼れにその王國を與へることにした。



## 〔解説〕

可憐なる者よ、この國王は悪魔である。三人の兄弟は墮落者の異つた種類である。

## 九二、我等を救はんが爲に死せし基督

或る國王はコルネリアと呼ぶ王妃を持つてゐた。或日のこと、蛇が二匹王城の壁の下から現れた。一は雄で、他は雌であつた。國王はこれを聽くや賢者等呼び集めてこの出來事の意味を問うた。賢者等は皆口を揃へてこれは男か女の死を豫言するものであると明言した。そして亦彼等はかういふこと迄も公言したのである：「若し雄蛇が殺されるならば男が死ぬことになり、その反對に雌蛇が殺されるならば女、特に妻たる者が死ぬと。」

王は言うた。

「では雄蛇を殺して雌蛇を生かして置けよ。男子は己が一命を棄て、も、己が妻を生存させようとする者である」

王はこの理由を説明した。

「私の妻さへ生存してゐてくれたならば、私の王位を相續し得る多くの王子を生むから、私は安心して成佛することが出来る。しかし、彼女が死んで仕舞へばこの國は後繼者を缺くことになる」

## 〔解説〕

可憐なる者よ、この國王は基督である。彼れの妻は人類その物である。人類の爲に一命を棄てた者は基督である。

## 九三、修業より還りたる二人の兄弟

或る権力のあつた國王が彼れの二人の王子に學問をさせる爲に他國へ遣はした。そして二人の者が將來勉強して獨立の生活が出来得るやうにと希望してゐた。然るに父は暫くたつてから彼等に書状を送つて、一日も速く歸國せよと命じた。兄弟は命の如く歸國した。



彼等の中の一人は父の命令を得て大に悦んで歸宅した。そして父も亦悦んで彼れを迎へた。加之、彼れは父から澤山の財産を與へられたのである。然るに他の兄弟の方は父のこの命令を大に迷惑に感じた。それが爲にいよく歸國した時に、その母親が入口迄走つて來て、彼れに接吻しようとする、彼れは親不孝にも母親の唇を噛み切つたのである。次に彼れの妹も母同様の目にあつてその鼻を噛み切られて仕舞つた。彼れの兄は彼れを迎へて抱擁しようとしたところが、これも兩眼を引抜かれて仕舞つた。この時父は是所へ入つて來た。そして彼れの頭髮を捉へて、活きながら彼れの皮を剥いで仕舞つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、富める君主とは神のことである。二子は魂と肉體である。肉體はその本國に還へることを好まぬものである。妹と二人の兄弟は蠶と蛇である……鼻や目や其他の物を食ふから……

九四、汚された魂の清めらるゝ道

或る國王は外國へ旅行しようといふ希望を持つてゐたが、彼れにはたつた獨りの太陽よりも美しい娘があつた爲に、己が旅行の不在中に安心してこれを委ねてゆく人の無いのを遺憾としてゐた。しかし、いろいろ考へた末、彼れが日頃から最も信任してゐたところの彼れの祕書官に彼女を委ねてゆくことに決心した。彼れは祕書官にいろいろの注意を與へた末、特にその國に湧き出で、る或る不思議な泉の水を、彼女に飲ませてくれぬやうにと固く言ひ残したのである。その譯は、この泉の水はその香りが實に美しいが、しかし、これを一口でも飲んだが最後、全身に瘡が生ずるといふ、それは實に怖い水であつたからである。

祕書官は王女を委ねられた以上はそのやうな危険のないやうに注意し、國王のお還りになつたその時に、丁度御出發當時のそのまゝの美しい姫の御姿を御目にかけてようと思つてゐたのである。故に彼れは前途頗る不安な責任を感じると共に、萬一不幸にして王女が間違つたことをしでかしたならば、彼れ自身の役目を失ふのみならず、再び彼れの主君に顔を合はせることが出来ぬとさへ思つたのである。

彼れは暫くの間は一生懸命になつて王女の一身を衛つてゐた。然るに王女はちよつとした隙を見出して、終にこの怖ろしい泉に近寄つたのである。そして密にこの水を飲んだのである。結果が現れて



来た。彼女は最も忌むべき病に冒されて仕舞つた。祕書官はこれを知つて身を斬られるやうな悲痛の念に打たれた。彼れは直に彼女を淋しい地に移した。其處には一人の隠者の僧が住んでゐた。祕書官はその隠者の庵を訪づれて、この事件を委しく物語つた末、どうにもして彼女の病氣を治ほしてくれと嘆願したのである。

隠者は言つた。

「私の教へてやる山に往くのですよ。其處へ行けば石と笞があります。その笞を拾つて石をした、か打つのです。さうすると石から濕氣が出てきます。その濕氣を姫の患部に塗るのです。直ぐにもとの通り美しい體になります」

祕書官は隠者の命を嚴格に守つた。王女の病は恢復して、もとの如く美しい容貌となつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この王は基督である。王女は魂である……そしてそれは元來は太陽よりも美しいものであつた。又泉はこの世界のことである。そしてこれを汚すものは罪である。隠者とは教會のこと

である筈は悔恨、石上の濕氣は悔恨者の涙である。

九五、天國の遺産を恢復したる基督

ローマの年代記を讀んでみると、マキセンティアスと呼ぶ暴君が、ローマ人の掌中からその父祖傳來の領土を悉く奪つて仕舞うとしたことが書いてある。ローマの人々はこの暴君の残忍な行爲に怖れを抱いて、ブリテンの國王コンスタンティンの許に難を避けた。ブリテン國の王はこの亂暴な行爲を見て、終にその移住者に促されて彼等の爲に復讐の軍を起すことに決心した。コンスタンティンはかくの如くにしてローマ移民の懇望を容れて自ら馬に跨つて戦線に立つた。そして首尾よく敵兵を征服し、是等の避難民にその財産を取戻してやつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この暴君は悪魔である。コンスタンティンはかの不運な人々が助を求めに走つてゆ



くところの神その者である。

## 九六、現世は赦免と恩典の場所

アレキサンダー王は彼れの廣間に蠟燭を點じ、且つ國內に使者を送つて次の命令を傳へしめた。  
 「若し現在國王から罰を受けてゐる者があるならば、遠慮無しに國王の面前に名乗り出るがよい。蠟燭の火が消えぬ先きに来るならば、如何なる罰でも赦して貰ふことが出来る。しかし、この状態にある者にして、然かも蠟燭の火の消えぬ先きに来ぬ者があれば、さういふ不心得の者は辱しい死刑を受ける」

國民の中でこの布告を聽いて直に國王の面前に現はれて、その恩典に浴した者が多つた。國王は勿論是等の名乗り出た者に對しては親切に取扱つたのである。然るにこれを怠つた者も多つた。蠟燭の火が消えるや否や是等の徒は捕へられた。そして悉く死刑に處せられた。

### 〔解説〕

可憐なる者よ、アレキサンダーは基督である。燃えてゐる蠟燭は現世である。使者は説教師である。

## 九七、死

ローマの年代記を讀んでみると、この都が造られてから二十二年目頃、政廳の大通りに大理石の記念柱が建てられ、その絶頂にジュリアス・シーザーの像が置かれたといふことが書いてある。ローマの人々はこの像の頭にその名を刻んだ。これはシーザーその人の爲に建てられたからである。このシーザーといふ人物はその死する時に、又彼れが死ぬるついその前に、三つの前徴を得たのである。例へばこの大事件の生ずる百日前に其所の像が電光に打たれた。そしてその像に刻んであつた彼れの名の最初の文字が、これが爲に消されて仕舞つたのである。次に彼れが死ぬる前夜、その寢室の窓が恐しい音を出して開らいたので、彼れは彼れの家が倒れるのではないかと思つたほどであつた。第三回目の



前徴は彼れが死んだその日に表はれた。即ち彼れが政廳へ出掛けようとしてゐると、彼れの危険を告ぐる書狀が彼れの掌中に入つたのである。若し彼れが是等の書狀を讀んだならば殺されなくてもよかつたのだが。

〔解説〕

可憐なる者よ、神は人類に對してかくの如くである。我等は神から多くの警告を與へられてゐるのであるが、それに對して何等の注意も拂つてをらぬから、永久に我等は殺されてゐるのである。

九八、機會のある間に神意を和げよ

ローマ人は昔から古い習慣を守つてゐて、彼等が敵の城や或は敵の都を包圍してゐる間に、或る一定の規則の下に必ず蠟燭をともして置いた。そしてこの蠟燭の火が燃えてゐる間は、如何なる腹黒い敵でも、若し降参を申出して來るならばこれを認めてやることになつてゐた。但し蠟燭の火が消えて

仕舞へばその敵兵に對して嚴罰を與へることになつてゐた。随つてさういふ場合になれば、何人がどんな犠牲を捧げたからといつて、到底その罪を贖ふことが出来るものではなかつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、神が罪人を遇する態度はかくの如きものである。魂は如何に惡徳の爲に包圍されてゐても、生命の光明が燃えてゐる限りは、平和を得る機會は與へられてゐる譯である。

九九、蛇と墓との争ひ

シーザーの治世の頃、或る一人の身分の高い、そして勇敢な武士が偶々或る森を通過してゐると、蛇と墓とが争つてゐるのを目撃した。喧嘩の結果墓が勝つた。武士はこれを見て蛇に援助を與へた。墓は氣の毒にも重い傷を與へられて辛くも逃げのびて一命が助つた。しかし勝利者も亦墓の毒に中つた。武士は家に戻つてから長い間この墓の毒に中つて病床に臥してゐた。終に彼れは遺言書までも書



いて死ぬ覺悟をしてゐた。

武士はいよいよ助かる見込みが無くなつて、爐邊で力なく横つてゐると、豫て彼れから一命を助けられてゐた蛇がその場所へ入つて來た。武士はこれを見るやこの蛇は嘗つて墓と争つてゐた時、自分から助太刀を與へてもらつたものであり、又それが爲に自分がこのやうに不治の病ひにかゝつてゐるのだと思ひ起したのである。

武士は言つた。

「その蛇を害してはならぬ。私を害するやうなことはないのだから……」

蛇は武士の近くへ寄つて來た。そしてその傷口へ己が口を當て、毒を吸つた。そして口中が毒血で一つばいになると戸口へ出で行つてこれを吐き出すのであつた。それから再び傷口を吸つて前回と同様のことをした。かういふやうな事をしてゐる間に終に武士の傷口から毒が消えて仕舞つた。

武士は蛇に牛乳を與へるやうにと従者に命じた。牛乳は與へられた。蛇は直に牛乳を飲んだ。この事が終るや否や、嘗つて武士に傷を與へたところの墓が是所へ入つて來た。そして蛇がこのやうに武士の傷口を治ほしたことに對して復讐をやるつもりで、又もや蛇と喧嘩を初めた。武士はこれを見て従者等にかう言つた。

「皆の者よ、これは例の墓だよ……私が蛇を助けようと思つて傷を與へたことのあるあの墓だよ……そして私は今その爲にこの病氣を與へられてゐるのだ……若しこの墓が勝たうものなら私を襲うてくるに相違ない。だからお前達はお前達の主人たる私を思つてくれるならば、直ぐにこの墓を殺してくれ」

従者等は主人の命を奉じて劍や棒を振りかざして墓を打つた。その間に蛇は恰も己が保護者たる武士に感謝の意を表するが如く、その足にからみついた。そしてこの部屋から去つて仕舞つた。武士は全く彼れの健康を恢復した。

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は神であり、又この武士は基督のことである。墓は惡魔で、蛇は人間のこゝとである。

〔考證〕



この種の物語は所謂『イソップ』式の物には非常に多い。蛇が鼯鼠と喧嘩をした時、鼯鼠がその争ひの初まる前に芸香を食べたいふと話や、或は蛇が蜘蛛と争つて蜘蛛の毒に中つて殺されたといふ話等は何れもこれと同種類の物であつて、その最も古い例はプリニーの古書に見えてゐる。(Pliny: Nat. Hist. x. 44, xx. 13.)

## 100、孝行息子

ダイオクレシヤンが王位にあつた時、國民に新たに法令を發布して、若し今日以後姦淫の罪を犯す者があつたならば、直に死刑に處すべしと教へた。當時或る武士が一人の乙女と結婚して男の兒を設けた。この男兒が成長するに及んで多くの人々から可愛がられた。その後程なく彼れの父親は戦争に赴き、雄々しく勇戦して右の腕を失つた。

夫の出陣中に彼れの妻は貞操を破つた。そして夫の歸つた後、この醜行が發覺した、めに、當然彼女は法律の定むる所に従つて死刑に處せらるべき筈であつた。そこで夫は彼れの息子を呼んでかう言うたのである。

「可愛き我が子よ、お前の母親は姦淫罪を犯したから、國法に依りて殺されなくてはならぬ。しかし私はこのやうに右腕を失つて仕舞つたから彼女を斬ることが出来ぬ。因つてお前は私の代りになつて母親を殺さなくてはならぬ」

息子は答へた。

「國法は孝行の道を守るべきことを私達に命じてをります。それ故若し私がこの法律に背いて私の母親を殺すならば、母上の罪に對する非難を減じて仕舞ふことになります。ですから私は父上の命に従ふことは出来ません」

彼女はかういふ譯で彼女の息子の誠實の爲に死から免れた。

### 〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は神である。武士は基督、その妻は魂である。若し魂が迷ふならば、神の掟はこれを死刑に處する譯である。基督は惡魔と戦つて一つの腕、即ち肉體を與へられた者の加へる一切の苛酷味を失ふものである。



## 101、現世の災厄

ガンターと呼べる男が永久につゞく歡樂を欲求してゐた。或る朝彼れは起き上つて旅行に出立した。そして最近國王の死んだ一つの王國に辿りついた。この國の貴族等は、彼れが勇敢な人物であると思つたので直に彼れを選んで國王の位につけた。彼れはこれが爲に國民の全部から大に重んぜられた。然るに夜になつて彼れの從者が彼れをその寢室に案内した時、彼れは臥床の枕邊に一頭の兇猛な獅子を見たのみならず、その足の所に龍、右側に大きな熊、左側に蛇と墓を見たのである。

ガンターは問うた。

「これは何であるか。かういふ畜類と一緒になつて睡ることは御免だぞ」

答はかうであつた。

「陛下、それは御尤ではありますが、この國の歴代の帝王は皆是等の畜類と一緒に眠つて食はれて仕舞つたのであります」

ガンターは言うた。

「さうかそれもよからう。しかし、自分は臥床や畜類に對して楽しみをもつてゐる者でないから、お前等の王様にはなれぬ」

さう言つて彼れはこの國を去つて他の國へ往つた。ところがその國でも前者と同様に王位に即かせられた。彼れは夜その寢室に入ると鋭利な剃刀を一つばいに投げこんである美しい臥床を見た。

彼れは叫んだ。

「何だこれはこのやうな臥床で眠れといふのか」

從者は答へた。

「陛下左様でござります。我が國の皇帝は皆この臥床で眠つて、皆こゝで崩御されました」

ガンターは言うた。

「成程、何を見ても美しい物ばかりだ。特にこの臥床は非常に美しい物だ。しかし、自分はさうい



ふ美しい物を見た爲に却つてお前等の王様となることが嫌になつてきた」

翌朝彼れは再び是所を去つて、三日間たゞ一人旅行した。途中で彼れは一人の老人が泉を見下して坐してゐるのを見た。その老人は手に棒を持つてゐた。そしてこの旅行者が近寄つて來た時次のやうに問うたのである。

「私の親しい友ガンターよ、今何所から來たのか」

ガンターは答へた。

「外國から參りました」

「では何所へ往かうとするのか」

「三つの見出し得ない物を見出す爲に一つの國から他の國へと」

「三つの見出し得ない物とは何か」

ガンターは言つた。

「第一に無盡藏の富、第二に悲哀無き歡樂、第三に闇影無き光明」

老人は言つた。

「この棒をお前に與へるからこれを持つてさつさと行け。お前の行手に一つの高い山がある。その麓に六段の梯子がある。それを登つてゆくのだ。六段目に着けばそれがその山の頂上だ。頂上に大きな宮殿があるから、その門を三度吐くのだ。門番は何者だと問ふ。その時この棒を門番に見せてかう言ふのだ、この棒の持主は私を是所へ入れることをお前に命令する……と。いよく其所へ入れて貰へばお前の求めてゐる三つの物が其所にある」

ガンターは老人の言葉通りに行つた。門番は棒を見て彼れを門内に導いた。彼れは彼れの搜索してゐた物を亦それ以外の物をも是所で見出した。そして彼れは彼れの晩年を是所で送つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、永遠の生命を求めてゐる善良な基督教徒は皆ガンターと同様の人々である。第一の臥床はさまざまの悪徳を伴つてゐる人間生活そのものである。かゝる臥床の上では決して休むもので



ない。第二の臥床は苛責に満ちた地獄である。かゝる臥床は避けよ。悔恨の棒を手にして信心の梯子を登つて天の宮殿に入れよ……その門番は神聖なる善その物なり。

## 101、姦婦の罪惡悉く靈鏡に映ず

皇帝タイタスの代に或る一人の高尙にして且つ信仰心の堅い武士があつた。彼れの妻は非常な美人であつたが、貞操の念が薄かつた爲に終に墮落して仕舞つた。そしていつまでたつてもその不品行を改めることが無つた。武士はこれを見て大に悲觀して仕舞つた。彼れはこれが爲に靈地參詣にと決意した。

彼れはいよく決心したので、そのことを妻に告げた。

「私はこれから靈地に行くつもりだ。留守中のことは何事もお前の思慮に任せる。」

夫が出立するのを待ちかねて妻は豫てから愛してゐたところの或る一人の妖術師を呼びに遣はした

この妖術師は降神の術に巧みな男であつた。彼れは直にその使者と共に彼女の家に來て彼女と同棲した。彼等は寢てゐた時、女は言つた。

「若し貴郎が私にたゞ一つの事柄をなして下さるならば、私は貴郎の妻となりますが」

彼れは答へた。

「貴女を満足させる事柄で、私が行ふことを欲しないやうな物が何所にありますか」

「私の夫は靈地へ参りました。夫は私を餘り愛してをりません。若し貴郎の妖術で私の夫を殺して下さることが出来るならば、私の現在持つてをる物は皆貴郎の物となりますが」

妖術師は言つた。

「萬事承知致しました……併し貴女が私と結婚するといふ條件つきでなければお斷り致します」

女は結婚の誓約をなした。そこで妖術師は武士の容貌に倣ねて、それに武士の名を銘した一つの像を造り上げたのである。そして彼れはこの像を彼れの前面の壁に飾りつけた。



かゝる間に武士はローマに着いた。その時一人の賢者が途中で彼れに遇つた。そしてその賢者がこの武士の顔を凝視した後、かう言つた：「私の友よ、私は貴殿に一つの秘密をお告げ申しませう」

「左様ですか、先生、それは又如何なる秘密事で？」

「貴殿は私の助言をお用ひにならぬと今日の中に死んで仕舞ひますぞ。貴殿の妻女は非常な淫亂者であります。貴殿を殺さうと企て、をります」

武士は彼れの妻のことをこのやうに上手に言ひあてられたので、この男を全く信用して仕舞つた。

武士は言つた。

「先生何卒私の一命を助けて下さい。お禮は澤山致しますから」

賢者は答へた。

「承知致しました。しかし、私の申す通りに行つて下さらなくてはいけませんぞ」

武士は何事でも賢者の言葉通りに實行することを約した。先生と呼ばれた人は武士を風呂場に導いた。そして彼れに衣類を脱がせた後、風呂に入れと命じた。それから彼れの手に一つの研ぎたてた明鏡を授けて「さあ、これを氣をつけて見てゐるんですよ、不思議な物が見えますから……」と言つた。武士は言はれるまゝになした。その間中、先生は彼れと問答するのであつた。

彼れは問うた……「何を見ますか」

武士は答へた……「私の家に或る一人の學者らしい者がゐて、その男が私に善く似た蠟人形を持ち出して來て壁にくっつけました」

賢者は再び問うた……「もう一度鏡を御覽んよ、今何が映りましたか」

「その男は今弓を取上げてをります、あ、今それに鋭い箭をつけました。今蠟人形に狙をつけてをります……」

「貴殿が生命が大切であるなら、箭がその的に向つて飛んで來るのを見たら直ぐ風呂の中へ飛び込



むんですよ、そして私がもうよろしいと言ふ迄もぐつてゐるんですよ」

それ故、箭が弦を離れるや否や武士は彼れの全身を水中に没した。箭が落ちて仕舞ふのを俟つて賢者は「さあ、もうよろしいよ、頭を出すんだよ、鏡の中を御覽、何が見えますか」と言つた。

武士は答へた……「箭は像に的中しなかつたです。像の側につき立つてをります。學者風の男は大に狼狽してゐる様です」

賢者は言つた……「もう一回鏡を御覽、その男は何をしてをりますか」

「武士は答へた……「だん／＼像に近寄つて來ました。又々箭に弦をつけて、あ、又射出すつもりと見える……」

「生命が大事であるなら前の通りにするんですよ」

武士は箭の飛んで來るのを俟つて全身を水中に歿すること前回の如くであつた。そしてその後、賢者の命令の下るのを俟つて再び鏡を見た。

「今あの男は大に悲しんでゐるところです。私の妻に何か言つてをります……あ、分りました……かう言つてをりますよ。三度目にこの像を射落さなければ私の一命が無い……と……やあ、だんだん近づいて來ましたぞ、今度こそは射損じることありますまいよ……」

賢者は言つた……「萬事ぬかりなくやつて下さい。弓が曲つたら直ぐ貴殿の全身を水に没して仕舞ふのですよ……前と同様に……」

武士は張りつめた氣分でこれを見てゐた。そして適當と考へた時直に水につかつたのである。

「もうよろしいから直ぐ頭をお出しよ。鏡を御覽よ」

武士は命の如くなした。そして笑ひ出した。



賢者は言つた……「友よ、何が面白いのか」

武士は答へた……「でも先生、面白いではありませんか、あの男は像を射損じましたので、その箭が逆に飛んで来て彼れ自身の下腹に中つて、彼れを殺して仕舞つたではありませんか。私の妻は私の臥床の下に穴を掘つて其所へ情夫の死骸を埋めました……」

「もう、よろしいから着物を纏うて神様にお祈りなさいよ」

武士は一命の助かつたことに對して衷心からお禮を述べた。それから靈地への巡禮を滞り無く終つて彼れの歸路についた。彼れの妻は非常に悦ばしさうな様子をして彼れを迎へた。彼れは數日間何事も知らなかつたといふ風に伴つてゐた。そして、それから妻の兩親を呼び出してかう言つた。

「今日お呼び出し申した譯は別事でもありませんが、實はこれなる女……即ち貴殿御夫婦の娘であつて、然かも私の妻であるこの女が、情夫をつくつたのみならず、もつと悪いことには私を殺害しようときへ試みたのでありますから、その事實をお話し申し度いのでわざわざ來ていたゞいたのであります」

彼れの妻は怒聲を張り上げてその無實の罪を訴へた。そこで武士はこの事件の顛末を物語つた後、更に付け加へて言ふには「若この事實を疑ふならば、その男の死骸の埋めてある場所を見せてやらう」と言ひ出した。彼れは彼等を寢室に案内して、その死骸の埋めてある場所を掘り出した。死骸が現はれた。裁判官は呼ばれた。妻は焼き殺された後にその灰を空中に散らして仕舞ふやうにと宣告された。武士はその後直に美しき處女と結婚した。二人の間に多くの子供があつた。そして彼れは是等の多くの家族と共に幸福な生涯を送つた。

### 〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は基督である。武士とは人間、妻とは肉慾である。靈地に參詣するといふのは善行によりて天國に入らうとすることである。賢者とは賢い懺悔聽取僧のことである。情婦となつた學者は悪魔である。蠟人形は人類の驕慢と虚榮心を現はしたものである。風呂とは懺悔である。鏡とは聖書のことである。この聖書こそは罪の箭を避けしめる物である。

### 〔考證〕



蠟人形を造つて呪咀の標的となす思想は非常に古い時代からその例に乏しくないのみならず、最近に至る迄この風習が東西共に多く見られるところである。例へば文學上では西紀三百年の昔に於て既に埃及のアレキサンドリアの文豪セオクリタスがその牧歌文學の中に於てこれを書いてゐる。亦ウァーシルヤホレス等の文學にもこの思想が出てゐる。第十九世紀に於ても英吉利文豪ロゼンタイはこれを詩の題材として取入れてゐるほどである。蓋しアリアン民族が原始的に共有してゐたものでは無からうか。特にアラビア思想はこの迷信を強める上に多大の力があつたやうである。

靈鏡に對する迷信はアラビア思想の最も特色ある點である。チヨースアの『カンタベリー物語』の中にも靈鏡思想が到る所に現はれてゐる。是等は概ねアラビア文學の影響を受けて中世期以後大に歐洲文學に取り入れられたものである。

### 1011. 事を行ふ時に注意すべき三つの事柄

ドミシャンは賢にして且つ正義を守る君主であつた。如何なる罪人といへどもこの君主の眼をごま化して罪をまぬかれることは出来なかつた。或日王が卓についてゐると一人の商人が來て門を叩いた。門番はこれを開けて何の用があるかと問うた。商人は答へた。

「私は有益な物を賣りに参りました」

門番は商人を王の室へ導いた。商人は頗る鄭重に國王に敬禮した。皇帝は言葉をかけた。

「友よ、お前は如何なる商品を賣らうとするのか」

「陛下、私の商品は三つの金科玉條とすべき格言であります」

「ではその三つの格言をどれほどの代價で賣り度いのだ」

「陛下、三千フロリンで……」

さうか、よし／＼、だがその格言が私に何の役にもた、ぬものであるならば、三千フロリンは全く煙になつたと言ふもの……」

「いや決して陛下に御迷惑はかけません。お役にた、ぬものであれば早速代金をお返へし申します」



「よし、よし、ではその金言を一つ一つ陳べてみよ」

「陛下、先づ第一の金言と申しますのはかうであります……行ふことは賢く行ふべし、そしてその行つたことの結果を考へよ……。次に第二の金言は……間道を選んで大道を棄てること勿れ……。第三は、夫が老人で、その妻が若かつたならば、さういふ家には決してお客として一夜を明かすものではない……先づこれだけであります。若し陛下がこの三つの金言をお守りになるならば、非常に利益されることがあります」

皇帝は大に感心したので早速商人に三千フロリンを與へた。國王は特に第一の格言が氣に入つたので、この句を宮殿到る所に刻ましめた。彼れの寢室にも、或は又彼れの歩くところの凡ての場所にも……甚しきは食卓の上にも、掩布にもこの句を織り込ませたのである。

當時國內の不逞の徒は皇帝の餘りに嚴格であるのを恨んで内亂を起さうと企てた。彼等はこの目的を達することが可成り困難であると思つたから、一人の理髮師を買収して、皇帝の顔を剃る時にその咽喉を切らせようと企てた。そしてこれが爲に彼等はその理髮師に贈るに多額の金をもつてした。そ

れで皇帝がいよく顔を剃つて貰ふ時が來たので、理髮師はその髭髻をぬらし、剃刀を動かし初めた。しかし、理髮師は國王の頸の周圍を巻いてゐた手拭を偶然見たところが、その地質の中に「行ふことは賢く行ふべし、そしてその行つたことの結果を考へよ」といふ句が織りこんであるのに氣がついた。理髮師はこの格言で胸がぎくりとした。そして彼れは獨語して……「私は今日この御仁を殺害する爲に買収されて來た者だ。若し私が首尾よくこれを果たしたとしたらどうなるか……私の末路はたゞ汚辱があるのみだ。私は最も不面目な死刑に處せられるのみだ……だから私はこの文句にもある如く、私の行ふことに對してその結果を十分考へてみるのが利益なことである」

理髮師はかう考へたので、彼れの心が平安を缺き、彼れの手が震えだし、終に我れ知らず剃刀を手から落して仕舞つた。これを見て皇帝は不思議に思つてその譯を訊ねた。理髮師は一切を告白した。

「陛下、何卒私の罪をお許し下さい。實は私は今日陛下を殺害する爲に雇はれて來た者であります。然るに偶然とでも申しませうか、それとも神様の思召しであつたとしても申しませうか、私はこの手拭の文句……行ふことは賢く行ふべし、そしてその行つたことの結果を考へよとあるのを見まして大に感動されました。熟々考へてみますれば、かういふ大膽な事をやりますれば、私の一命がなくなるのは明かであります。さう思ひますと私の手は急に震えだしました。私はどうしても剃刀を使



ふことが出来なくなつて仕舞ひました。それで剃刀が落ちたのであります」

皇帝は考へた：「成程、してみるとこの格言は確かに私の一命を救つてくれたのだ。好い時に私はこれを買つたものだ」それから理髪師に對して言つた：「これ、これ、理髪師よ、汝は今日より後忠義を守るといふならば、今日は特別の恩恵を與へて一命だけは許してやるぞ」

貴族等は皇帝に對して企てた陰謀が水泡に歸したので大に失望した。そして次に探るべき方法について密議をこらした。一人は言つた。

「かくくゝの日に皇帝は或る都市に旅行することになつてゐるから、彼れが十中八九迄通過するにきまつてゐるところの間道に伏兵を設けて置いて、其所で我等一同が抜きつれて彼れを討たうではないか」

この策略が皆の者から適當なものとして認められた。

皇帝は豫期された如く出立の準備をなした。彼れは馬上で道を急いでとある十字路に來た。こゝか

ら近路があつたので、近侍の武士は國王に言つた。

「陛下、大道を乗るよりもこの間道を往く方がどれほど近いかわりません」

國王は胸の中で考へてみた：「第二の金言によれば間道を選んで大道を棄てるやうなことはあつてはならぬと教へられた。だから私はこの格言を守らうと思ふ」

そこで皇帝は近侍の武士の方を見て言つた。  
「私は大道を棄てぬからお前達はその間道を進んでゆくがよい。そして先きに着いてゐる私の來るのを待つてゐてくれ」

彼等の多くは間道を進んだ。謀叛者の一團は伏兵をしてゐた。彼等は王様もその一行中に加つてゐるものとのみ想像してゐたから、俄に襲へかゝつて彼等の大部分を殺害した。皇帝はこの報知を得て密かに叫んだ。

「第二の格言も亦私の一命を救つた」



陰謀者は彼等の策略をもつて彼等の主君を殺害することが出来なかつたので再び密議をこらした。そして皇帝がかく／＼の日にかく／＼の家に宿泊するであらうから、その機會に乗じてその家の主人夫婦を多額の金で買収して、皇帝の眠つてゐる間に彼等をして殺害させようではないかといふことに話が決つた。

皇帝はその都會に來た時に前記の家に宿泊しようとしたが、俄に思ふところがあつたと見え、その家の主人を彼れの面前に喚び出した。主人は現はれた。

皇帝は宿の主人の老人であるのを見て「お前には女房が無いか」と訊ねた。老人は「いえ女房があるですよ」と答へた。皇帝は「では私に會はしてくれぬか」と請うた。女房が召に應じて皇帝の前に現はれた。非常に若い女房であつた：：未だ十八歳にも達せぬ若い女房であつた。そこで皇帝は直ぐ侍従を呼んで「私の宿を他の家に移してくれ。是所には最早や居れぬのだから」と言うた。侍従は畏りました。左様取計ひませう。しかし、それに致しましても此の家には是非お泊め申さうと思つて萬事用意を致したのであります：：この町では先づこの家以外に御宿申すべき適當な家が無いのであります」と答へた。皇帝はその言葉を聽かうともしなかつた。彼れはたゞ「他の家で眠るから左様心得よ」と言ふのみであつた。侍従は止むを得ず其所を去つた。皇帝は密かに他の家へ往つた。そして彼れの

身邊に侍してゐた武士等に言うた：：「お前達は是所に泊りたかつたならば泊るがよい。しかし明朝夙く私と一緒にすることを忘れてはならぬ」

この家に宿泊した武士達が眠つて仕舞ふと、老人とその妻は起きあがつた。しかし彼等は國王の姿を見なかつたから、是所に居残つてゐた武士達を悉く殺害した。翌朝この事が皇帝の耳に入るや、彼れは神に對してその恩を謝した。彼れは叫んだ：：「若し私が是所に泊つてゐたならば殺害されたのだ。それ故に第三の金言も亦私の一命を救つてくれたことになる」

老人とその若き妻は彼等の家族と共に磔刑に處せられた。皇帝はこの三つの金言を生涯忘れないで遵奉してゐた。そして彼れは一生涯幸福に暮らした。

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は善良なる基督教信者のことである。門番は自由な考へを現はし、商人は我等の主基督を現はしてゐる。フローリンは道德を指差し、又そのフローリンで買入れた格言は神の御恵みを指差してゐる。大道とは十戒のことである。又間道とは惡徳の生活を指差したものである。伏兵は異端邪教の徒老人はこの俗世界、その妻は虛榮心、陰謀者は惡魔を表現したものである。